

労働旬報社 定価九五〇円

0036-028006-9204

なにをみつめて翔ぶのか

沖電気・指名解雇をこえて
今崎暁巳著

労働旬報社

なにを
みつめて
翔ぶのか



沖電気

指名解雇をこえて

今崎暁巳 著 労働旬報社

なましを
みづめて
翔ぶのか

沖電気 指名解雇をこえて
今崎暁巳著 労働旬報社



なましを
みつめて
翔ぶのか

沖電気

指名解雇をこえて

今崎暁巳

著 労働旬報社





つなごう!
沖縄電気の首脳

沖縄電気闘争支援
カンパ箱







保育園にむかう朝（東田一家）

序章 ドキュメント／名ざし首切り

——せまられた一九日間の選択

なにをみつめて翔ぶのか／目次

I よみがえる死語——指名解雇……………二

1 不吉な予感……………二

2 肩叩き……………三

3 希望から希望へ——矢つきばやの攻撃……………六

II 捨てられた「金の卵」……………八

——市川美佐子の場合

1 どうだ決心ついたか——ちらつかす「指名」……………八

2 人間の話し合いを失い……………二

3 指名解雇通告書……………五

4 十字架重く……………九

5 ふるえる職制の手……………三

——米田和恵の場合

Ⅲ 電機五〇万の仲間に、沖の仲間に訴えます……………三

——敗北宣言の臨時大会の日に

第一章 指名解雇の舞台

I なぜ無理しても「指名解雇」か……………四

——沖資本のねらい

1 体質改善・合理化のうごき……………四

2 会社のいう「危機」の正体……………四

3 三年後に史上最高利潤をめざす体制づくり……………五

——指名解雇のねらい

4 だれでもどこかに該当する広範囲な解雇基準……………五

Ⅱ 二つめの十字架——つくられた協力体制……………五

1 奇妙な行動……………五

2 一三五〇人のために一万四〇〇〇人が犠牲になれない……………六

3 地域・産別の支援もしりぞけて……………六

4 支援の輪を切る者とひろげる者……………六

Ⅲ 精一杯にささやかな抵抗……………七三

1 肩叩き問答……………七三

——大橋隆の場合

2 やめていくけれど……………七七

——勝田金次郎の場合

3 労働組合ってなんだ……………八四

——若い屋代真の悩みと怒り

第二章 夫婦無惨

I 妻の解雇と夫の差別と……………九五

——板垣夫妻の場合

1 手取り一一万円で四人で暮らせというのか……………九六

——妻の指名解雇

2 不正を正す日まで——夫は徹底して差別され……………一〇〇

Ⅱ 家のローンと子どもとたたかいたい……………一〇三

——高崎の五人

1 五人のたたかいたい……………一〇三

2	活動家夫婦として……………	一〇八
	——長井夫妻の場合	
3	支援のひろがり……………	一一三
Ⅲ	夫婦一緒に首切られ……………	一二五
	——若い相原夫妻の場合	
1	子どもが生まれるというのに……………	一二五
2	沖繩から夢を抱いて大企業へ……………	一二七
3	はじめて知った道……………	一三二

第三章 人間使い捨て

——技術革新・体質改善の名のもとに

I	一〇億余の黒字転化と大量新採用のなかで……………	一三九
	——解雇後一年が証明するもの	
Ⅱ	残酷の一語——中高年の場合……………	一三三
1	玉突き、CWGグループ編入・ローンも終わらず……………	一三三
2	日向ぼっこが唯一の楽しみ……………	一三四
	——馬鹿にされても恥ずかしくても	

III	私たちの運命——現代女工哀史……………	一三七
1	電機の脚光を支えた短い青春……………	一三七
2	職場・生産体制の急変のなかで……………	一四一
IV	危険を押しつけ、管理支配は一貫……………	一四四
1	機械に人間を合わせる生産……………	一四四
2	下請け関連支配は労組支配も一体で……………	一四七
	——金石舎、蔽特殊製鋼の実際……………	
V	技術者たちの運命……………	一五三
	——人間と技術消耗のなかで……………	
1	激変する技術とともに使い捨て……………	一五三
	——研修・育てることをせず……………	
2	対話——技術者たちの悩みと期待……………	一五六
第四章	新たな連帯を求めて……………	
	——若者たちはいかに食い、生き、変わったか……………	
I	技術を失いたくないと痛切に悩むなから……………	一六六
	——渡辺秀雄の場合……………	

1 一〇年争議で心中はイヤだ……………一六

2 やっぱり、会にもどって……………一七〇

——頼もしい妻の一言に支えられて

II 五人組をつなぐもの——仕事と友情をとりもどす……………一七四

——東田稔と四人の友

1 消えゆく機械職場にこめた青春……………一七四

2 引き裂かれても引き裂かれても……………一七六

III シラケ世代の変革……………一八三

——二〇代はなにをみつめて翔ぶのか

1 人生のイロハを争議で学び……………一八三

2 自分たちの世界と文化をもちたい……………一八八

IV なぜ『現代青年』が動かされたのか……………一九三

——二二歳の八島崇好の場合

1 人生初めての深い、裏切り、にあい……………一九三

2 絵・ピートルズ・フオーク……………一九九

そしてオートバイを限りなく愛し……………一九九

3	初めて知る新鮮な人びととの出会い……………	103
	——父母とも未知の人たちとも……………	
V	たたかひの中の新しい門出……………	107
	——真喜志夫妻の新婚生活……………	
1	首なし若者の愛の成立……………	109
2	息子たちと仲間を信じる……………	112
3	二人そろって沖電氣の門をくぐる……………	115
VI	沖のある場所は故郷……………	117
終章	芽吹き……………	
	——若き争議団の成長と支援のひろがり……………	
I	沖一〇〇年の人間扱い……………	123
	——軍用電信から超LSIを支えた力を食って……………	
1	企業の礎をきざった末に……………	125
2	高度成長を支えた金の卵たちの運命……………	128
II	解雇後の職場・勤務体制が示すもの……………	136
	——どんな職場・技術をめざしていくのか……………	

1	沖一〇〇年にむけての職場体制	三六
2	ご都合主義の査定ですむのか	三三
	——一〇年後の技術・仕事・職場の建設の見通しを	
III	若い争議団の成長を支える	三七
	——財政・家族会の充実	
1	すべての知恵と力を	三七
2	さまざまなジャンヌダークの登場——家族会	三九
IV	ひろがる支援・共闘	四五
1	電機産業・地域の支援	四五
2	かぎりなく明るい本庄の事務所	四九
	——県内の支援熱く	
3	私たちは訴えます	五三
	——職場のみなさん、電機労連とすべての仲間に	
4	問われているものは何か	五六

序章 ドキュメント／名ざし首切り

——せまられた一九日間の選択

I よみがえる死語——指名解雇

1 不吉な予感

日本人が、ここ二〇年ほど体験せず、忘れかけていた、労働者大量首切りの嵐が急激に襲いかかってきた。しかも、花形成長産業と自他ともに認める、通信・情報機器産業の大手三社の一つ、沖電気工業において一五〇〇名の人員整理という形をとって。

これまでも、ドルショック、石油ショックが起こり、「高度経済成長」が変調をきたし始めた頃から、各独占大企業系列ごとに、希望退職・出向を中心とする合理化・人員整理は、さまざまな形で、広く大規模にやられてきていた。三菱重工だけでも、数年で、本工労働者のうち、二万人近くが、希望退職・出向の形で、実質は、半強制的に追いこまれて、関連下請けやあてのない転職先を求め長年働きつづけてきた職場を去っていった。

今回の沖電気での人員整理が、どんな形をとって、どこまで、労働者の生活を脅かすことになるのか、新聞スッパ抜き（『日本経済新聞』七八年一〇月三日付）という異常な形で、「一五〇〇人整理、品川工場閉鎖」の合理化案が明らかにされた時から、労働者の中には得体の知れない不安があった。

労働者たちの心は、二つの要素が交錯し、動揺していた。業績が、同業大手、日電、富士通に引き離されているとはいえず、まさか、電機産業で、構造不況業種の造船産業でもやりにくい。指名解雇などはやらないだろうという思いと、この年、電電公社から天下ってきた三宅新社長の官僚的強圧的姿勢からみると、常識をこえたなにか異常な事態が起こるかもしれない、不吉な予感とが交錯し、底知れぬ危機感が、労働者の心を支配していた。

不安が不安に終わらない現実が、間もなくはっきりした形をとって、労働者の前に姿を現わした。

新聞発表から八日経った一〇月一日、会社は、各事業所ごと、各職場ごと、いっせいに、労働者一人ひとりに対する恐怖の首切り攻撃を開始した。

この攻撃は、まさに全沖電気工業社員一人ひとりに対する、人生と首をかけた、分断支配攻撃であり、踏絵差別攻撃であると言って言い過ぎでない。

まさしく、通信機大手メーカー、沖電気工業（資本金一六九億七〇〇万円）全社員、一万三千九百七人に対して、真正面から仕掛けられた、資本の新たな労働者支配を確立するための全面攻撃だったのだ。

具体的な首切り人数は、従業員の一〇%強にあたる一五〇〇人（後に一三五〇に修正）を目標とし、やがて、その退職者の実数は、各事業所ごとに一割強の割合で高崎事業所約三〇〇人、品川事業所約二七〇人、本店、芝浦、八王子事業所で、約五四〇人といったぐあいに確定されていくけれど、初めのうちは、誰もが、自分がどうなるかわからない、心細く恐ろしい心理状態に立

たされたことはたしかである。

まず、その裸の現実を見よう。

大企業が行なう、希望退職における首切りの現実を。

2 肩 叩 き

この日、各課ごと、課長が全員を集めて、「従業員の皆様へ」と題する社長名の印刷物を配布することから始まった。その文章には、つぎのような表現が見られた。

「従業員の皆さん

本日、私は沖電気の直面する重大な危機に対し、緊急非常手段の採用を決定した事を御知らせしなければなりません。

ここ数年來、当社をとりまく環境は年毎に厳しさを増し、そのための収益の急速な悪化を招いている事は既に御存知の通りであります。本年初頭以來、この危機に対しあらゆる角度から徹底的にその解決策を検討して参りました結果、収益構造の抜本的改善策は焦眉の急であり一刻の猶予もなく実施に移さなければならぬという認識の下に、次の如く、経営体質改善計画”を作成いたしました。

Ⅰ 経営危機回避緊急策

- (1) 重点機種市場注力策
- (2) 不採算機種種撤収策
- (3) 工場集約策

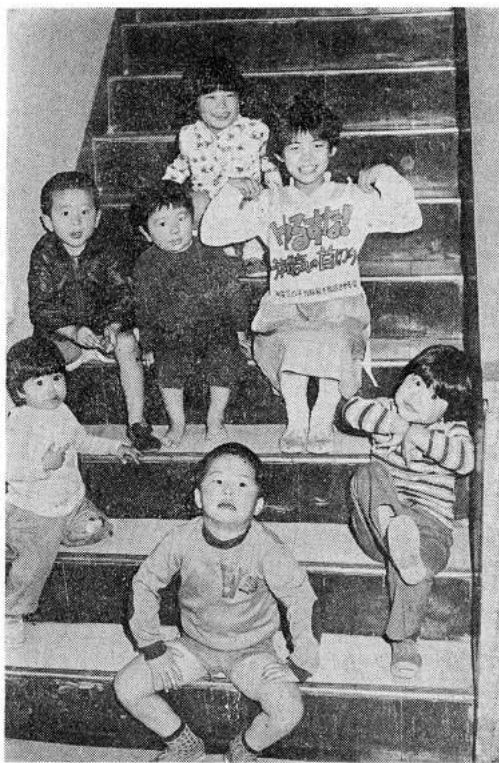
(4) 総人件費効率化策、

(希望退職の募集及び労働条件の変更)

(中略)

このような事態に至った責任は経営者として痛感するところではありますが、現状最も重要な事は一刻も早くこの事態の打開を図る事であり、企業経営の行き詰りが、全従業員にどんな悲惨な結果をもたらすか、更めて説明するまでもなく、昨今の数多い事例の中で皆さんも充分おわかりの事と思います。それだけは何としても避けなければならない。この気持は皆さんも私と全く同じであろうと思います。自らの力でこの苦境を切り拓いて行こうではありませんか。……」

経営危機をきり抜けるための四つの策は、会社の説明によると(1)は、もう電子交換機の時代に変わろうとしている状況の中で沖電気の最大収益源だったクロスバー交換機の寿命は終わり、次の主力製品をつくり出そうということ、(2)は、不採算機種や欠損の大きい機種は思い切って、製造中止すること、(3)は、品川工場を芝浦工場に合併し、全体として、生産工場を地方に移すという事、そして(4)は、経営を圧迫する最大の原因は人件費だから、機種の電子化を進め、合理化を進めるために、剩員を今から整理し、首切るということ。重点は、もちろん、四番目の、人があまっているから首を切るという項目であり、その点を各課長たちがくり返し説明し、一人ひとりを呼んで、この会社の意志を伝達し確認をとることから、会社の最初の行動が始まったのである。だが、大切なことは、よく注意してみると、この段階から、もう全部の従業員の中で、首切



子どもたちのために一人間・生活・仕事破か
いを許さない

り対象になる人間と、そこから外される人間とを区別し、前者には、徹底した脅迫まで行なう
「肩叩き」の方法がとられ、後者には、おまえは大丈夫だから会社に協力しなさいという「逆肩
叩き」の方法がとられ、社員間の気持の離反と、解雇撤回の運動が起これないための周到な準備
が、職場で進められていたのである。

沖電気労働組

合は、すでに、
新聞報道のあつ
た二日後、一〇
月五日、合理化
提案を出させな
いたためのストラ
イキ権確立の投
票を行ない、八
六・六%の賛成
で、人員整理が
行なわれれば組
織をあげてた
かう意思表示を

していた。このストライキの主旨は、首切りは出させない前に叩かなければならないという認識から考えられていた。だが、会社は、この労働組合の行動を無視するかのようになり、あるいは計算しているかのようになり、自信をもって、いっせいに行動を開始した。

多くの部課で、初めに全員に簡単な面接を行なうたうえで、ひきつづき特定の人を呼び出し、いよいよ退職の勧めのための「肩叩き」を開始した。「肩叩き」とは、職場で上司が部下に、「もう、そろそろどうかね」と、退職の勧めをすることを意味する日本の職場慣行を指している。労働組合はこの点に関しても、もし会社が個々の労働者に肩叩きをしたら、即刻、組合を通じて抗議し、個別には退職勧奨に応じない態度を確認していた。だが、現実には、組合の組織的なたたかいを最後まで行なえた職場は、八王子事業所以外にはないといっている状態である。後は個々の組合員や職場グループが必死にたたかい、抵抗するのにまかされていたのが、偽らざる実情であった。

3 「希望」から「指名」へ——矢つぎばやの攻撃

ほとんど、会社の思いどおりに事態は進行し、一五〇〇名の労働者を首切るための、自由勝手な「肩叩き」が一日一日激しさを加え、労働者は恐怖と不安に怯えながら、自らの力で裸になって、会社に立ち向かわざるをえなかったのである。

私たちはまず、この「希望」という名の「強制退職勧告」の実態を知るところから始める必要

がある。一〇月一日の肩叩き開始から、希望退職申告期限の三〇日まで、「一九日間」各部各課で、課長、係長たち職制を総動員して、連日繰り返された。一人ひとりの労働者に対する「肩叩き」攻撃の実情は、大変なものであった。やがて、その全貌が明らかになるけれど、その対象者は、中高年・婦人・病弱者・活動家・夫婦一緒などなど、本来、解雇のタブーとされている層の人たちを含めて、情容赦なく、退職勧告は行なわれた。

執拗な肩叩きに耐えられず、一人二人と、櫛の歯の欠けるように、黙って職場を去る労働者の数が増えていき、三〇日の期限には、ついに、一〇六〇名の退職者が出た。だが、ここで、驚くべき事態が起こった。希望退職募集第一回締切りの翌日、一〇日三一日に、約三〇〇名の指名解雇通告が行なわれたのである。

希望退職を一五〇〇名募集して、わずか一九日間でとにかく、一〇六〇名の退職者が出たのに、翌日、名指しで、三〇〇名の労働者の首を切ったのである。

予感していた不吉な事態が、はっきりした形となって姿を現わしたのである。

問答無用の名指しの三〇〇名の首切り——こんな労働者殺しの大企業のやり方を、最近、私たちは見たことがない。

やはり、まず、この実情を知ろう。

II 捨てられた "金の卵"

——市川美佐子の場合

1 どうだ決心ついたか——ちらつかす "指名"

市川美佐子(24)は、沖縄首里高校夜間部を卒業後、集団就職し、六年働き、職場結婚して、現在、品川工場部品一課に所属している女性である。

彼女に決定的な危機が来たのは、一〇月三十一日、指名解雇の通告を受けた時だった。彼女の所属する部品一課では、佐藤一夫(32)、板橋秀吉(34)、加藤貞子(26)、大塚喜久枝(21)と彼女を含め、五人が指名解雇の対象になっていた。希望退職の肩叩きを受けた労働者は、女性を中心にもっと多く、すでに何人かの人がやめた末に、五人が指名されたのである。だが、この肩叩きの段階で、すでに指名解雇のリストができあがっていた兆候がはつきり出ている。男性の板橋は、みんなの前で、課長にのしられて、「お前は、指名解雇だ!」と公然といわれたのである。

彼女に対するA課長の態度が露骨になったのは、三度目の呼び出しの時からだった。

二度目の呼び出しがあった時、美佐子は、労働組合を通じて話すことになっているからと、断った。多くの組合員が、労働組合が、首切りをはね返す行動をとることを信じて、忠実に、その

行動をとった。最初のうちは執行委員や支部委員と一緒に会社に抗議してくれる場面も見られたが、次第に沈黙し、職場ぐるみの首切り撤回行動がとれなくなっていた。幹部たちは忙しかったり、他にやることがあることを理由に、会社に「肩叩き」を抗議し、たたかう行動をとらなくなっていたのが偽りのない現実であった。

彼女も組合に駆けこみ、書記長に話し、執行委員にも相談したけれど、交渉の応援には来てくれなかった。

「業務命令だから、すぐ来なさい」

課長の厳しい言葉に従わざるをえなかった。彼女が応接室に入り、椅子に腰をおろすかおろさないうちに、課長がせきこんでいう。

「どうだ！ 決心がついたか？」

希望退職に応じる決心がついたかどうかを聞いているのだ。

「あの……私は、やめたら、困ります。夫も、やめるようにいわれています。やめたら、生活できませぬ。やめるわけにはいかないんです」

美佐子は、ソフトウエア部門で働く夫にも、肩叩きが行なわれていることをいい、一生懸命働きたつづけたい気持を訴えた。A課長はおさえつけるようにいう。

「そんな強情はって、指名解雇になってもいいのか！」

美佐子は、「指名解雇」という言葉に怯えた。

同じ課の病気の夫をもつ I 子が、同じことをいわれていた。課長は I 子が夫と知り合った経緯を事細かに聞いたうえでいったという。

「旦那との生活を大切にしたら良かったら、黙って、沖セラへ行きなさい」

沖セラとは、千葉県にある沖関連企業の一つのことなのだ。とても遠いし、賃金は安くなるだろうし、彼女が、考え渋っていると、声を大きくしていった。

「もし、行かないなら、指名解雇で退職金の割増はつかんし、仕事もないぞ」

退職金の割増とは、希望退職に応じれば、退職手当の一五%の割増とプラスアルファの定額加算金がつくことをいっているのだ。I 子がひるんでためらっていると、気持を見すかすように追いこんでくる。

「その気になってくれたら、アパートも世話するし、借金の面倒も見てあげるよ」

それでも、必死の思いで耐えながら、I 子が黙っていると、つぎの瞬間には、掌を返したように、厳しい口調で、切りこんでくる。

「まだ、迷っているのかね？ そんな時じゃないだろう。指名解雇になったら一巻の終わりだろう。とにかく、ズバリいえば君は遅刻欠勤が多いんだよ……それに、前に俺にたてついたこともあったよな……」

それでも、I 子が、返事を洩ると、ダメを押すようにいった。

「一課には、女性があまってるんだよな」

N 子の場合には、病欠欠勤が多いのを理由に、「ご勇退を願います」といんぎん無礼にいわれた。

やはり、返事を決っていると追いうちをかけていわれた。

「希望退職に応じない場合は、指名解雇ということになります。もし、最後まで抵抗すると、後にはなんの補償もなくなり、再就職もできなくなりますよ」

彼女も、「下請けあっせんするよ」といわれたけれど、具体的な話はなにもなく、そのうち、課長にいわれるのが恐ろしくなり、いつの間にか会社に来なくなってしまった。N子もI子も間もなく、誰にも話さないまま、会社を退職してしまった。

2 人間の話し合いを失い

労働組合が、後に、述べるような事情で、たたかうことをやめ、攻撃をうけた労働者が集まり、たたかいは始めなければならなくなったのだから、事態は容易ならぬところに来ていた。首を切られた労働者の中で、労働組合の指導的仕事をした経験のある人たちが中心になり、解雇撤回させる共同行動を開始し、毎日、情報を交換し合い、助け合って、たたかいつづけたけれど、会社の攻撃は、はるかに深く、広く、さまざまな手段・方法で、一瞬一瞬、労働者に襲いかかってきた。全職制を動員し、労働組合員の中の下級職制部分や会社協力者を使って、労働組合の職場集会そのものを会社ベースにかえ、まさに恐怖の労働者支配を刻々と、強めていた。悲しいかな、I子たちのように、指名解雇までちらつかせて、脅迫され、やめていく事態がおこっても、そのことを、その場でたたかい、くい止める力は、労働者集団に不足していた。

それでも、労働者はたたかいつづけた。なにがあらうと、あきらめることはできなかった。

美佐子は必死に、自分がどうしたらいいかを考え、先輩たちに相談し、夫ともくり返し話し合った。

夫と二人、やめるわけにいかない、頑張り抜こうかと話し合ったけれど、自信がもてず、どうしていいかわからなかった。夜、肩叩きされている仲間に会い、語り合うのが頼みの綱であり、たたかう勇気の源泉だった。夫婦とも肩叩きをされている何組かがいることも聞いていたけど、なかなか決心がつかなかった。

そのうち夫が、自分がやめてもいいと、いい出した。彼は、今度の合理化の少し前に、それまでやっていた検査の仕事から、ソフトウェアの仕事に配転させられ、ほとんど仕事を教えられなのまま、放置されていて、この際、他の職場にかわってもいいという気になっていた。

美佐子は、夫と二人首になる恐ろしさを思いながら、必死に課長にたちむかった。

課長はかまわず押しつけてくる。

「今、希望退職したら、退職金が割増になるんだよ。君の場合、いくらになるか、わかるか？自分で、計算してみなさい」

美佐子の前に、紙とエンピツをおき、計算するように催促する。美佐子がじっと答えないでいると、仕事のことをいい出す。

「どうだ？ お前の仕事の量は……一流かな？ どうだ？」

「みんなはどうなんですか？ みんな一流なんでしょうか？」

美佐子は言葉を選んで余裕はなかった。相手がなにをいうかを判断する暇もなかった。

「みんな一流とはいわんが、君よりは、みんないいな」

A課長のいい方は露骨で、意地が悪かった。今度のことが起こるまでは、これほどのことはなく、穏やかに仕事のことなど話し合ったこともあったのだ。美佐子は、つぎつぎ、いいこめられているうち、胸にあついてものがこみあげてきた。せい一杯、声を出していった。

「私は……これまで、一生懸命働いてきました。残業も、休日出勤も、いわれたとおり、一生懸命やってきました……人並みにやってきました。なぜ、私だけがいわれるんですか……」

必死に話す美佐子の胸に、沖電気に入社して六年、寮と会社の往復で、仕事仕事で今日までやってきた思いが、強く、あつく、こみあげてくる。電子交換機、無線、PCM、モデム、ファックスなど、各種電子製品の基板に、必要部品をとりつけていくのが現在の彼女たちの仕事。最初は、ハンダづけで火傷をし、同じ姿勢の取りつけ作業のくり返して、すっかり肩を凝らせて、沖電気入社最大の目的であった、保母学校にも通えなくなってしまった。一八歳から二四歳まで、一番大事な時を、会社の製品開発による作業の変化にふりまわされ、ただやたら忙しく、わけもわからず使われて、今日まで来てしまったのだ。やっと結婚できて、二四歳。まだ若く、これから新しい人生を考えているのに、会社はもうやめてくれというのである。

美佐子は、悲しかった。口惜しかった。

A課長は、美佐子の気迫に押されて、話題をかえる。

「従業員の皆様へ」は読んだのか？」

「はい、読みました」

「本当に読んだのか？」

「はい」

「ほんとか？ 本当なんだな？」

A 課長の声が次第に大きくなり、机を叩きながら迫ってくる。

「間違いないな？ 読んだといたんだな！」

美佐子は、大きな声と机を叩く音におびえて悲鳴をあげた。

「そんな、そんなに、大きな声出さなくてもわかります」

課長は、急に態度を柔げていった。

「わかった」

美佐子が、もう我慢できなくなり、

「失礼します」

と立ちあがると、また、大声が飛んだ。

「座りなさい！ 立っていいとはいっていない！」

もう、これは、人間と人間の話し合いなどではなかった。美佐子は、生まれて一度も、こんな言葉で、人に怒鳴られ、脅されたことがなかった。親からも、学校の先生からも。だから、無我夢中で、叫ぶだけだった。

「私は……やめません……絶対に……」

課長は、美佐子を見据えるようにして、さらに、かさにかかっていった。

「拒否するんだな……本当に、希望退職を拒否するんだな……」

3 指名解雇通告書

美佐子は耐えた。朝起きて、A課長の顔を思い出し、会社に行くのをやめようと何度も考えたけれど、一度休めば、そのままずるずると休んでしまいそうで、一生懸命頑張って会社の門をくぐりつづけた。

一〇月三十一日、ついに心配していた、「指名解雇」が現実となり、美佐子にもつぎの文章で始まる指名解雇通告書が届けられた。

「通告書

市川美佐子殿

沖電気工業株式会社

取締役社長 三宅正男

すでに、御説明申しあげた通り、当社は人員合理化を実施するのやむなきに至り、遺憾ながら貴殿に退職願わねばならないことになりました。

ついては、退職申出期限を昭和五十三年十一月六日正午までとし、それまでに貴殿より当社に対し退職の意思表示をされた場合には希望退職扱いとし……（中略）……右期限までに貴殿より退職の申出な

き時は、この通知書を以て、就業規則第七十四条第七号の規定により昭和五十三年十一月二十日付にて貴殿を解雇致します」。

まったく問答無用、情容赦ない名指し首切りの文章がこれである。美佐子は、同じ職場で頑張る四人の同僚とともに、この通告書を、仲間の申し合わせどおりにつき返して、十一月一日以降も、会社に通いつづけた。A課長は連日、美佐子をせめたてた。仕事も今まで一緒にやっていた大塚喜久枝と切り離され、一人で基板組立ての仕事をやっていた。

A課長が大声を出さない時は、B係長が側に来て、やさしい声でささやいた。

「もうやめた方が君のためがいいね。仕事を紹介してあげるから、そうしなさい……」

また、美佐子がやめないのは、誰かにいわれているのではないかとか、私を信じないと、不幸になるよともいわれた。

ついに一月六日がやってきた。

お昼前に、A課長が一人で仕事をしている美佐子の側に来て、仕事をやめるようにいった。

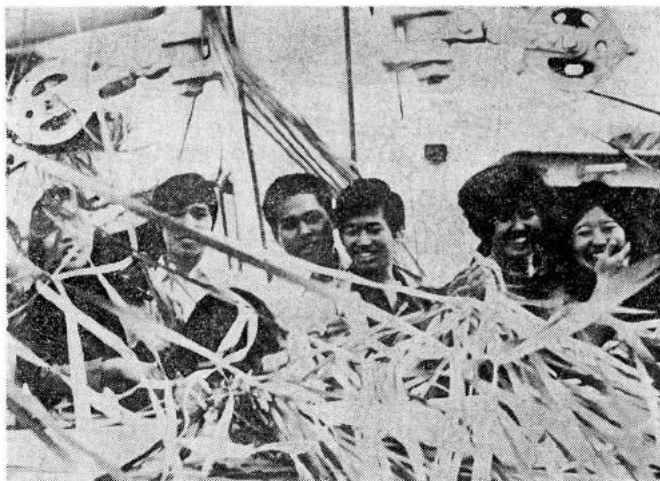
美佐子は、恐ろしかったけれど、黙って仕事をつづけていた。

「仕事をやめて、話を聞きなさい！」

A課長は、声を大きくして怒鳴り、働いている美佐子の右腕を払いのけていった。

「みんな話を聞くのに、君はなぜ、素直に聞かないんだ！ いいか！」

課長は、周囲のみんなに聞こえるように、一段と声を大きくしていった。



集団就職した「金の卵」を使い捨てる

「もう、仕事はやらなくていい！ 仕事やめなさい！ いいな！ もう」

さらに、ダメを押すように叫んだ。

「もう、会社に出て来なくていいんだ！」

美佐子の頭はすっかり混乱していた。顔がほてり、耳ががんがん鳴り、手も足も震えている。この頃から、美佐子の身体はA課長の怒鳴り声をきくと震え出し、止まらなくなるようになった。なにか胸につかえているのだけれど声にならず、美佐子は、自分が、今、なにをどうすればいいのかわからなくなっていた。

昼休みになると、美佐子はトイレに行き、喜久枝と会った。喜久枝も、課長から、もう会社に出て来なくていいと宣告されていた。沖繩出身の後輩Kも来て、話しているうちに、今まで我慢していた涙がふき出して、思わず、泣き声をあげた。喜久枝も泣き出した。Kも泣いて、三人、抱き合って泣きつづけた。Kと三人いつ

も、食堂に行く仲だったので、この日、二人が来ないのを心配してKが探しに来てくれたのだ。
「どうする?」

「こわい」

「もう、会社に来るなっていうんだから……」

美佐子も、喜久枝も、涙をふいて、ロッカーの荷物をまとめて、会社を出た。Kが、会社の近くの喫茶店で、二人のために、サンドイッチとコーヒーをおごってくれた。

「なんていいかわからないけど、元氣出して下さい」

美佐子と喜久枝はKと別れて、美佐子のアパートにいった。寂しくて、喜久枝も寮に帰る気がしなかったのだ。

アパートで、二人いても、口をついて出てくる言葉は課長のことだった。

「私、こわいよ……」

「明日から、どうしよう……」

「まだ、二〇日まで、行くんでしよう……」

指名解雇の期日は一月二〇日となっているのだ。

「……会社行くのこわい……」

美佐子は心の底から、もう会社には行きたくなかった。大声で、みんなの前で怒鳴りちらざれ、*「犯罪者」*のような扱いをうける屈辱にたえられない。もう、恥も外聞もなく、会社をやめて、両親のいる沖縄に帰りたい。両親の懐で、思いきり泣きたかった。なぜ、金の卵で、就

職した自分が、数年後に、こんな辛い思いをして、会社を追い出されなければならぬのか。喜久枝は、美佐子より三つ下。同じ年に、千葉の中学を卒業して、沖電氣に入社してきた時から、姉妹のように、いろいろな一緒にやってきた仲。姉役の美佐子が泣けば、もう、どうしようもなく、とても寮に帰っていく気持にはならないのだ。悲しみが後から後からこみあげてきて何度も、思い出しても、二人は手を取り合って泣いた。

4 十字架重く

夕方になるのを待ちかねて、二人は、指名解雇を受けて、一緒にたたかい始めた仲間たちの集まりに駆けつけた。

「首を切らせない会」——美佐子にとって、この時ほど、自分たちでつくり出した、この労働者の自主的組織の名がなつかしく、力強く感じられたことはなかった。

肩叩きが始まり、労働組合が一人ひとりの労働者を守り、たたかうことをしなくなるなかで、やむをえず、この首切り攻撃とたたかい、労働者の首を切らせないためのたたかう組織として、生まれたのが、「首を切らせない会」。本店営業の中山森夫(37)、芝浦の辻野正弘(37)、品川の中屋重勝(34)、北村晴夫(32)、梅沢規子(43)、松本謙司(33)といった、先輩労働者たちが中心になって、この集まりは、毎日、つづけられていた。

それぞれの事業所、職場で労働組合活動に経験のある先輩労働者が中心になり、この非常事態

の中で、一人でも多くの労働者が結集し、たたかう方向をつかもうと必死の努力をつづけていたけれど、なんとしても、全事業所一万数千の労働者に対する会社の攻撃を受けとめるには力不足だった。先輩活動家たちが不眠不休で、職場の労働者の状況をつかみ、支援連帯の行動をとることに努力していたけれど、その影響を及ぼしうる範囲は限られていた。だから、美佐子や喜久枝のような異常事態がおこっても、その場で状況をつかみ、反撃することは、不可能であり、しかも、各事業所各職場で一刻一刻、同じような攻撃、弾圧が つぎつぎに行なわれていたのである。

独占大企業が一度、労働者を首切り、あるいは、組織分裂させようと決意し、実行する時は、まさに、武器なき戦争といった迫力で、攻めかかってくるものである事実を、かつて、三菱重工長崎造船所の一万八〇〇〇の組合員をわずかひと月で、一〇〇〇人にまで減らしてしまった三菱経営者のやり口に見たけれど、今回の沖資本の名指し首切りの迫力もまた、それにまさるとも劣らない状況であった。

たたかう労働者は、毎日、歯がみしつ、全力を出しきってたたかいたが、なお、隣の仲間が去っていく悲しみと怒りを、日々、味わいつづければならなかったのだ。

この日、美佐子も喜久枝も、集まりにたどりついて、みんなの顔を見た瞬間、涙がこぼれ落ちそうになった。

電気の明りが、暖かく、みんなの話し声がなつかしく、美佐子と喜久枝は、一生懸命、この日、職場であった事実のすべてを、仲間たちに報告した。

同じ課の加藤貞子が、二人が帰ってしまった後、課長が大騒ぎして、係長たちを動員して、二

人の行方を探したことを話してくれた。誰かが、A課長が、美佐子と喜久枝の行方を探した理由を話した。

「課長は、心配して探させたわけじゃねえんだ。自分の首のことを考えて、青くなったのさ。二人にもしものことがあったら、時期が時期だから、自分が責任とらなきゃならないとね。新聞に出て、沖電気の課長が女子社員二人をいびり殺したなんてことになったら、事だから……」

美佐子は聞いているうちに、どんな時にも、自分の都合しか考えない、A課長の人間離れした冷酷な人柄を思い出し、胸の奥からつきあげてくる、熱い憤怒の涙をかみしめた。

夢と希望と人生を託して就職し、一生懸命働いてきた、彼女のかげがえのない職場を、喜久枝と二人、逃げ歩き、みじめな気持ちで脱け出さなければならなかった、この屈辱と憤怒の一日。

美佐子は、今、仕事と青春と結婚生活、彼女の一番かけがえのない財産を打ち砕かれ、ここから、指名解雇者の重い十字架を背負って歩み始めなければならぬ苦しみを思った。

夫は妻だけは残って欲しいと、自ら希望退職の道を選び、去っていき、妻も夫の悲願は生かされずに、ついに、指名解雇の鎖につながれてしまった。若者たちが、一度も味わったことのない冷酷で非情な、資本による人間殺しの真実。美佐子の眼から涙があふれ、身内から、激情がほとばしる。

美佐子はこの時ほど、先輩や同僚たち、ともに手を取り合い、語り合う仲間たちを、嬉しく、頼もしく思ったことはない。人の情、友情がこんなに暖かいものだと思ったことはかつてない。

美佐子は、すべてを奪われたけれど、この人たちとなり、明日も一緒に顔を合わせ、一緒に歩いていけると思った。

美佐子は、喜久枝とともに、この夜、明日から、なにがあっても、みんなと行動をとともにして、退職期限の日まで、会社に、通いつづけようと誓った。

A課長の怒鳴り声は、いっそう大きく激しくなっていたけれど、美佐子は、もう自分からやめようとは思わず、指名解雇期限の一月二〇日まで、毎日、職場に行き、仕事をつづけた。

5 ふるえる職制の手

——米田和恵の場合

トイレでのつらい思いといえは、八王子事業所の米田和恵(32)にも忘れられない体験がある。和恵は一児の母、夫も同じ事業所の優れた現場技術者として職場リーダーとして働いており、その彼女に対して、指名解雇通告が出されたのである。

彼女は、一月二〇日の指名解雇期日が近づくにつれ、気持が高ぶり、C課長と顔を合わせることを極度に避けた。期限の前日、一日中、課長と眼を合わさないことに全力を集中した。彼女が、ずっと指名解雇通告を受けとらないで来たので、課長がなんとしても手渡したがっていることはわかる。明日、この職場を追い出されることになることは分っているけれど、課長から通告書を渡される瞬間を思い浮かべると、身の毛がよだつのだ。なんとも説明できない、生理的嫌悪

感なのだ。彼女は、この日、朝から、課長が自分の側に近づいてくるのを警戒しつづけた。課長の一挙手一投足が、いつも、彼女の視野に入っていた。午前中は、無事すんだ。昼休みが終わり、二時をまわったころ、彼女の身体はわけもなく震えた。じっとしていることができなかった。立ちあがって、部屋を出ようとした。彼女は、背中に視線を感じ、足音が確実に、こちらに近づいてくることを意識した。間違いなく課長の足音である。彼女の足は小走りになる。課長の姿が見える。彼女は、夢中で、トイレに駆けこみ、ドアをしめ、息を殺した。課長の足音がトイレの前でとまる。彼女はじっと、用もないのに、トイレに立っている自分の姿が、みじめで、情なかった。まるで、犯罪人のようにコソコソとトイレに隠れて……美佐子と同じことを、和恵も考えた。それにしても、今、人間の権利が圧殺されている大企業の職場では、トイレが、最後の人權の砦となっている、この悲しい現実。和恵は、八王子の職場でも、一日一日、会社側の攻撃が激しくなり、労働組合の職場闘争の最後の拠点がつぎつぎに切り崩されていくのを感じていた。八王子では、ねばり強く、職場での抵抗がつづけられ、いくつかの職場では、会社が、病弱者を脅迫した事実を摘発し、解雇を白紙に戻させる成果もあげていた。労働者は、よくたたかいつづけた。だが、全体のたたかいがしばんでいく中で、八王子も、次第に切り崩されていく。みんな、職制に抗議し、スクラムを組んでいた職場で、一日一日、みんなが物をいわなくなっていく。どれほどの時間が経ったか、もう、課長はいなくなっただろうと、そっと、トイレの入口から外をみた。男の背中が見えた。課長の背中なのだ。トイレの外に立って、彼女の出てくるのを待っている。彼女は、夢中で中に入った。

また、しばらく時が経った。人の足音が聞こえる。隣のトイレに入って、間もなく、出ていく気配がする。そっとあけてみると、同じ部屋の P 子である。課長の背中がみえないので、和恵は、思い切って声をかけた。

「P 子さん」

P 子は、ギクッとして立ち止まった。

「あの、すみません、私の主人に、伝えて下さい、私が、ここにいるからと……課長に追われてここにいるからと……」

和恵は、しばらく、待っていたけれど、誰も来る気配がない。P 子はこわくて、和恵の夫に伝えられなかったのだろう。

和恵は悲しくなった。情なくなつた。

夫は技術者としても、職場のリーダーとしても、みんなに信頼され頑張っている。しかし、三年ほど前に、早期ガンの手術をした身体なのだ。後二年異常がなければ、大丈夫と医者はいうけれど、とても不安でならない。彼女にしてみれば、そんな夫が職場に残り、自分が首になることで、せめて、まだよかつたと思つたりもするけれど、だが、こんな苦しい日々が、身体にひびいて、再発するようなことを考えると、いてもたつてもいられない。やっぱり、家は建つたばかりだし、子どもは小さい。

「イヤだ、やめるのはイヤだ……」

和恵は、口惜し涙がこみあげ、もう立っていることができなかつた。一時間以上も、トイレの

床の上に立ちつづけて、足が棒のように、つってしまった。

彼女は、肚を決めて、トイレを出た。そして、自分の席にもどった。

課長と見張り役の他職場の課長が、ちゃんと立って、彼女の帰りを待っていた。彼女は黙って、二人のなすがままにしていた。

「解雇通告を読みます……」

課長は、通告を読み始めた。彼女はもう、どうにでもなっただけの気持だった。ふとみると、通告書を持つ、課長の手が震えている。読む顔はひきつり、真っ青である。声も途切れ勝ちである。彼女の心に、なにか暖かいものがこみあげてきた。この課長も人間なのだというおもいがこみあげてきた。部下のトイレまで監視し、やっと、つかまえて、解雇通告を読みあげる、その哀れでみすばらしい職制の姿……彼女は、顔をあげ、一言一言をかみしめてきいた。

Ⅲ 電機五〇万の仲間に、沖の仲間に訴えます

——敗北宣言の臨時大会の日に

職場で怒鳴られ、トイレまで追っかけられ、こんな「肩叩き」の状況が、あっちの課でもこっちの事業所でも、そして、今日も明日も、組織を使い、人を使い、容赦なく労働者を襲いつづけた。

希望退職期限までの一九日間と、そして、指名解雇者の申告期限一月六日までの一週間と、あわせて二六日間、攻撃は止まるところなくつづけられた。残った三〇〇人の指名解雇対象者に対する攻撃もまた熾烈をきわめ、ここまで頑張り抜いてきた労働者たちも、労働組合が最後までともにたたかう姿勢のないことに愛想をつかし、絶望してやめていった。そして残った九三名。

一月一三日は、いよいよ、労働組合がたたかいつづけてきた九三名の労働者を、つき放し、縁を切る、大きな敗北宣言の日となった。

その直接のきっかけは、スト権の再投票でストライキに賛成する数が少なかったからだ、組合執行部は説明する。

○スト権投票の結果

総投票数	一一、二八五
有効投票	一一、二五五
賛成	二、八六六
反対	八、一四二

このスト権投票の指示内容はつぎのとおりである。

「指名解雇撤回の闘いをするには、これまで以上の長期的、連続的なストライキを闘う以外にな
い。そのためには、再度組合員の意志を確認する必要がある。また、今までのスト権は、提案を
出させないためのスト権」であったが、この権限は指名解雇がでてしまった現在の段階では有効

ではない」

この時の組合のとった姿勢と敗北宣言の事情については、次章で触れるけれど、明らかにしておく必要のあることは、ここで、労働組合が解雇を認めることにより、九三名の指名解雇者の労働組合員権もなくなり会社からも組合からもほうり出される結果が残ったことである。そして、こうして、手続上、組合からほうり出されただけでなく、その後も、沖電気労働組合は、たまたかいつづける労働者たちに、一度も支援の姿勢を打ち出したことがない事實は、明白である。

会社の攻撃に必死で耐え、労働組合のたたかわない姿勢に苦しみ、一カ月をたたかい抜いてきた労働者の一人として、中山森夫が、この敗北宣言を行なった臨時組合大会の席上、発言した。市川美佐子や米田和恵やその他大勢の、この日まで頑張りつづけてきた仲間たちを代表して、中山は懸命に訴えた。不十分にしか仲間たちへの攻撃を防ぎきれず、もう職場を離れなければならぬ無念さを胸に懸命に訴えた。

「会社は、ここ数年の経済的危機をいうが、それは、円高不況の中で、多くの企業が直面している問題であって、一人沖電気だけの問題ではありません。しかし、指名解雇によって、事を処理しようとしている大企業は、一人、沖電気だけであります。その横暴さ、無情さについては、マスコミでも大きくとりあげられ、たとえば、一月一日の『朝日新聞』には、『不況業種ですら指名解雇に踏み切る例が少ないのに珍しい』といい、『毎日新聞』でも『大量の指名解雇は極



訴える——ビラまき

めて異例のケース」と書き、一月七日の『読売新聞』は「すでに死語になったとまでいわれる指名解雇」が沖電気に出てきたのに驚きを示しているのです。

死語を蘇らせ、異例のケースとまでいわれる指名解雇を、どうしても強行しなければならぬ経営状態なのでしょううか？ 決して、そうではありません。

従業員一万四〇〇〇名の大企業において、九三名を解雇しなければ、経営危機が深まるとか、再建のメドがどうしても立たないなどという理由が、果たして、許されることでしょうか。

本日の評決は全国的にも注目されています。労働組合としての存在そのものが問われていると私は考えます。

最後に、私は代議員の皆さん、傍聴の皆さんに、心から訴えたいことがあります。



だれもが人間らしく生きるために（中山一家）

私は、沖電気で、一五年間働いてきました。同時に、かつて本店支部副委員長として、たかかってきた人間であります。

今後、労働組合の努力にもかかわらず、会社が一月二〇日以降、解雇者を工場から追い出すという可能性が十分あります。従って、ここで、皆さんに訴えたいと思います。

会社が、もし、この九三人を工場の外に追い出すという事態があったならば……私は、解雇は不当であると……そのことを訴えて、たたかいつづける決意であります」

（「ガンバレ」の声、拍手がおこる）

「私は、電機に働く数十万人の労働者に訴え、# 首切りは許してはならない# そういう労働者の当然の要求にこたえられるよう、会社の不当解雇の撤回を求めて、たたかわなければならぬ」と、決意しています。

私は三七歳、子どもは小学校四年生の女の子

と、四歳の男の子を持つ父親でもあります。たたかいは苦しいかもしれないといっています。しかし、不当なことを見過して、その不当なことを繰り返させることはできないのです。

このたたかいを勝利させる、もう一つの鍵は、なんといっても、沖電気に働く一万四〇〇〇人の労働者の支援であると考えています。今度の会社のやり方は、先程の樋口委員長の言葉を借れば、けしからんということでもあります。その気持、首切りを許した無念さが、みんなの心にあります。ストはできないかもしれない。しかし、それ以外の精神的な支援を含めた支え、そういう支え、そういう力で、会社の首切り撤回の日までたたかひ抜きたいと考えています。このたたかいこそが第二の首切りを防ぐ道だと考えます。九三人の首切りを通して、今後は切らない、そういう約束をとりつける、確約をとりつける、そんな芸当ができるものでしょうか。

私は、たとえ、職場を追い出されたとしてもふたたび、職場に戻り、皆さんと一緒に働き、一緒に昼飯を食い、一緒にたたかう日の来ることを確信するものです」

(拍手わきおこる)

「職場の組合員に伝えていただきたいと思ひます。スト権に○をつけた四分の一強の労働者に、そして、×をつけたけれど、指名解雇には反対である、許すべきでないと考えている、沖電気に働く圧倒的多数の労働者に伝えていただきたい。同じ労働者の首切りを防ぐことのできなかつたことに無念の涙を流している、職場の皆さんに伝えていただきたい。

会社の攻撃がどんなに強くても、われわれはたたかひつづけると。

決して、屈しない人たちが、たたかひつづけて、首切りの不当性の旗をかかげ、労働者の真の利

益を守ってたたかいつづけることが、
沖電気における第二の人べらしを防ぐ道であるということ
を訴えて、私の発言を終わります」
(大きく長くつづく拍手)

第一章
指名解雇の舞台

I なぜ無理しても、指名解雇、か

——沖資本のねらい

働く人間にとつての悲劇的な出来事が、つぎつぎに労働者をまきこみ、昨日まで夢にもみなかつた生活破壊・人間破壊の暴力が経営者たちによつてふるわれ、まかり通つた。

希望退職募集といひながら、指名解雇だと脅迫し、一人ひとり名指しで、強制的に労働者から仕事をとりあげ、門の外に追ひだしていく、このあまりにも異常で残酷な状況。その直接、下手人となり、首斬人の仕事をさせられた中間職制たちの声が震え、解雇通告をもつ手が震えたという事実そのものが、この時、この会社の中で行なわれ繰り返された行為の異常さを、端的に表現している。中間職制たち自身が、ともに働き、語り合つてきた後輩労働者の生首をとばすという、生まれて初めて人を斬る仕事を否応なく勤めさせられたのである。やらなければ自分の首が飛ぶという、切羽つまつた立場に立たされ、震えながら刀を手にしたのである。

解雇通告を受け、肩叩きをされた労働者たちの中に、

「あんただけじゃない、俺の首も危ないんだよ。頼む」

という、脅しとも泣き落としともつかない、職制たちの嘆声を耳にした人が少なくないのだ。

こうした一部職制の嘆きの声を呑みこみ、流しながら、企業の意味はあくまで強く、太く、労働者の人生に襲いかかり、人力で人間の運命をねじまげ、狂わせてしまふ。

八王子事業所でも本庄事業所でも、職制たちは、療養中の病人の枕もとで、退職強要し、家族に向かつてまで、大きな声を出し脅迫した事実は明らかで、この企業の暴力の日々に耐えかね、ついに、生命を縮める痛ましい出来事まで起こってしまった。二人の中高年労働者が、この職場の修羅の現実能耐えきれず、一人は自ら生命を絶ち、一人は原因不明の突然死で、この世を去っていったのだ。

病弱者、中高年、女性、そして、夫婦共に——資本主義的労使関係の中でも、もっとも手をつけてはならない、いわば、タブーともいえる、労働者層への情容赦ない首切りを強行した、この明白な事実。

それにしても、沖資本は、なにゆえ、これほど冷酷非情で、労使というより人間の道に外れたやり方をしてまで、労働者の首を切ったのであろうか。

労働者市民層の批判だけでなく、マスコミの批判、さらには産業界内部ですら常識外れのやり方という批判が出るほどに、乱暴なやり方で、なぜ指名解雇を強行したのだらうか？

1 体質改善・合理化のうごき

ここに、一つの文書がある。

「社内の学卒者に同様のことがないでしょうか。高度成長期に大量に入社した人たちも、そろそろ勤続一〇年をこえようとしています。他社との見合いから必要以上の「昇格」が行なわれ、何を任務とするのか意味不明の部付・課付、その他の役付が多くなって、なかには朝から新聞に読みふけっている姿が散見されることはみなさんも知っているでしょう。しかし、誰もそれを追求しません。

社内にはいくつかの部門がありますが、これらは、全体としてみたとき必ずしも有機的に機能しているわけではなく、〇〇本部や〇〇事業部がバラバラにかつてにやっているかのようにあり、組織機構の新設、改廃も担当役席の専決事項のようになっていきます。仕事がさきというより人がさきで、グループや部等ができていくのではないかといっても過言ではないでしょう。また、「偉い」ということを「専用自動車に乗れること」というように考えている人はいないでしょうか。このようなことは沖電気の関連会社にも共通していません。親会社によりかかりながら必要以上の「無駄」をやってはいないでしょうか。これからも勇気をもって点検・摘発することが必要と考えます。

沖電気の経営体制上の問題点は、ここに具体的にあげたもの以外にも、まだあるでしょうが、以上の諸点が一時金闘争の団体交渉を通じて主張したことの要点です」

つぎに、もう一つ、同じ組織団体が書いた、沖電気合理化提案一〇項目がある。要約されたものを紹介する。

「1、組織・機構の改革 従業員全員の総合力を再建に向けて發揮させるためには、集中管理を基本とする体制をとるべきだとし、事業部制の廃止と次の改革を提案する。(1)社長室の強化(2)本社に管理・技術・営業・製造の四本部を設け、常務クラスを本部長に全社的な部門統轄を行なう(3)各事業場には本部派遣のスタッフを常駐させる。

2、総合技術・商品の開発

3、営業の拡大 セールス・エンジニアの育成、トップ・セールスの強化などを強調。

4、製造体制 各事業所を製造工場として明確に位置づけ、あわせて原価通減に向けた製造技術の改善の任務を与える。

5、部品の標準化と信頼性の向上 一次加工品の一元化、資材・部品・外注の一元化をはかることにより原価通減、部品の標準化、信頼性の向上をはかる。

6、保守サービス体制 保守サービスは技術的な要素が高いが、技術的には極力、設計でカバーし、保守サービス活動を営業活動と有機的に結合させる(注||沖電気の人件費比率が高い原因の一つは、約一七〇〇人にのぼる保守サービス要員を抱えていることにある、といわれている)

7、管理部門の集中化 権限の集中化によって集中管理体制を強化し、指揮命令系統を一元化する。

8、信賞必罰 各部門の責任と権限を明確にするとともに、ぬるま湯的体質を改善するために、社会的に認めうる信賞必罰を徹底する

9、資産の活用 借りビルを廃止し、既存の建物に集中するなど、建物の効率的活用を考える。

10、関連企業対策 関連企業各社はそれぞれ完全独立させ、同時に、若手の投入によってその活力をよみがえらせる」。

この二つの文書は、いづれも、沖電気工業労働組合が、沖電気の経営について、体質改善と合理化を提案した文書である。

前者は「指名解雇」の二年前、会社が売上げの停滞など、有史以来の危機をいい合理化・体質改善を強くいざいだした一九七六年の一時金闘争の時に、『組合の経営批判を生かそう』というタイトルで発表されたものであり、後者は「指名解雇」の半年前、春闘の中で『会社再建への提言』という形で、提出されたものである。

これらの文書から理解できることは、一つは、沖電気内部に指名解雇の二年前、三年前から、体質改善、合理化の動きがあったということ、もう一つは、沖電気労働組合が、早くから、経営合理化の方向に、積極的に協力する行動をとっていたという事実である。

2 会社という「危機」の正体

沖電気経営者たちは今回の「指名解雇」強行が沖電気の経営危機を乗り切るための体質改善、合理化であることをいい、新聞雑誌など、多くのマスコミ媒体もその点を中心に、報道してきたことは事実である。

その状況と改善の方向性について、たとえば、今回の合理化の動きをスッパ抜いた『日経産業新聞』の記事はつぎのように書いている。

「同社は売上高の伸び悩みと経費の増加により、前三月期決算で四億五千八百万円の経常損失を計上、(中略)しかも、電電公社の資材発注伸び悩み、円高による輸出競争力低下など、経営環境の先行見通しも明るくない。そこで、このままでは来期以降も黒字に転換することは困難とみて抜本的な体質強化策の実施に踏み切ることになった」。

まず、三月期決算が赤字になったことを理由に、このままで黒字に転換することが困難であることをあげているけれども、この点については、沖電気労働者が組織する沖電気職場政策学習会のパンフレットが、的確にその実態をついている。

「人件費の中には七八年六月に支払う予定ということで一時金支払予想額の二分の一、二三億円がすでに含まれています。(中略)又退職勧告による人べらしの結果として退職金の支払がふえたため、それが利益をへらす原因にもなりました(七五年度は支払額七億円、七六年度は六億円だったものが七七年度は一挙に一五億円にふえています)」。

つまり、利益を増やそうとして人を減らしたために、その人たちの退職にかかわる支出で、今期の利益が減って、赤字になったということなのだ。さらに、借入金が増えてはいるけれど、総資産の伸びの方が大きいこと、また、帳簿価格一〇〇万円の評価になっている品川工場の土地が時価一〇〇億はするなど、膨大な利益が蓄積されていることなどが指摘されており、そのような人為的につくられた経常収支赤字の性格は、間もなく、七八年の決算における一挙一億近い黒

字への転換、さらに、七九年前期の増収益ランキング上位進出の事実によって、裏付けされている。

ここで明らかなのは、会社のいう危機の性格は、いかにもそれらしく説明している、企業の倒産や企業の生命にかかわるようなものではないということである。

その点では、一月四日の『日刊工業新聞』の表現がよりの確に、沖電気経営者のいう「危機」の性格を説明している。

「沖電気は交換機の電子化が進む中で、半導体技術の開発の遅れにより電電公社への交換機納入メーカーである、日電、日立、富士通、沖の公社ファミリーメーカーの中で、他三社に大きく水をあげられ、(中略)公社依存型経営姿勢が裏目に出て、売り上げ不振に陥っていた」

つまり、通信機産業大手としての沖電気が、業界の体質改善・製品開発の競争に遅れをとったということなのだ。だから、会社のいう、経営危機乗切りの方向とは、沖電気の企業体質を、原動力発電、航空機と並び、二一世紀の戦略産業である、情報産業・コンピュータ産業界の陣取り競争に互して、優位な地位を確保するためということであり、人員整理の条件となることもある企業存立の危機にかかわるような状況とは、まったく、異なる状況なのだ。

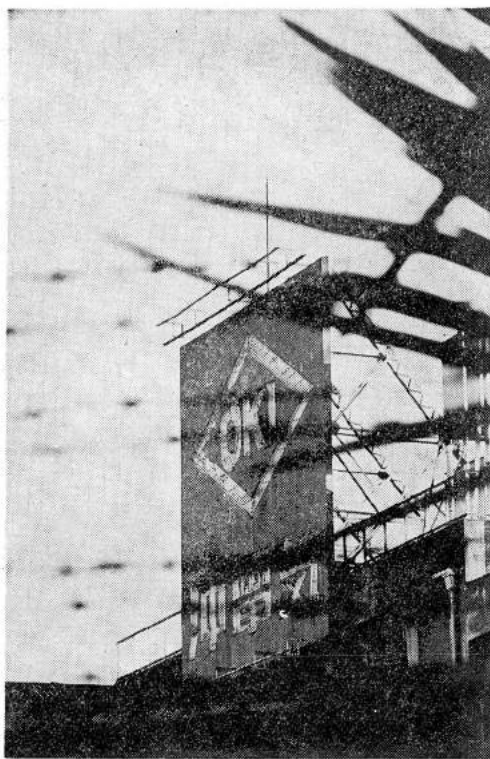
3 三年後に史上最高利潤をめざす体制づくり

—指名解雇のねらい

ここで、沖電気が、当面の生産体制変革のポイントとしている、九州・宮崎工場建設および八王子工場強化の中身である超LSI（大規模集積回路）生産について会社の説明および動向を見ておく必要がある。

超LSIとは、非常に大規模な集積回路を、非常に小さいシリコン・チップ（小片）の中に入れることが可能になり、四ミリ四方に一〇万素子が収容されるIC（集積回路）をさしている。今、電電公社の要請で、九州新工場をつくろうとしている六四キロビット・メモリの集積回路とは、六万四〇〇〇の記憶素子があるということである。そして、その一ビットとは、トランジスタ三個に相当する能力をさしているのである。つまり、現在のエレクトロニクス生産は、わずか四ミリ四方の基板に、トランジスタ二〇万個から三〇万個の能力をもった電子製品をつくりあげるところまでできたということであり、最新情報によれば日電がアメリカを追い越し、すでに、二五六キロビット・メモリの開発に成功し、最終的には、一〇〇〇キロビット・メモリまで開発可能といわれている。

この電子産業の急速な進歩発展の中で、もともと、電信電話など通信機産業メーカーとして今日を築いてきた沖電気工業が、電電公社の門戸開放とIBM社などの国際的な圧力という状況の



三年後史上最高の売上げをめざす（沖電気）

中で他社にたちおくれをとっていた通信分野全般の電子化に、よりいっそう積極的のり出さざるをえない状況が、急速に生まれてきたといえる。沖電気経営陣は、今回の体質改善を通して、旧来の体質の古さをかえるとともに、一気に、この新しい技術革新の競争に勝ち残るための工場・生産体制の再編と社内いじりを目指し、そのために、まず一方でこれらに抵抗してこることが予

想される活動家など邪魔になる労働者を「指名」によって切り捨て、一方で、それをみせしめにして、今後の体質改善・合理化体制に従順に働く労働者と労使関係の確立をねらったということなのである。

つまり、千数百人の労働者の生活

と生命を危機におとしいれた名指し首切りの理由は、会社が倒れることでも、労働者があまっているということでもなく、産業界の技術革新を乗切り、しかも、三年後には、史上最高の売上げをあげるための体制づくりなのだ。

会社の労働組合への申入れ書の中にも、体質改善を成功させた後の展望をつぎのように明確に述べているのである。

「沖百年に当る昭和五十六年には売上高一七〇〇億以上、売上利益、五%以上の達成を確信する」。

まったく、私たちが、かつて聞いたことのない指名解雇の理由である。

石油バニックの中で多くの中小企業が体験した倒産の危機でもなく、かつて政府・総資本のエネルギー政策の転換によってつくり出され、三井三池閉山に典型的にあらわれた石炭合理化における「指名解雇」の危機とも、まったく状況が違っているのである。

一つの独占大企業が、国家・総資本と結んで、あくまで意図的・計画的に、新たな独占産業構造をつくり出すために、もっとも安易で、非情な方法の人減らしとそれをテコにした体制づくりを強行したということであり、換言すれば、人間を機械・材料なみにスクラップ化し、切り捨てる大資本の勝手気ままな合理化ということなのだ。

この、独占大企業が、労働者を虫けらのように切り捨て、職場から権利をはぎとり、上意下達の労務管理体制を確立するという、権力的ファッショ的体質改善の性格は「指名解雇」直後に、国や金融資本の明確な行動となり、大変な迅速さで、姿形をあらわした。

一月四日の『日刊工業新聞』は「電電公社・沖電気再建を支援、超LSI素子発注、富士銀も設備資金を保証」という見出しで、コンピュータ産業の決め手となる超LSI研究開発グループから、沖電気だけ脱落していたのを助けるため、電電公社が超LSIの技術供与と超LSI素子の発注契約を結んだことをつぎように報道した。

「公社は現在、電子交換機の性能をさらに向上させるため来年春から六十四キロビットの超LSIを電子交換機に実装する計画を進めている。公社では、沖、富士銀の要請に対し『公社の仕様にこたえる実力を持っているかどうか不安があったが、富士銀行もこれに対する資金面のバックアップを確約したので、採用を決定、契約も完了した』とし、この結果、沖電気は来春から、日電、富士通、日立と並び同ジスタートラインで出発できることになった」。

今回の「指名解雇劇」の舞台裏が、こんなにも早く、表面に出てくることは、予想外ともいえるが、すでに三宅氏が元電電公社幹部として社長に就任した時から、このことは話題にのぼっていたことなのだ。いわば経営危機を看板にかかげて電電公社の要求に応える、上意下達の社内体制をつくることを狙って、活動家といわれる労働者を含み、会社の意にそまない、さまざまな労働者を解雇することが、この電電協力の条件として、予定されていたといっている。

まったくすべてが、計画的に仕組まれたものである。独占大企業が、なりふりかまわず、三年後の一七〇〇億円売上げ、史上最大の利潤獲得を公言し、会社の思いどおりに働く労働者づくりを目指す、名指し首切りの強行。そして、解雇の効果というには早過ぎる、七八年度決算での一億の黒字転換、七九年度上期の大きい増収益率の事実をみても、「指名解雇」が、会社経営上

ののっぴきならぬ理由で行なわれたものでないことは明らかである。

三宅社長自身が、最近、八〇年一月一七日付の『電波新聞』、新春対談の中で、「とにかく、これだけの収益をあげられるようになった。ここまできれば一安心という空気が出てくるのが一番心配である……（中略）……重病人だったかもしれないけれども、難病じゃないんだと……」

と語っているのをうけて、コメントはつぎのように語っている。

「もともと、病弊はそれほど悪質なものではなかったのに、名医でなくともと、謙そんしている」。まったく、言語道断の「指名解雇」と断定せざるをえない。もともと、悪質でもないといわれる病気を理由に「指名解雇」という労働者の生命にかかわる行為を、平然と強行した経営者たち。犠牲になった労働者たちは、その瞬間から、この労使紛争史上まれにみる、悪質で利潤のために労働者の人生を奪ってかえりみない、名指し首切りの十字架を背負って歩き始めたのである。

4 だれでもどこかに該当する広範囲な解雇基準

それにしても、この名指し首切りを強行するために使った、解雇基準の、なんと、でたらめで、いい加減であることか。

「次の各項のいずれかに該当する人には、特に退職を勧奨する」ということである。

- 一、勤務成績不良の人
- 二、勤務状況に問題のある人、例えば、
 - イ、欠勤、遅刻、早退の多い人
 - ロ、健康面や能力面で十分な業務遂行ができない人
 - ハ、勤勞意欲に欠ける人
 - ニ、懲戒処分およびそれに準ずる処分を受けた人
- 三、会社の諸施策に対し、協力度合の少ない人、例えば、
 - イ、業務上の指示、命令に従わない人
 - ロ、上司、同僚との協調性に欠け、職場の人間関係の障害となる人
 - ハ、職場規律を乱す人
 - ニ、会社諸施策に対し非協力的な態度をとる人
- 四、退職しても生活基盤を比較的確保しやすい人。例えば、
 - イ、資産があり、当面の生活に困らない人
 - ロ、共働き等により、配偶者に相当の収入のある人（同一生計を営む人が二人以上当社に勤務している場合を含む）
 - ハ、自家営業により給与以外に相当の収入のある人
 - ニ、すでに子弟が成人し、家計負担が少ない人
- 五、今後の厳しい会社施策に耐える覚悟のできない人。例えば、
職種転換、転居をとまなう配置転換および出向等ができない人

六、その他、前各項に準じ、会社に貢献する度合の少ない人」

まず、気がつくことは、この基準のどこかに該当させるつもりなら、多くの社員が、必ずひっかかってしまうほど範囲が広いということである。

少しひかえ目な人は、勤労意欲にかける人ということになるし、逆に、積極的に意見をいう人は、会社の諸施策に対し、協力度合の少ない人ということになるだろう。もし、病人であれば、業務上の傷病であれなんであれ対象とされ、現に、多くの療養中の労働者が露骨な勸奨をうけたことでもわかるように、解雇のタブーとされている病人を、公然と基準にいられているのである。

家庭や本人の事情で、出向・転勤できない時、子どもが働いている時、共稼ぎで働いている時、どのケースも、名指し首切りの理由になるといっているのである。

しかも、現実には、共稼ぎの夫婦三組を、情容赦なく、夫婦ともども切り捨てて、この基準からもはみ出す、非人間的行為を強行しているのだ。

まったく、驚きの他ない。この基準は実は日経連がつくって各企業に配布したもので、この巧妙につくられた解雇基準により、多くの労働者を切り捨てることができるかと判断した、沖電気経営者たちの経営感覚は、なんとも民主的諸制度を無視した、ファッショ^①的体質から生まれるとしかいえない。

II 二つめの十字架——つくられた協力体制

1 奇妙な行動

さらに私たちは、指名解雇者たちが、この会社の仕打ちにやられるとともに、仲間であり、自らの組織であった労働組合から、追い出され、今もって、何の支援も受けていないという、悲しく辛い事実眼をつぶるわけにはいかない。

前述の文書でもわかるように、労働組合が沖電気の体質改善・合理化に、積極的に協力してきた事實は明らかである。「生首だけとはさせない」をかかげながら、二年前から、労働組合が率先して、経営合理化に口を出し、手を出してきたという事実。しかも、よく注意してみると、中高年労働者の関連企業への出向や、就職あっせんのない解雇も含めて、相当数の労働者が沖電気をやめていつているのである。七八年の春だけで、管理職一〇〇名が退職し、指名解雇“ま”でに中高年層、管理層を中心に、四年間で一六〇〇名の人たちが、出向・希望退職・自然減不補充の形で、やめていったといわれている。そして、希望退職の形ではあるが、有無をいわせず、関連企業に出向させられ、今回の希望退職の時に、やめて来た後輩のために、結局、その会社も

首になった労働者の何人かに話をきいた。

指名解雇の年の春闘の最中に、元電電公社総務理事の三宅正男副社長が社長に就任し、人員整理を含む明確な合理化方針をひっさげて、労働組合と交渉を開始し、前述の組合の、関連企業の合理化までを含む、合理化提案が出されたのである。

さらに、この春闘の妥結にあたって、労使の秘密の合意があったという報道もある。

「妥結に当たり組合は会社の原価低減策の推進に協力することを約束した、という。

同社は内需不振と円高で、前三月期決算では大幅な赤字となるのが必至で、人員過剰ははっきりしている。それだけに原価低減策は人減らしを連想させる。そこで、業界筋の間では『予想外の高額回答を簡単に出したのは、希望退職者を募集することで労使間で、『密約』があったから』(傍点筆者)という憶測が流れているというわけ」(『日経ビジネス』七八年五月八日)。

その点は、沖労組第五回中央委員会で、樋口委員長が語った内容でも、会社側がこの春闘で合理化提案を行なった事実は明らかである。

「会社側が、①一、〇〇〇人、②一、五〇〇人の組合員の整理、③賃上げゼロ、④一時金ゼロ、検討中と明らかにしました。これは三月十三日に会社側から申し入れのあった非公式折衝で説明が行なわれたもの。」(沖労組『レポート』七八春闘一より)。

そして、沖労新聞六四号の春闘座談会の中で、ある支部委員が

「はじめに合理化の話が伝えられましたけど、何か闘争意欲をなくすためじゃないかって……だ

けどやはり賃上げと合理化が裏腹じゃないのかっていう見方でした」

と発言しているのをきくと、この春闘で、会社側が、ゼロ回答をひっこめ、あっさり六%賃上げを認めた奇妙な行動の意味がうなずけるように思う。

いずれが真実にしろ、すでに二年前から、労働組合の合理化協力の動きがあり、数カ月前からは、会社の人員整理を含む、明確な合理化決断の下に、抜本的体質改善への具体的な動きが始まっていたことは確かである。前述の、連結関連企業の一つ、金石舎の従業員に対して、沖電気本体での指名解雇基準とほとんど同じ基準で、年初めに、指名解雇攻撃が出ていた事実は、今思えば、やがて決行する本体攻撃の前哨戦とみて、不思議はないだろう。

一〇月三日に、『日経産業新聞』に「人員一割減・品川事業所を閉鎖」の見出しで、首切り方針がスッパ抜かれてから、一〇月三十一日に、会社が指名解雇者約三〇〇名を発表するまでの経緯をみても、あまりにも、事が速やかに、一気に進み過ぎている事実は、取材にあたった担当記者も語っているところである。

とにかく、当事者も、外部の記者や労働組合関係者もよく口にすることは、なにしろ、正式には、一〇月一日に始めた希望退職「肩叩き」が、期限の三〇日に、一三五〇人の目標に対して一〇〇〇名余が集まり、しかも、翌三十一日には、一気に三〇〇余名の指名解雇者を発表してしまつた、なんともすさまじい首切りのスピードなのである。

「労働組合はもちろん、経営者にしても、一度の希望退職募集で、目標数に達しなかったら、少し期間を置いて、二回三回と努力をするのが、常識ってもんです。構造不況といわれながらも、

函館ドックの労使がとことんまで意志を尊重する希望退職募集のやり方をみて下さい。指名解雇なんか、とてもとても……。経営者だってこわいですよ。それを、わずか一九日で一三五〇に對して、一〇〇〇をこしたというのに、もう翌日に、残りを指名解雇にしよう、なんですか、これは！ 初めから、指名解雇したい人間を決めておいて、問答無用で、バツサリやったつていわれても仕方ないですね。会社も会社、組合も組合。まあ、両者手を取りあったタッグマッチといわれても仕方ないですね」。

ある有力労働組合幹部の言葉である。

とにかく、プロの労働組合幹部の見方だけでなく、新聞記者の眼からも、市民の眼からも、そして、沖電気現場労働者の眼からも、今回の指名解雇をめぐる五〇日ほどの時間経過の中で起こった沖電気労使紛争の状況事実には、納得のいかない、常識はずれの事実が多すぎる。

口を開けば、沖電気労組幹部は、「ストライキ一〇波三八時間。今の民間労働運動の状況ではよくやった」というけれど、問題はその中身である。

初めに、もう会社の首切りを含む合理化案が新聞に出て、事実も明らかだったのに、なぜ、「合理化案を出させないためのストライキ権」などという、奇妙なスト権を立てる必要があったのか。組合文書は、繰り返して、「反合理化の闘いは長期化を許さない」「合理化提案の事前阻止」（沖電気労組『反合理化闘争の記録』より）をいつているが、その理屈を最初にかかげて、とにかく、「どろ沼闘争に入らないため」ということで、早く決着をつける考え方と態度が最初から決っていたとさええざるをえない。

合理化提案が出てしまったら、もう、役に立たなくなるようなスト権をなぜ立てたのか？ 組合が絶えずいつてきた、「生首はとばさせない」という合理化への基本姿勢をきちんと守って、首切りに反対するストライキ権をなぜ確立しなかったのか？

「みんなで、知恵を出し合って、『肩叩き』をどうたたかたらいいかを考えれば、いろんなことができるはず。会社の希望退職理由を一つひとつ、職場ではね返すこともできたと思う。少なくとも、みんなで相手の攻撃をうけとめて、職場を基礎にたたかうという指導がやられれば、労働者の気持は、ずっと、自信をもって、たたかえたはずだ」。

こうした職場労働者の不安と焦燥をよそに、幹部たちは、「会社と交渉中」と繰り返しながら、ダラダラと指導不在のストライキが繰り返されていったのが実情である。

職場労働者の声を結集して抗議行動を組織した八王子支部には『就業中の抗議行動はやめろ』と脅かし、どこの職場でも、一切の集団行動をとらない、奇妙なストライキが連日行なわれた。スローガンもなく、ステッカーもなく、腕章もつけず、職場から地域へ連帯を拡げようという声を無視し、まったく団結することを望まないとしかしいようなない、奇妙なストライキだった。

2 一三五〇人のために一万四〇〇〇人が犠牲になれない

八王子だけでなく、他職場でも、被解雇対象者を軸に、一生懸命、「肩叩き」とたたかい、「指名解雇」をはね返す努力は、つづけられた。影響のある被解雇対象者がいたり、やる気のある

る支部委員のいる職場では、会社側のひどいやり方に怒り、労働組合がたたかおうとしないことへの不満となにかを行動しようという声があがった。

だが、いかんせん、一人ひとりの労働者、一つひとつの職場では、全体の状況はつかみにくかったし、全体の闘争をきりひらく行動を起こすことは不可能だった。

こうした状態の中で、労働者が「ストライキをいくらうっても勝てない」「こんなストでなく、もっと別なたたかひ方をする」というふうを考えるようになるのは、当然の成行きである。しかも、「指名解雇」が出されたことは、職場労働者に、二つの重要な心理的效果を与えた。一つは、ストライキをこれだけやっても、会社は後退せず、さらに「指名解雇」まで強行してきたという無力感と、絶望感をもったこと。もう一つは、指名解雇になる人間はもう決まったのだから……という、労働者一人ひとりの気持の分断が生まれたこと。

こうして、労働者が団結してたたかう空気にはつきりしたヒビが入り始めた時に、執行部から、スト権再投票が提起され、「長期的連続的ストが必要」と、まるで、鉄砲をつきつけられながら、さあどうだというような、ストライキ権賛否の投票をやられたのである。結果は、初めから見えていたというのが本当であろう。というより、計算されていたということ。

同時に、この時期、執行部の呼びかけた職場討議の中で、会社側下級職制や労使協調的意見の労働者がいっせいに、「もうこれ以上たたかえない」「一三五〇人のために、一万四〇〇〇人が犠牲にはなれない」という発言行動を強力に展開し、彼らの力の強いところでは、指名解雇対象者に「あんたがやめれば、丸くおさまる」といった露骨な発言が出るようになったのである。こ



労働組合がたよりののに

うした中で、首切りとたたかうという意見をもっている労働者が日に日に、発言を控える状況が生まれてきた。会社や労働組合執行部を批判したりすると、危ないと思う、労働者の自己防衛本能が働き出す、そうした職場の空気が急速につくられていったのである。

「一三五〇人にすまない。まだ、頑張っている人たちに、悪いと思いがら、どうしようもないんです。みんな、口をきかなくなるんですから。気がついてみたら、職制たちが、われわれの一言一言、ちょっとした動きまでみているんですから……」。

たたかいつづける八王子支部への労組本部からの批判干渉も激しくなった。

こうして、もう職場における力関係の勝負がついたところで、投票結果が出たのである。負けて当たり前、むしろ、これだけの攻撃、包囲体制の下でも、よく、三〇〇〇人弱、四分の一

の労働者が、「長期かつ連続のストライキ」までやっても、指名解雇とたたかうべしという意見に賛成票を投じたものである。それに、反対票を投じたけれど、「それは「長期的連続的スト、しかも、ダラダラストに反対」ということで、指名解雇に賛成したわけでない」という意見の労働者は、少なくなかったはずである。その後のNHKの沖電気争議を描いたドキュメント番組の中ですら、はっきり、「ストは反対だが、指名解雇はけしからん」という発言をした勇氣ある労働者がいたのだから、恐らく、多くの労働者の「指名解雇」に対する本音は、このへんにあったといつて過言でないだろう。

ある新聞記者が面白いことをいった。

「たとえば、ストにこだわらないで、戦術ダウンになつたとしても、裁判に訴えることを含めて、ねばり強く九三名をかかえてたただかかっていこうというふうに提案したら、どうだったでしょうね……恐らく、結果は、逆に出たんじゃないですか……」。

3 地域・産別の支援もしりぞけて

多くの労働者たちが、支援の行動に立ちあがり、手を貸そうとしたけれど、沖電気労組は、外の力を借りることを、まったくせず、さし出した手さえ、迷惑そうに払いのけた。

沖電気のある、港区労協副議長の国鉄労働組合品川客車区の坂口氏が、激励と支援に駆けつけたが、沖労組は一言の挨拶もしてもらおうとはしなかった。

沖電気労組の所屬する電機労連としても、解雇撤回の闘争を最初から呼びかけ、指名解雇が強行され、沖電気労組が敗北宣言をした後にも、つぎのように総括している。

「電機労連は指名解雇やむなし、としたものではありません。電機労連の基本態度である『指名解雇は認めない』ことはいささかも変えるものではなく、今後も堅持していくことはいうまでもありません」。

こうした「指名解雇」を認めない労働組合の基本的な姿勢は、多くの労働者の中に広がり、その後の電機労連の大会の中でも、ゼネラル労組の中津委員長がつぎのように発言している。

「指名解雇については社会的な反響と、また電機労連が産別の立場からどう対処するか注目されている。指名解雇撤回の闘争が続いている元電機労連組合員（注・「指名解雇」とたたかう沖電気争議団員のこと）の裁判闘争が始まっているが、私の見通しでは時間がかかるが恐らく勝利するだろう。その時、組合はどうなのか。この場で結論をもとめるだけでなく、産別としても一度真剣に討論できる場を要望したい」。

電機労連が、「指名解雇」とはたたかうといい、多くの労働組合で、労働運動の原則にかかわる問題としてとらえているのだから、当該の沖電気労働組合自身に、やる気があるなら、たたかう方はいくらでもあったはずだ。「指名解雇」などは論外で、せめて、配転・出向・希望退職の段階で一三五〇名の合理化は、いくらでも可能であったはずであるし、別に、たたかう労働組合でなくても、同盟系大企業の労使でも、その辺で妥協点を見出して折合いをつけているのが現状ではないか。造船の三菱重工しかり、石播しかり。あの、瀕死の佐世保重工の同盟造船重機の組

合員が右も左もなく、スクラム組んで、職場を守っているではないか。だからこそ、経営陣の中からも「指名解雇」への批判が出るのであって、大局的にも、労働者にとってでなく、経営側にとっても、プラスにならないという判断も生まれる所以である。

これは、経営側の論理、物の考え方なのである。

まして、労働組合の立場に立つならば、初めから、首を守る気があれば、造船産業の労働組合が頭張ってやれることが、花形好況業種である電機の労働組合でできないはずがないというのは、常識であろう。

そうすれば、組合自身がいつているようにまさに「生首をとばさない」ことだけは、沖電気資本に守らせるたたいはできたはずである。

そのことが気になるから、沖労組は『反合理化闘争の記録』の中でこういいわけしている。

「闘争のもっと早い段階において妥協をはかれば、これほど無惨な結果にはならなかったかも知れません。だが、妥協をはかって、労働組合として自らの役割を果たしたことになるかどうか。合理化闘争以前から、組合なりに職場確保のとりくみをすすめておきながら、いざ、合理化が出されたからといって、その基本を崩していいものかどうか、答えはあきらかかと考えています」。

なんとも、ひどすぎる説明というより、居直りの言動といっている。

妥協するならできたというなら、妥協せずにたたかた結果、妥協より悪い条件、しかも、労働運動の生命にかかわる、「指名解雇」で仲間の首をぶつとばすことを認める結果に終わったことを、どう説明するのか？ 言葉どおり、「労働組合の自らの役割」をいうなら、それこそ、労

働運動の生命にかかわる「労働者の指名解雇」と、とことんたたかひ抜く、ねばり強い、肚をきめたたたかひを始めることが問題ではないのか。「はねあがりの長期・連続のスト提案」ではなく、本当に、名指しで労働者を首切らせない、ねばり強い姿勢こそ必要なのだ。彼らの論理に従えば、ストライキさえ、これだけバンバンやれるのだから、もっと、日常的でじっくりやれる職場闘争や、首切りにかわる合理化を見つけ出す交渉や努力は、いくらでもできたはずなのだ。

4 支援の輪を切る者とひろげる者と

だが、その後、沖電気労働組合が、たたかいつづける沖電気争議団にとっている態度は解雇当時よりもいっそう弁解の余地のない、反労働者の姿勢になっている。

裁判闘争にも、非協力の態度をとっているけれど、生活対策としてとり組んでいる行商活動やカンパ活動に対しても、協力しないようにという回状を各労働組合に送り、その理由をつぎのよう述べている。

「いまここで、どのような形であれ支援することは、臨時大会で確認した『決別』（著者注・指名解雇者を労働組合から切り、縁を切ること）の方針に反することであり、さらには組織維持の上に重大な事態をひき起しかねません。なぜなら、被解雇者団体は『沖電気争議団』を名称し、独自に意志決定を行ない行動しており、沖電労組としてこれに関わりを持つことは、すなわち、解雇撤回闘争の再組織化を意味しているからです。このことは退職条件の引き上げを含む反合理

化闘争集約時の労使確認、その後の労働条件についての労使確認にもとり、ひいては労働協約の廃棄という最悪の事態につながりかねないものです。

こうした、沖電気労組が仲間を切り捨てたうえ、労働者の生活面の支援協力さえ、妨害する姿勢には、多くの人びとが、嘆きと怒りの声をあげている。二月の電機労連中央委員会を傍聴した、東光労組Iさんはつぎのようにいった。

「とくに、沖電気解雇問題について『組織としての限界』だけでかたづけられてしまったことは残念でした。中小の仲間から指摘されたように、私たちの職場でも合理化問題は春闘以上に深刻な問題になっています。いつ首を切られ、路頭に迷う状態になるかわかりません。その時守ってくれるのは労働組合しかありません。ひとりの労働者の首をも守れない労働組合では、いくら高尚な政治論議をしても、誰もついて来なくなってしまいます」(『電機労連』六二号より)。

また、最近の物品販売への非協力要請に怒って、「支援する会」に入会した、ある大手電機労連組合員はつぎのような手紙を寄せている。

「新聞の報道などによっても新入社員の募集や一年後の決算をみても、明らかに、解雇が不当なものであることがはっきりしてきました。

さらに輪をかけて許せないのは、沖電気組といえましょう。実は、私は、電機労連大手労組の中の一員ですが、当組合まで、沖労組より、物品販売などに協力せぬよう、文書をもって、申し入れて来ています。これには、さすがに、温厚な書記長もあきれているほどです。

マスコミでも二度ほど掲載されているのを見ました。広く世間の支援も得ながら、この不当な

解雇が撤回され、労組が本来の姿に戻り、勝利することを願いつつ、遅ればせながら、支援する会に加入を申しこみます」。

沖電気労働組合が、なんとかして、たたかう、沖争議団の人たちを、労働者の支援から切り離そうと動けば動くほど、組織・未組織をとわず、心ある労働者の正義と連帯のスクラムが、広く、大きく広がっていく。

沖電気労働組合が、もし本気で労働者の立場を捨てていないというのなら、今からでも遅くない、たたかう労働者を職場に戻すために、どんな小さな努力でも、誠意をもって、することである。

だが、首を切られた労働者はまず、労働組合がたたかいの場から逃走したところから始めなければならなかった。指名解雇者一人ひとりが、この組織の裏切りという、つらく、痛ましい十字架を背負って、残った仲間たち一人ひとりと、手をとり合い、声をかけ合い、もう一度、労働者が自らの権利を自らの連帯で守り抜く、労働運動の原点をさぐりながら、たたかいを開始しなければならなかった。

III 精一杯にささやかな抵抗

私たちは、労働組合がたたかわない中で、孤立無援の職場の中で、それでも、心の通い合う仲間
間の無言の支援をうけながら、一人ひとり、たたかい始めた労働者の真実を見よう。

たたかう組織が崩壊し、変質してしまった時、労働者一人ひとりが、どのようにたたかうもの
か、その真実の姿を見よう。

冒頭に紹介した、数人の婦人労働者の、泣きながら、逃げながら、ただ一つ、たたかう仲間た
ちとの友情と連帯を頼りに、一日一日を、一生懸命耐えぬいたたたかいもある。

たたかひの現実には、沖電気各事業所、各職場の状況や、活動家のあり方によって、千差万別で
ある。その違いをこえて、労働者がどんな多様なたたかひを始めるかを、ぜひみつめよう。それ
は、われわれの問題でもあるのだ。

1 肩叩き問答

——大橋隆の場合

品川事業所製造部装置第二課、大橋隆は連日の肩叩きに応ぜず、はね返して、もち前の明る

く、行動的な性格で、S課長とわたりあってきた。彼は、仕事も熱心であり、人づきあいもよかった。烏山工業高校時代からサッカーの選手としてならしてきて、沖電気に入社してからも、クラブ活動や、課のレクリエーション活動などを、熱心につづけていたから、課の中の人望は厚かった。

肩叩きのある日、大橋は、S課長の説得を正面から受けとめ、じっくり話し合った。S課長は彼の作業台の前に立ち、彼を、なんとか職場からひっぱり出し、応接室で話をしよう、必死に説得する。大橋にいくらいっても、動きそうにもないので、業を煮やして、いらいらと口早に迫り始める。

課長「大橋君、もう君だけなんだけど、少しは、話してもいいじゃないか」

大橋「何度もいうように、組合員ですから、組合の方針に従って、退職に関する話には応じません。お断りします。

本当に、仕事の話で来いといわれるなら、課長のいうとおりになります。中身をはっきりさせて下さい」

課長「そんなこと、話してみないとわからんだろう」

大橋「そうはいきませんよ」

課長「君一人、なんでそんなに意地をはるのかね。私が話したいというんだから、まず、聞けばいいじゃないか」

大橋「意地じゃありません。何度もいうように退職の話なら、現在労使の代表が交渉している

わけで、課長と私と話して済むことじゃありません。組合が認めるとか、上司がなにをいうか聞こうとか、結論が出れば、私も従います。どうしても話したいのなら、執行委員を通してからにして下さい」

課長「組合なんか関係ない！ 私個人が君と話したいといってるんだから、私と大橋君との関係だよ」

大橋「この際そうもいかないんですよ」

課長「そんなに大橋君がわからない人間だとは思わなかった。もっと紳士だと思ったのに……君はスポーツマンだし、いい青年だし……」

大橋「課長、立ち話もなんですから、椅子を、どうぞ」

大橋は、作業用の椅子をS課長にすすめる。

課長「そんなに気を遣わなくてもいいよ。長くいるつもりはないし……君が、直ぐ、応じてくれると思うから……」

大橋「でも、もし課長が、この課の課長でなかったら、こんなことする必要ないんですよね？」

課長「？ ？ ？ ？」

大橋「会社の合理化案を実行させられるのは、現場の課長ですからね。一番つらいのは課長かもしれない。自分も、何時、どうなるかわからないんですよのね」

課長「おい、変な同情やめてくれよ。そんなに物わかりいいなら、話し合いに応じてもいいじ

やないか」

課長はとうとう、作業台にひじをつき、掌であごを支え、半身の構えで座った。

大橋「応じるかどうかの次元の話じゃなくて……僕たちはバドミントンやバレーをしたり、職場のふん囲気を大事にしてきたんです。それなのに、課長は、会社が危ないから労働者の首を切れ」の号令で動いているわけで、僕は、会社という組織の非道さをいっているんです」

課長「今の沖電気は大変なんだから、社員としては、それにどう対処するのか、自分にながでできるかを考えるしかないだろう」

大橋「でも、沖電気の有価証券報告書を見ても、決して、希望退職しなければ大変だという状況じゃないですよ。赤字が何年もつづいたとか、資産がまったくないとか、通信機業界が不況だとかいうなら別だけど、どれでもないでしょう。中間決算の新聞報道でも、退職した人の特別退職金を使い過ぎたということでしょう。春までに管理職を首切ったからですね。プレミアムつけて出したわけでしょうしね。そのうえ、沖電気一〇〇年（一九八一年）には、最高に儲けるんだと、申入書の最後に書いていますからね」

課長「沖一〇〇年のことはスローガンだよ。みんなで頑張ろうという目標にすぎんのだよ。沖の経理内容はよく知らんけど、今のままじゃ大変なのは確かだよ」

大橋「大変な場合でも、労働者を真っ先に首切るということにならんでしょ」

課長、すっかり、いらいらしている。

課長「とにかく、むこうで話そうじゃないか」

大橋「何の話かはっきりして下さらないと、行く気はありません。それより、こんなことさえなければ、課長となごやかに話せるのに、会社ってひどい所ですね。会社の外なら「Sさん」「大橋君」の関係で、酒飲めるといふのに、一度、門を入ると、こんなにとげとげしくなつて……。そうだ！ 新聞に佐世保重工で希望退職募集して、応募した労働者が自殺した記事があつたのご存知ですか？」

課長「（イヤな表情で）知らないよ」

大橋「その労働者は、仕事で、手の指を何本かなくしているんですよ。それも会社に責任があると思うけど、そのうえ、職場から追い出して、なかなか再就職の口が見つからなくて……：……なること、会社にはわかつてはすなの……：……ほんとに、会社ってひどいですよね……：……」

課長「沖電気は、そんなことないと思うよ。その人はかわいそうだと思うけど、新聞記事を直接読んでいないしね……：……」

（沖電気でも、前述のように、間もなく、本庄工場で、希望退職を気にして自殺した労働者が一人出たし、退職後、亡くなった人も出た）

大橋「もう一ついえばですよ、労働協約に、「剰員が生じた場合」首が切れるようになってるけど、剰員なんてないじゃないですか？ こんだけ忙しく、下請けを使って」

課長「そのへんのことには大橋君の方がよく知ってるじゃないか。僕も勉強不足で、そういう労働協約があるらしいといふことぐらいの知識だから……：……それに、僕らがどうのこうのいう問題じゃないし……：……」

大橋「課長もわかって下さいよ。どう見ても納得できる会社のやり方じゃないですよ。それなのに、黙って言うとおりに従えますか？」

課長「僕は僕の仕事を遂行するだけだよ。どうしても僕の話が聞かれないというのならしようがない」

大橋「課長の話が聞けないというのじゃありません、何度もいつているように……」
課長「いや、そうだ、僕は、そう覚えておくからね」

2 やめていくけれど……

——勝田金次郎の場合

踏みとどまった労働者だけでなく、やめざるをえなかった労働者たちも、ただ静かに、泣く泣く消えていっただけではなかった。

本庄事業所の検査工、勝田金次郎(57)もその一人で、できれば残って働きたいと思いつた年と子どもの成長を理由とする希望退職の勧告を六回も断りつづけた。五〇代後半の労働者への勧告は、女子や病弱者と並び、まったく有無をいわせない強引なやり方で、すすめられた。多くの人たちは、自分が中高年であることだけで、負い目を感じるような気分させられていたが、それでも、まだ、働かなければならない家庭の状況や、仕事への愛着から、頑強に抵抗する人たちが少なくなかった。

日課長の説得は、最初はおとなしく、頭を下げて、哀願するような具合だった。課長は四〇歳前後で、国立大学出身だったが、もし、勝田にひきうけてもらわないと、みんなが困るのでどうか、お願いしますと、ただ、ひたすら、頭を下げつづけた。

だが、勝田がいうことをきかず、期限が迫ってくると、話し方が哀願から脅すような口調に変わってきた。

「とにかく、あなたの都合がどうあろうと、なにがなんでもやらなきゃならん。やらなければ、僕の首が危ない」

といい、いよいよ、前日には、

「昨日は、話し合いをつめて、希望退職に応じない人たちをはっきりさせた。応じない人たちは、指名解雇ということで、あなたの解雇通知書も書いた。このままなら、あなたは指名解雇になるよ。もし、今日、希望退職に判を押してくれば、一〇〇万円は違うからね。あなたの場合、どっちにしてもそう長くは勤められんから、いい潮時だよ」

勝田は迷ったけれど、やはり、頑張りぬこうと思った。損をしても、イチかバチかやってみたという思いが強かったが、気持の底には、まさか、今日まで四〇年以上永年勤続してきた人間を、指名解雇にまでしないだろうという考えがあった。名指しで首を切るといことは、いわば、会社内の犯罪者切り捨てと同じに思えて、よもや、そこまで、やるはずがないと考えるのは、決定的瞬間までの大方の労働者の本音だったのだ。

だから、期限の翌日、課長に呼ばれて、管理部長以下、お偉方の居並ぶ前で、指名解雇通知を

読みあげられた時、勝田は、まったく動転し、どうしていいかわからなかった。なにを、どうい
えばいいかも判断できず、その場で抗議もしないまま、解雇通知書を受けとり、会社の上履きの
まま、会社を出て、長男の仕事先まで、歩いて行ってしまった。

息子は、話を聞いていった。

「通知書受けとってきたら、まずいよ。首切りを認めることになる」

勝田は、いわれて初めて、自分のしたことの意味がわかるほど、気が動転していたのだ。勝田
は、その通知書を、課長に返した。

だが、一月に入り、指名解雇になるまで頑張った同僚たちも、つぎつぎ、涙をのんでやめて
いくのを見て、勝田も、このへんが潮時だと考えるようになった。

やはり、労働組合の幹部たちが、なんのたたかいても援助もしてくれないことが一番大きく、こ
のままたたかいつづける目当てがつかないのだ。そして、年寄りの自分が頑張らつづける確信が
もてないのだ。

「一月六日までに退職届を出せば、割増金は、希望退職扱いにする」

勝田は口惜しいけど、勧奨に応じることを決意した。妻にも息子にも気持を伝えた。

勝田は、決意してから、夜、一人になって考えた。今、こんな形で、不自然に、無理矢理、四
十数年の仕事と人生に区切りをつけなければならぬ事態をあらためて考えた。

昭和一二年に、東京下町の工業学校を出て就職して以来、四年の軍隊生活は喜んで、まさに、
四十数年間、生涯の大切な時を、沖電気のために捧げてきた。旋盤工として、検査工として、沖

電気の現在を築いてきたことを、胸を張っていうことができる。その労働者の人生を塵埃のように、切り捨てる会社のやり方を許せない。同時に、この会社のやり方とたたかわない労働組合の幹部たちへの怒りが、勝田の胸に、うずいている。

勝田は、一度も、労働組合の職場役員になつたこともなく、ただ、その時々、組合指導者たちの指揮に従つて、戦後三三年の労働者の生活を送つてきた。その中で、勝田には、労働組合についての一つの考えができていた。

“労働組合は、労働者が倒産とか首切りとかという危機にぶつかった時にたたかうもの”

その気持で、勝田は、今日まで、組合費を払い、最低限の行動には参加してきた。

ところが、今度の決定的な時になって、労働組合が、みんなを団結させ、首切られる人を守つてたかうことで、みんなの話し合いを深めるようなことを一切しないことが、勝田には、なんともやりきれななかつた。

いろいろ考えることを、みんなで出し合い、会社にぶつかり、町にもピラをまくとか、ポスターを貼るとか、この沖電気の不当な首切りを訴えて、たたかう道はがあると、素人の勝田が考えるのに、幹部たちは、「忙しい」「交渉中」といって、職場に顔さえ出さない。

勝田は、毎日、胸をかきむしられる思いでいた。昭和二〇年代の頃から「団結しろ」「団結しろ」と三〇年間にいつづけた大幹部たちが、こんな時に、なんにもいわずにやめていったり、自分だけは、役員で残っている、その生きざまを許すことができなかつた。

勝田は、一晩中、苦しみ考えつづけて、一つの決意に到達した。

勝田は、会社生活最後の日に、テープレコーダーをもって、会社の門をくぐった。

管理部応接室に、そのテープレコーダーをもちこんで、管理部長に、面会を申しこんだ。退職届を出し、会社をやめるに当たって、会社にぜひいい残したいことを話すのが目的だった。管理部長は、退職に応じた勝田の言葉を聞かないわけにはいかなかった。

勝田は、一生懸命考えて、書き綴ってきた、退職していく労働者の言葉を、管理部長に読みきかせた。

「私は、今回、沖電気の経営者がわれわれ労働者の声を無視して強行する首切りの対象者とされ、今日まで、頑張りがつづけて働いてきましたが、ばん止むを得ない事情で、退職届に捺印し、会社を去ることになりました。」

まったく、残念で、口惜しさで一杯です。

でも、労働者は後につづいています。

一歩後退、二歩前進……昔、伊井弥四郎さんがいった言葉のように、私は今、会社をやめていきますが、必ず、後を継いで……」

勝田が、ここまで読んだ時、部長が、声をかけ、質問した。

「その、伊井弥四郎という人はどんな人なのかね？」

勝田は話の腰をおられ、戸惑ったが、やっぱり、ちゃんと説明することにした。

「あの……伊井弥四郎さんという人は偉い人で……私は会ったことないけど、昭和二二年の、戦争負けた後、日本中の労働者がゼネストをやるうとした時、マッカーサーが中止しろといった

……伊井さんが、その時、NHKのラジオで、全国の労働者に、この命令に従って、ストライキを中止するが、われわれは、必ず、もう一度、まき返す、万国の労働者団結せよ、万歳といったんだ……」

部長は、勝田の説明をうなずきながら聞いていた。労働者の労務管理を職業にしているにしては、二・一ストのことを知らないのはもぐりかとも思ったが、まだ四〇そこそこでは、勉強が足りないのだろうと納得した。

勝田は、最後のダメを押した。

「だから、私は、やめていくけど、この埼玉北部の労働者たちが、そのうち、必ず、本当の労働運動に目覚めて、資本の横暴に、まき返しをする。まだ、今は、みんなだまされているけど、必ず、このまま、労働者が負けたままにはなりません。」

私は、そのことを信じて、これからの余生をそのことのためにつくすことを誓って、退職していきます」

勝田は、沖電気に入社して初めて、会社の経営陣にむかって、一人の組合員として、こんなに長く、胸をはって、ものをいった。一世一代の弁舌であった。

これをいわなければ、会社をやめるわけにいかなかったのだ。彼をひっぱってきた、三十数年の労働運動の指導者たちがいってくれなかったことを、自分の口で、会社に言わなければ、やめるわけにいかなかったのだ。

いよいよ、会社を去る時、会社が一つの「儀式」を行なった。永年勤続表彰の「儀式」だった。

人の首を切って、追い出す労働者に表彰状とは、と勝田も思ったけれど、生来の素直な性格のおかげで、くれるものはおもうと思つた。眼の前で、一人の退職者が、顔を真っ赤にして、いった。「人を馬鹿にするな！ この野郎！」

いいながら、その人は、表彰状を、床に叩きつけた。

勝田は家に帰りついて、家族に、また、首になつても、直らない「お人好し」について、いわれた。

勝田が、持ち帰ってきた表彰状に、妻が烈火の如く怒つたのである。

「なんで、あんた、こんなものを、家まで！……！」

妻は、その場で、表彰状を破り捨てた。

時代の常識をこえ、労使の慣行を踏みにじつて、大企業が、労働者を名指しで、巷にほうり出すという、不法不当な行為を、平然とやつてのけ、当該労働組合が白旗をかかげ、労働者を見殺しにしたところから、労働者は、好むと好まざるにかかわらず、自らの足で立ちあがらざるをえなかつた。新聞記者、学者、文化人、そして、多少とも労働組合にかかわつてきた人間なら、首切り、しかも、指名の首切りとたたかわない労働組合などはありえないというのが常識であり、ある電機女子労働者が、沖電気の労働組合についていった。

「私たち、労働組合なんてよくわかんないけど、まあ、ふだん、組合費おさめとけば、いざつていう時、守ってくれるとこでしょ。でも、考えちゃうなあ、沖電気の組合、千何百人首切らせ

て、知らん顔なんだってね……」

彼女にとっては、労働組合費をおさめることは、保険金をおさめるようなもので、事故がおこったら、助けてくれるところと考えているのだが、今の沖電気の労働組合では、保険の役目も果たさないというわけである。

だが、そう発言する女子労働者も含めて、自分の生活に、災難がふりかかって来ないと、なぜ、労働組合が必要なのかも、考えなくなっているのが、現在の大方の大企業労働者の現実ではないのだろうか。

四〇年動続の勝田が、退職届とともに、生まれて初めて本音を会社にぶつけた事實は、決して特別なことではないのだ。まだ、彼は、生まれて初めてでも本音をいったからいい。首になっても黙って消えていく労働者の方がはるかに多いのが現実なのだから。

3 労働組合ってなんだ

——若い屋代真の悩みと怒り

首切られてみて、それこそ生まれて初めて、この世に搾取するものと、されるもの、支配するものと、支配されるもののある悲しみ、痛み、憤りの感情を体験した新鮮さでは、若者たちにおよぶものはいないだろう。

屋代真(23)には、まず、身内につきあげてくる憤怒があった。自分が指名解雇者として首を切

られる事実と、その理由の有無を考えれば考えるほど、無性に腹立たしく、肩叩き”の一日一日の中で、まず、自分の心の世界にツカヅカ入りこんで来る職制たちにむかい、思いきり本音をぶっつけ、行動するところから始めた。

屋代は率直に気持を行動に表わした。最初から、納得のいかないN課長の働きかけには一切、応じなかった。業を煮やした課長が電話で、彼を呼び出した時、屋代は、「希望退職の話に決まってるから、行きません！」

と、力一杯、受話器を叩きつけた。すぐ、N課長が血相を変えて飛んできた。「なんだ！ 俺を誰だと思ってる！ お前の課長だぞ！」

屋代は負けずに怒鳴り返した。

「希望退職の話には、応じないことになってるんだ！」

「とにかく、来るんだ！」

「絶対いかないよ！ 帰ってくれ！」

周囲の同僚たちはいつも穏やかな屋代の、真正面から課長に対峙する気迫に圧倒され、心配そうに見守っていた。

屋代は、なにがあっても仕事をやめず、呼び出しにも応じなかった。二度目の呼び出しの時、N課長はやり方を変えた。屋代の側に寄ってきて、やさしく呼びかけた。

「ちょっと、話があるんだけどな」

屋代は、課長の見えすいた猫撫で声が、いっそう、痾にさわって、思わず大声をあげた。

「なにを！ いい加減にしろ！」

周囲の同僚たちがびっくりして仕事をやめる中で、屋代は、さらに、声を大きくした。

「汚いよ！ 業務命令だ、仕事の話だ、なんていって、やっぱし首の話しかしないじゃないですか！ 汚いのやめようよ！ ホントに仕事の話だけなら、いってもいいんだよ！ どう……」

肚の底から、思いのたけをぶっつけ、仁王立ちになって、屋代は、課長と対峙する。課長は、うるたえ、小さな声でいった。

「いいよ、いいよ、もういいよ……」

会社は、屋代が一筋縄でいかないとわかると、やり方を変えてきた。

彼の仕事を取り上げて、三階から一階の奥に連れていき、主任の側に座らせ、隔離する方法をとった。彼のまわりは、主任の他は、会社のインフォーマル組織のリーダーたちで、まったく、身動きのできない状態で、監視つき作業をやらされることになったのだ。

屋代の仕事は、放送機器や、防衛庁、気象庁などの各種情報機器などの調整であり、高卒現業労働者として、働がいがもあり、能力も発揮できる、比較的恵まれた仕事であったといつてよかつた。また、会社自慢の新製品、沖ファックスの製品化の仕事にも関係し、年間、三カ月、四カ月の出張仕事もやり、文字どおり、電子回路の作動に、青春をかける日々であった。

だが、今、その仕事から切り離され、与えられたのは、座って、ケーブルのコネクタ一づけをするだけの、単調な仕事。周囲に話の通じる仲間は一人もいない。来る日も来る日も、ただ黙って、単純作業を繰り返すのみ。屋代は、一瞬一瞬口もきけず、仕事もとらげられ、監視される労働のつらさを思い知らされた。

屋代は孤独のたたかいの中で、ここに来るまでの自分の過去をふり返り、今、なにをしたらいいのかを、思いつめた。

屋代には、自分がまともになってきたことへの確信があった。家庭でも学校でも沖電気でも、なに一つ不平をいうほどつらいおもいをしたことはなかったし、叱られるようなこともしてこなかった。

千葉の実家は魚屋で、父母は一緒に働き、しかも、四〇過ぎてから生まれたのが、一人息子の彼だったから、まるで孫のように、可愛がられて大きくなった。彼の物心ついてからの記憶の中に、父母に荒い言葉で叱られた事実はなかった。工業高校電気科も、少年たちがエレクトロニクスを目指したブームの終わり頃で、進学も就職も、差別もなくコンプレックスもなく勉強できた最後の世代といつてよかった。高度成長の脚光を浴びた高校教育の最後の生徒たちともいえる。

そして、沖電気に入ってから、前述のように、電子機器の調整、設計という高校卒業生の日々の当たる木道を進み、月一五〇時間の残業で、会社に泊りこんで働く、張りのある生活を送ってきた。

彼は、この間、何一つ誤魔化すことも、ひねくれることも、つぶることも必要なかった。素

直に、すくすくと勉強し、働いて来た。先輩、同僚にも好かれ、背も高く、ハンサムで、まったく、ケチのつけようのない好青年であった。先輩たちは、彼を見込んで、入社二年目に、職場から選出する支部委員に選んだ。

考えてみると、これが、彼の運命を変えてきた出発点だったように思える。会社から差別され、監視されるようになる原因が、あの頃から始まったように思えるのだ。

彼は、勉強や仕事の時と同じように、労働組合の活動と、真っ正直に取り組んだ。正直にいえば、支部委員に選ばれるまでは、労働組合とはなんなのか、一度も考えたことがなかった。そのことについて、学校でも教えてくれなかったし、会社に入ってから、労働組合からもきちんと教育を受けたことがなかった。会社の反共教育の記憶はあるけれど、とにかく、本気で、労働組合のことを、自分のこととして考える必要は、それまで、まったくなかったのが実状である。

だから、屋代は、選ばれた任務を忠実に果たすために、行動を開始しただけなのだ。

彼の行動は、まず、自分が選ばれている職場の人たちの意見と要求を一人ひとり、きちんと聞くことだった。集会なんかではなんにもいわない人たちが、自分たちだけだと、実によく話してくれる。春闘要求についても、沖電気の給料の安さがいつも話題になり、本音をいえば、執行部の要求原案より、もっと高い要求額が出てくる。屋代は、みんなの要求を、忠実にまとめ、修正案として、支部委員会で発言した。

だが、どうもおかしいのである。

彼の提案に誰も賛成しないだけでなく、知り合いの委員たちも、みんな知らん顔で、議論もし

ないで、本部提案がすんなり通ってしまふのである。賃金だけでなく、いつか彼が、一定額で頭打ちになっていける交通費について、千葉など、遠距離から通勤している労働者の声と実費支給を提案した時なども、まったく、喜ばれず、むしろ、なにかを積極的にやることは迷惑だといった様子だった。

屋代は、悩んだ。考えた。

「労働組合ってなんだ？ 労働者みんなの気持を大事にして、一人ひとりの要求をみんなでなんとかすることじゃないか」

だが、先輩たちは、そんなふうには考えていない。屋代が、そのことを率直にいい、質問するといわれたものだ。

「あんまり、ムキにならないで、出過ぎないようにやるもんだ。お前も、そのうち、わかってくるよ」

屋代は、この頃から、物事を、自分でつきつめて考えるようにした。労働組合について、仕事について、生き方について、一つひとつ、なにを選び、どう考え、どう行動したらいいかを、つきつめるようにした。

そして、その中で、ある時は、会社や、えらい組合幹部たちにきらわれても、やらなければならぬことが、いろいろあるというふうに、思うようになった。

同時に、彼は、積極的に行動し、会社にアカといわれている人たちとも一緒につきあい、活動するようになった。

屋代は今、こうして、とことん差別され、指名解雇でほうり出されようとする現実の中で、あらためて自分の二三年の生き方をふり返る。

「一生懸命考えて、一生懸命、同僚のために行動するようになったら、喜ばれなくなり、おまけに、おっぼり出そうという、そんな会社ってなんだ？ 俺がいったい、会社にどんな悪いことをしたって言うのだ！」

屋代は、解雇期限の二〇日まで、毎日、主任の横で働きつづけ、考えつづけた。そして、次第に、首切られて、これで終わるのでなく、ここから、なにか新しい生活と、新しい団結が始まるのではないかと、思うようになった。自分が、こんな場所に閉じこめられ、あげくにほうり出されて、それですべてが終わってしまうのでなく、こんな不当で滅茶苦茶な会社のやり方をまかりとおらせないために、本当のたたかいを、今から始めなければならぬと、考えるようになった。

屋代の気持は、次第に落ち着いてきた。
そんなある日、寮で、一緒に暮らし、同じ釜のメシを食い、遊んだことのある若い主任が、言葉をかけてきた。

孤塁を守って、たたかっている最中に、声をかけられて、嬉しくもあり、なつかしくもあり屋代は久し振りに、先輩と二人きりで話をした。

三〇を越したばかりの先輩は、自分の仕事を話しながら、真剣な表情で、屋代に忠告した。
「屋代、君は、もうやめた方がいいよ。沖電気がね、君をいらぬといってるんだよ。悪いこと

いわないよ、君のためにも、おとなしくつぎの仕事を探した方がいいと思うよ」

屋代は、怒るというより、啞然として、この、同じ寮生活を経験したことのある、若い先輩の顔を見つめていた。この、あまりにも、会社に忠実な考えや言葉使いを聞いていると、共通の青春の時を持ったこと自体が、不思議に思えるけれど、ここまで、一人の人間を変えてしまう、沖電気という会社の存在と力を思わないではいられなかった。

こうして、千二百数十名の労働者が、無念の思いを胸に、会社を去り、七一名の指名解雇を認めない労働者たちの、新しいたたかいが始まった。

一月二一日、職場を追われた七一人の労働者が、それぞれの事業所の門前で、ピラをまき、残った仲間たちに呼びかけ、職場復帰のたたかいを開始した。

屋代も大塚も、若い沖電気労働者たちが、先輩たちにまじって、生まれて初めて、自分たちを雇った会社を告発し、対決する行動をとった。みんなで、スクラムを組み、シュプレヒコールを叫んだ。

「われわれは、必ず、職場に戻るぞ！」

「われわれは、職場の仲間と団結してたたかうぞ！」

「われわれは、全国の仲間と団結してたたかうぞ！」

若者たちの顔も声も緊張し、こわばっているけれど、守衛や職制たちの表情も硬い。昨日まで、一緒に働き、食堂にいった仲間もいる。こっそり、笑顔で、会釈する職制もいる。門の外と

内と、残った者と追い出された者と、不自然につくり出された、この厚い壁を、とり払う日まで、なにもかも、異常で、新しい人間同士のたたかひの幕が切つて落とされたのである。

市川美佐子は、就労闘争一日目は、門前でビラまきをする勇気がなくて、休んでしまい、二日目に恐る恐る行動に参加した。

こわごとさし出したビラを、同じ職場の人がとつてくれて、やっとホッとした。この日一日、みんなの後ろについて、初めて、シュプレヒコールを大声で叫んだ。

「みんなと一緒に働くぞ！」

「みんなと同じ、昼メシを食うぞ！」

第二章 夫婦無慘

I 妻の解雇と夫の差別と

——板垣夫妻の場合

労働組合という、労働者自らのたたかう組織がそのたたかう機能を果たさなくなった時、そして労働者がたたかう組織をもたなかった頃の状態と同じように、資本家の手で情容赦なく巷にはうり出された時、ほうり出された労働者たちは、自らの足で立ち、自らの声で人びとに呼びかけ、あらためて、自らの連帯をつくりあげる。労働者の団結の原点にたちかえり、連帯づくりの第一歩から行動を開始する。

この巨大企業との人生をかけたたたかいの中から、労働者の働きぬき、生きぬき、たたかいぬくためのさまざまな自己変革と建設が、生活の中に芽生える。

高度経済成長期の生活パターンでつくられてきた、大企業労働者の生活に変化が始まる。変わらなければ生きていけない。たたかわなければ職場と仕事にもどれないのだ。女房子どもをかかえた夫婦労働者の生活のたたかいはとりわけ厳しく、多くの生活の困難をかかえている。会社は、この夫婦労働者を容赦なく、巷にほうり出したのだ。

1 手取り一一万円で四人で暮らせというのか

板垣道明(34)・てつ子(28)夫妻の場合、夫がかるうじて職場に残り、妻が指名解雇されてたか
かい始めた。

てつ子は芝浦工場調整一課に所属して、IC組立ての仕事をしてきたのだが、三度ほど課長の肩叩きをうけ、共稼ぎを理由に指名解雇リストにいれられた。

彼女は二人の子どもがいるので残業はできなかったが、昭和四四年に、青森の日本海に面した町の高校を卒業して、沖電気に入社し、以来、九年間調整の仕事を、地味にこつこつとつづけてきた。住んでいるのは、現在、品川の社宅で、住居費が一万ほど。そのおかげで、夫婦あわせて二〇万円の収入で、やっと、二人の子どもを育てながらやってきた。だから、もし、今、彼女が首になれば、夫の手取り一一万円そこそこの収入で、家族四人がやらなければならなくなる。これは、どうみても、生活保護基準以下の収入であり、沖電気という大企業は、残業などをとり払って、裸にしてみると、三五歳、勤統一七年のベテラン社員に対して額面で一五万円なにがし、厚生年金・健康保険・住宅費などに一万ほどの貯金をひくと、手取り一一万円ほどの賃金しか支払っていないということ。沖電気労働者の平均賃金は、同業大手の日電、富士通と比較すると、基本給部分で、八〇〇〇円ほどの違いがあり、その他の部分を入れると、二万円ほどの賃金格差があることになる。板垣の場合は、賃金差別をされているので、さらにこの差が開いているのだ。

彼女は必死に抵抗した。課長の呼び出しに応じないと、やはり、業務命令だと脅かされ、組合に電話すると、「仕事の話かもしれないから、行ってきたら」といわれた。

彼女は、課長との面接の時、メモ用紙をもっていき、机の下で、全部メモした。

赤字がつづいているから協力してほしいこと、申入れ書についてどう思うかということ、そしてもっと近くに職を探したらなど、つぎつぎにいった言葉を全部書きとった。気がついた課長がけわしい表情でいった。

「お前、なにやってるんだ！」

彼女は胸をはっていった。

「私は、いわれること、いちいち、おぼえられませんから書いています」
課長は、怒っていった。

「俺が書いていないのに、どうして、お前が勝手に書いたりするんだ！」

組合の職場大会の中でも、係長や主任の組合員が立ちあがって、てつ子を名指していった。

「なんのために残るのか？ あんたがやめた方がみんなのためになる」

「なんの魅力があつて残るのかね？ 俺ならやめるよ。あんたがやめてくれれば、九〇%の人が助かるんだ。指名解雇者は一部、残る人が大勢なんだ。その人の立場に立ってくれ」

彼女は、一日一日、会社のためつけの中で、職場のみんなが黙りこみ、口をきかなくなっていく口惜しさに耐え、一生懸命いった。

「私は、せい一杯働いてきました。指名解雇をうけるわけにいきません。子ども二人を育てなけ

ればならないんです」

彼女が職場を離れて、就労闘争を始め、朝のピラまきをしている時、集会で彼女に出ていけという発言をした人が、近づいてきてピラをうけとっていった。

「あの時は、ごめんね」

彼女は、胸があつくなり、感謝の気持ちをこめていった。

「気にしてません。就労闘争のピラ、どうか受けとって下さい」

それから、その人は、ピラまきのたびに上役が近くにもピラを受けとってくれるようになった。

解雇されて、もう一年近く、今、毎朝七時半に、妻が二人の子どもを近くの保育園に連れていってから、活動を開始し、夫は会社に出勤する暮らしがつづいている。社宅の低家賃と、公立保育園に二人行っていることが、一家がなんとかやれていく大きな要素になっている。品川区は革新自治体の歴史があるために、保育行政が都内で一番進んでおり、もし私立の幼稚園などで、二人で、六万も七万もかかるようなら、それだけでもうこの一家の暮らしはパンクしてしまうのだ。それに、社宅での暮らしも、絶対必要条件。これらのギリギリの条件のおかげで、夫の収入プラス、妻がたたかいたいの中で、みんなの支援金やカンパ、自分たちの労働でつくりだす分配金を合わせて、なんとかやれているのである。

それにしても、社宅に住んでいる、沖電気社員の暮らしも、想像以上に楽でない。荏原社宅二棟三世帯の主婦たちのほとんどが、なんらかの内職をしている。その内容も、トイレ掃除であ

ったり、コンセントの部品づくりであったり、千差万別で、みんな服装などはファッションブルな格好をしているけれど、それぞれ、お互いに知られないように気を配って、風呂屋の広告などで、仕事を見つけてきて働いているのだ。

だから、てつ子が、行商のお茶を買ってもらうように持っていったら、ほとんどの家で、買ってもらうことができた。つまり仕事のなくなる辛さ、収入の少ない心細さは、決して、解雇された人間だけではないということなのだ。

子どもを背負って、電気製品のハンダづけをしている人、朝の三時、四時まで、レットルはりをしてる人、多くの人が子どもの私立幼稚園通園の費用をひねり出すとか、住宅ローンのための積み立てが理由なのだ。

「保育園に入れていただくにはどうしたらいいんでしょうか？」

そういって、てつ子に真剣に相談した人もいる。夫の収入では、二人の子を幼稚園に入れることはどうしても無理で、なんとかならないのかという話である。首切られて、たたかっている、てつ子の方が、はるかに自由にみえるほど、なんとも厳しい労働者の生活実態である。

板垣家の長女 真美織（5）と長男 匡（2）は、一緒に、大声をはりあげて、解雇撤回のうた「こぶしの防波堤」をうたう。そして、父と母が行くところには、どこにでもついていき、保育園で、元氣よく暴れ回っている。父と母の頭をあげた生活がのりうつるのか、きわめて、意気高らかに健康に育っている。

いつか、取材中に、板垣家から出版社に電話して、「社長いる？」と話していたら、匡君が、

眼をらんらんと輝かせて、迫ってきた。

「おじさん、悪い人に電話してるの？」

「悪い人？」

「社長でしよう？」

そして、今、子どもたちにとって、来年、期限とされているこの社宅から追い出されることが一番の心配事なのだ。真美織ちゃんがいう。

「ね、ね、お母さん、出なければいいんでしょう、みんなで、ここにいればいいんでしょう？」

2 不正を正す日まで——夫は徹底して差別され

大人たちにとって、一番つらいことは、夫の道明が、首にはならなかったけれど、職場で、ひどい仕事差別をうけていることだ。

彼は一九六三年に、島根県江津工高を卒業して、入社以来、オキスコープなど、主要製品専門のベテラン調整技術者として、一六年間働きつづけてきた人間である。ところが、七九年四月から、仕事を外され、現在は一人隔離され、電話もない、格子なき牢獄といった個室で、新入社員でもできる単純労働を、毎日、やらされているのだ。

電気釜が二つ正面にあり、プラスチックケース入りの、何万、何十万個というICが積んである。彼は、そのICをケースからとり出し、アルミのケースに入れかえて、片や一二五度の釜、

片や八五度の釜に、それぞれ入れて、四日間高温処理をして、不良品を選び出す仕事をしているのである。

ICはいまや、情報産業の主要部品であり、生産が需要に追いつかない状況で、沖電気では、アメリカから大量生産で値段の安いICを輸入して、道明のやっているような処理をし、不良品を除外して使っているのだ。

くる日もくる日も、誰もいないこの部屋で、ケースからケースへと、ICをつめかえ、釜におしこみ、点検する、なんとも単純で、味気ない仕事の連続。彼は、我慢できなかった。

今まで、さまざまな情報機器の調整にとりくみ、観音崎の水路を安全に航海させるための、船の大きさ、スピード、方向を表示し、危険信号を発する独自の機器を扱ったり、移動無線機器の調整をしたり、まさにベテラン調整マンとしてのデリケートな仕事を一日一日積みあげて、係長も彼を手離したくないのが本心であるほど、その能力は認められてきた存在なのである。そのかけがえのない人間が、まったく懲罰と見せしめのための隔離労働をやらされる、その苦しみの日々、最新の仕事から離れていく、技術者としての焦り。道明は、毎日、歯ぎしりして、経営者たちに抗議する。配転直後、管理部長、製造部長、総務課長あてに、抗議のとき、受けとりを拒否された仕事の適正配置をしてほしいという申入れ書を、内容証明付で郵送もした。

彼は、釜にICをつめながら、自分を見つめる。職場の同僚と切り離され、騒音の中で、本を読むこともできず、電話で人と話すこともできず、ただ一人、自分の過去・現在・未来をおも

戦争で運命がくるい、島根県の田舎町で、瓦を焼き、今は、子どもたちに習字を教えて暮らしている父と母のことをおもう。姉弟四人いるけれど、それぞれ自分たちの生活がせい一杯で、両親の面倒をみるのができない。彼は、すぐにも父母と暮らしたいけれど、今の状況では、それもできそうもない。

彼が、東京の大企業に夢と希望をもって上京してきた一六年前。あれから、幸い、能力を認められ、給料は安い仕事には恵まれて、やがて両親とも同居できるとひそかに夢みていたのに、今は、仕事もとりにあげられ、このなんとも、みじめでつらい会社の暮らし。妻は首切られ、二人で力合わせ、仲間と力合わせ、子どもたちと手をとる合い、励ましあって生きている毎日である。能力あり、意欲も人一倍もっている、働き盛りの技術労働者が、なぜ、こんな仕打ちをされなければならぬのか？ 彼が、いつも真実を口にし、「指名解雇」に抗議し、妻とともに、たかっていることが気に入らないというのか？ 会社にとって、こんな優れた技術と才能を埋もれさせ、腐らさせることこそ、大きな損失ではないのか？

なんとしてもこのまま、仕事をとりあげられ、能力を腐らされて行くことは、我慢できない。そして妻たち解雇者をこのまま首切らせたまま、あきらめることもできない。だから、道明は今日も、じっと耐えて、釜の前に立つ。

必ず、この不法不当な、労働者の取り扱いをやめさせる日がやってくることを目指して、今日も、夫は、一人黙々と、ICを熱しつづけている。

II 家のローンと子どもとたたかいと

—高崎の五人

1 五人のたたかい

長井明(34)は高崎事業所製造部量産試作課にフライス工として勤務していて、指名解雇され、現在、高崎の五人の指名解雇者のリーダーとして、先頭に立っている存在である。

妻の一恵(33)も沖電気データ処理事業部にキーパンチャーとして働いており、今度の合理化では、板垣夫妻の場合と逆で、夫の明が解雇されて、彼女が、職場に残り、現在、社内のさまざまな圧力と高崎という古い人間関係の強い土地柄の偏見とたたかいながら、小学校四年の長女と一年の長男、二人の子育ても行なっている。

今、妻の賃金から五万円(七万残るだけ)ずつ返済している、二人の新築の家は、五人のたたかいの砦にもなっている。一室を、沖電気争議団の事務所にして、毎朝九時に、五人がここに勢揃いし、それから、行動を開始するのを日課としている。高崎の町はずれ、田んぼの中の住宅造成地にあるため、初めのうちは、なかなか、九時きっちり集まらず、遅れてくる者もいて、争議団の生活と規律を確立するために、お互い、いろいろ努力した結果、最近では、車やバイクの利用を効率よくして、ほとんど遅刻する者がいなくなった。

なにしろ、総勢五人ということは、一人ひとりがきちんと責任を守り、健康で行動しないと、すぐ、みんなの士気と団結に影響する。高崎よりさらに少ない本庄の被解雇者団は、三人で、笹井団長によると、

「一人が欠けると、とても心細くて、いつか残った二人で、一日休んで、山に行つて元気を回復させたこともあります」

というほど、誰一人欠けてはならない貴重な人間の集まりなのだ。

だから、お互い、厳しく批判すべきことは批判し、いたわりあうところはいたわって、一人ひとりが最大限に能力を発揮し、人間として成長しあうことに、神経を集中する。こんなことの大切さに気がつくようになったのも、まったく首切られて五人のチームをつくつてからのことである。東京でも同じことなのだが、こうした、地方都市での小さな団結を腫のように大切にすることを、本当に人間を鍛え、集団を鍛えあげる。

五人は、それぞれ、任務分担をもっている。岩手大学出身の設計技術者、高屋修(25)は、教育宣伝担当で、撤回させる会の機関紙「こぶし」の定期発行と、その時々々の宣伝ビラをつくることなど、宣伝にかかわる仕事は、すべて彼が企画立案し、手のあいた人とともに、文章を書き、印刷をし、みんなで配布の態勢をとる。名古屋大学大学院卒の開発技術者折戸光次(30)は、財政担当者として、争議団の経済的生活に係る企画実践は彼の守備範囲である。労働者の集まりや赤旗祭などで、植木を売るとか、にわかおでん屋を開業するとか、その結果、今月の収入はいくらになるかといったことは、すべて、彼の責任に属する。そして、元国鉄労働者出身の岡田道春



高崎の五人組 たち

(27)は支援の組織、ともにたたかう会担当で、常時、東京の本部や各事業所の担当者として状況を検討しあいながら、たたかひの方向を明らかにしていく任務をもっているし、一番若い箕輪進(22)は、渉外係ということで、各種の労働組合や民主団体などに連絡をつけて、支援する会に入ってもらうなど、地域を開拓していく仕事が入務なのである。

それぞれが、大変、責任の大きい仕事をもっているわけで、五人で、高崎に根を下すたたかひをしようというのだから、当然といえば当然だが、いやでも応でも、しっかり口をきき、しっかり仕事を処理せざるをえなくなるのだ。口の悪い人が、若者にやる気をおこさせ、しっかり能力開発させるには、首切られるのが一番いいなどといった。

たしかに、沖電気争議団の中でも、高崎五人の若者たちの活躍と、能力発揮は見事である。

とくに、行商活動では、ひとときわ目立つ、すばらしい成果をあげ、第一回の行商だけで三百数十万円の売りあげ、一八〇万円の利益をかちとっている。それぞれの能力を生かした活動も見事で、折戸は週一回家庭教師として数学を教え、高屋はアコーディオンをもって集会に出演したり、歌ごえの指揮をして、アルバイト料をいただいている。また、みんなで、教員組合の引越しを請け負ったり、盆踊りで、とうもろこしを売ったり、別の時には、焼きそばの出店を出したり、さらに、二年先を見越して、長井団長の得意な盆栽を大量に育てたり、まことに、徹底して、活力あふれる、争議団の生活建設とわいていい。若者の連帯と、土地に密着した争議でなければできない、自由で創意性豊かなたたかいの道である。

彼らを支援する組織、"ともにたたかう会"の拡大も、次第に、成果をあげ始めている。九月初めで、約七〇〇人で一四〇〇〇〇人の人びとが、一口二〇〇〇円の会費を、彼らのために、毎月収めてくれるのだ。学校の先生・看護婦・保母・公務員・主婦・同じ民間の労働者など、さまざまな群馬県内の支援する人びとが、会を支えてくれているのである。

折戸の、かつての名古屋大学時代の同窓生がつくってくれた、"折戸光次を支援する会"も、まことに個性豊かな支援組織で、東京、名古屋など、その会員は、全国におよび、一〇〇〇人の会員が、彼のために、物心両面の支援をつづけてくれている。今までに、この支援する会に三〇万、工学部機械科の同窓生で三〇万、シンガポールにいる同窓生から一〇万などその他、合計一〇〇万もの金額が、同じ大企業・官庁などに勤めている同窓生から送られてきた。

「首切られて、昔の友だちと話せるようになったね」

折戸夫妻はみんなの友情に感謝しながら、ニュースなどを全国の仲間たちに発送する。沖電気弁護団に加わっている小島弁護士、N火災に勤めるTたちが世話役をしてくれているのだが、Tがいった。

「学校時代の仲間たちと、折戸のことで、つきあいが戻ることが、一番大きいよ」

この前の同窓会でも、一人一〇〇〇円ずつ、経営側エリート社員も含めて、折戸のためにカンパしてくれたことは大変嬉しく、自分たちのやっているたたかいが、立場をこえても理解してもらえる中身をもっていることを友情の形で示されて、こんな嬉しいことはないのだ。

夫婦ともども沖電気と高崎に骨を埋める意志をかため、長期ローンで家を建てたばかりの首切り。それが原因で、妻が重い病にかかった母を大事な時に看病することが出来ずに、無念のおもいでかけがえのない人と永遠の別れをしなければならなかったのだ。苦労はつぎつぎに襲ってくる。彼女自身もあまり身体が丈夫でないから、ときおり保育園の手伝いをするぐらいしか働けないから、収入はあまりない。折戸が、みんなで頑張ってもらってくる分配金が、やはり生命綱である。なんとしても、新築間もない家のローン（七万円）だけは、払いつづければならないから、残った数万円で食べていくことは、子どもがいなくても、大変なことである。生活は、文字どおりギリギリまでつめなければ生きていけない。そんな暮らしの中で、全国の同窓生が、お金と心を、毎月送ってくれる友情は、なにものにもかえられないほど、嬉しく有難い。

折戸はいう。

「みんなに支えられて、こうして頑張っている意味を考えます。僕たちのやっていることが、大

きな歴史の中で、どんな意味があるのか、明治以来の労働運動の歴史の中で、どういう役割があるのか、未来にむかって、なにをつくっているのか……そのことを考えます」

2 活動家夫婦として

——長井夫妻の場合

歴史を背負って行動する男たちの食欲を最低限保証する妻と女の役割も大変である。

長井一恵は、夫と子どもたちとのマイホームを、たたかひの砦に提供することで、苦勞も多し。子どもたちをまともに育てることと、家族ぐるみなたたかひを、きちんと両立させなければならぬし、仲間たちが、金もないし、昼メシも食べていないとわかる時には、「なんにもないけど、お昼たべて」と、声をかけてしまう。職場でも、家庭でも休む時がないのである。

夫も、妻に支えられて、日々のたたかひが成立していることは身にしみるから、朝夕の、妻の忙しさを少しでも楽にしてあげたいという思いと、せめて首切られて出勤の必要のない人間で生きるということと、毎朝、妻を車で、会社まで送り、帰りもできる限り、迎えに行くことを日課としている。

朝は送りとどけるだけだけど、帰りは、沖電気の正門の近くに車を止めて、一恵の出でくるのを待つていなければならぬ。この行動は、長井にとって、そんなに氣楽にできる行動ではない。さまざまな思いが、彼の胸に湧きおこる。なによりも、仕事のこと、職場のことをおもひ、自

分一人だけ、こうして、門の外に在ることの意味を、毎日毎日考えさせられる。肩で風を切つて、この門を出入りし、腕のいいフライス工として、組合の役員として活動していた日々——彼は、仕事では後指させない仕事をしていたことに自信をもっている。人づきあいは抜群で、麻雀もパチンコも競馬も、労働者の遊びなら、なんでも人一倍熱心にやった。とくに、彼のパチンコ論は、玄人はだして、神技に属するとは、もっぱらの噂である。

そんな彼の手柄のよさと、一恵の内助の功というより、同志としての活躍も力になって、彼は、沖電気労組の執行委員に、職場の三分の二の人たちの支持をうけて、当選した。彼は、共産党員の活動家ということで通っているので、さまざまなか中傷や妨害もあるけれど、この時には、長井を当選させろと、みんなが動いてくれたのである。この時、数十人もの労働者が、彼のために、各職場を回ってくれる姿を見て、涙が出るほど嬉しかった。それまで、落選した時と違い一恵と二人だけで、挨拶にまわるのでなく、仲間たちが公然と行動してくれる、そのいきいきとした職場の空気に、一恵は、思わず涙ぐんだものだ。つぎの、五一年の選挙では、会社側の「長井落とせ」の露骨な妨害工作のため、票を二分の一に減らされ、落選したけれど、仲間たちの中に、まだ、あの暖かい友情は生きていると長井は信じている。

指名解雇の嵐の中で、会社の徹底した弾圧行為の中で、みんな黙りこんで、解雇直後のボーナスの時には、カンパの集まりが非常に悪かったけれども、夏のボーナスの時には、倍の金額が集まった。会社の凶暴な弾圧干渉がなければ、仲間たちは本心を出してくれるのだ。

終業になって人波が門を出てくると、顔見知りの労働者たちが、長井にさまざまな反応を示

す。たいがい、会釈はするけれど、中には、知らん顔して、そっぽを向くものもある。さすがに、いささか気分を悪くしていると、一人の労働者が車に近づいてきて、いった。

「長井さん、元気かね。頑張つてな」

長井は嬉しかった。解雇直後、もう勝負がついたといった空気になっていたけれど、一年近く頑張りつづける中で、ひょっとすると、裁判で勝つかも知れない、会社が負けるかもしれないという噂や空気が、労働者の中に流れ始めていることを、感じていた。

一恵の職場での仕事ぶり人と人づきあいも見事である。彼女は、もともと仕事熱心というより、本心に仕事が好きで、とことん熱中して、勉強する。

彼女の仕事は製造工程を書類に打ちこむことなのだが、彼女は、その工程の現場に足を運び、労働者の話をききながら、書類のうちこむ言葉の意味内容を、身体と頭に叩きこんでしまう。普通、書類の上で正確かどうかを考えるのが、キーパンチャーの常識だろうが、彼女は、生産の実際まで見なければ、納得しないのである。

だが、これだけやることの効果は仕事にあらわれる。彼女の仕事は正確無比で、時には、原稿のミスを発見してしまう。これはキーパンチャーのプロということで、職制も、彼女の仕事の能力については、まったく口をはさまなかった。

四年ほど前、キーパンチャーが休みなしに働きつづけた結果、眼が痛い、肩が痛いという、頸腕症の症状が出た時、みんなでアンケートをとり、せめて本店なみに休憩をとるように話し合った。キーパンチャー全員の意志で、課長とも話し合って、要求が通り、事務とパンチャーをわけ

て、本店なみに、一時間打って三〇分休む体制をとるようになった。

彼女自身は三年くらい前から、働き過ぎの結果、頸腕症が一番先に出て、現在は、パンチの仕事はやらないようにしているが、なにしろ、一番古く、一番長く、この仕事をやってきたのだから、係の仕事はなになにまで知りつくしている。

最近、合理化と前後して、仕事の締めつけが厳しくなり、休憩中も仕事をしている女性がいて、困ったことがある。一人がそんなことをし出すと、周囲の人が迷惑をし、休憩をとるのにも気がねするような風潮さえできてしまう。

女性の職場だから、休憩時間には、つわりの身体を休める人もいるし、はってくる乳を搾って捨てる人もいる。人減らしのため、ひどく忙しくなっている職場だから、せめて、休憩時間はゆつたりと、大切にしたいのである。みんなて話して、とにかく、みんなて休憩時間を大切にするように決め、今は落ち着いて、休めるようになっていく。

一恵は、夫が指名解雇になってからも、変わらず一生懸命働き、みんなとのつきあひも、たとえ家庭があっても、できる限り、行動を共にすることになっている。一緒にお酒ものめば、ダンスもおどる。彼女は、仕事にも遊びにも人間が人間らしく生きることには、いつでもどこでも、いきいきと行動する。それは、彼女の心と身体から素直にほとばしる行動だから、彼女は常に、ほがらかに生き、人の気持をひきかたて、楽しくさせていく。

だから、夫と四人の人たちが、職場から追放されても、しっかり者の彼女は、変わらず、職場の人びとと、明るく働き、生活している。もちろん、女性がそういう明るさを、職場でも家庭で

も、一貫してもちつづけるためには、人知れぬ、細やかな神経のつかい方と努力が必要であることはいふまでもない。

今は、家と沖争議団を守る夫明の、内助の功も大きい。彼女が疲れて、気弱になる時は、夫がしっかりと支えてくれる。

彼女が一番悲しいのは、苦勞が多いことではなく、職場の人間関係が、深いところで、会社の人間支配の網の目で、おさえられていることを思い知らされる瞬間である。

彼女が昼休みに、別の職場の人と話をすると、午後の仕事はじめに、職制に呼ばれ、「○○さんと話していたね」といわれることがある。一恵は、やっぱり、どんな時にも、会社の監視の眼の中で、生きているということなのだ。

本当に悲しいことである。一恵は、一人、声をあげて泣きたいこともある。でも、泣くわけにはいかない。彼女は、高崎事業所の中で、差別されてもまっとうに働き、生きている労働者であり、夫の解雇とたたかいつづける妻でもあるのだ。

その悲しみをこえて周囲の人たちと変わらず、つきあいつづけることが、一番必要なことなのだ。

会社では、そっけない様子の人たちが、別のところで会うと、人が変わったように、親しく本音を語ってくれる。黙ってお金をさしだし、匿名で「ともにたたかう会」に加入してくれる。一恵は、この土地に生まれ、この土地の人とともに、生きる幸せを、心の底から思う。まっとうに働き、人を愛し、仲間を愛し、明るく、気はやさしく生きる心は、必ず通じるものなのだ。一恵

は、この保守的な土地で、進歩的な思想をもち、節を曲げず、人びとに愛され生き抜いた父のことを思い出す。今、親の道の子が歩み、親がぎりひらいた土地をもっと広く、もっと豊かに育てつつあるのだ。

3 支援のひろがり

夜、近くの保育園などで、「ともにたたかう会」の集まりが開かれ、地域の人びとと一緒に、どうして、支援の輪を広げるかを語り合う時、明も一恵も、一番心から安らぎ、心の底から明日への希望と勇気が湧いてくる。

「ともにたたかう会といっても、まだ、会に入っている人が、沖電気の首切られた人を守ってたかうことが、実は、自分のことだというふうにはなっていないよね」

「だから、やっぱり、それぞれの職場で集まりもって、話し合ったり、ニュース出したり、独自の集まりを持つようにしようよ」

それぞれ、忙しい労働者や主婦が集まって、一生懸命、五人が勝利する日までたたかう方向を語り合ってくれる。高崎や前橋の町で、五人を支える大きな組織をつくるように、みんなで知恵を出し合う。

「国鉄労働組合の高崎地方本部が、私たちを支援することを決めました。明日、副委員長の方が、事務所に来られます」

明が報告すると、みんなの中から歓声があがる。一日一日、五人を守るたたかいが、群馬県民の中に、水がしみ通るように広がり始め、市民権を獲得しつつあるのだ。

五人は「ともにたたかろう会」の仲間たちとともに、この、やむにやまれぬたたかいが始まって一周年の集いを、思いきって、明るく、盛大に、成功させようと知恵をしぼっている。一五〇〇人の会員にして、五〇〇人をこえる、楽しくて、希望と勇気がわく集まりにしたい。

折戸が、法廷での意見陳述で、肚の底から、自分の気持を語った。

「今でも時々仕事の夢を見ることがあります。つい一〇月までやってきたパンチマグネットはうまくいっているだろうか、一番気になっています。

技術者として沖電気にもどること以外は、私の生きる道はないと考えています。そして、またこんなムチャな指名解雇が当たり前のことになったら、日本の将来はどうなるのでしょうか。

妻は病弱にもかかわらず、生活のためにパートとして働き出し支えてくれています。昔の大学の友人、妻の友人、全国の方々の支援も寄せられています。みんなけっして人ごとではない、大変なことだといってくれます。

最後に、高崎事業所でも、多くの人が裁判がしたくても裁判することもできず、泣く泣く自分の人生を中途で変更しました。四〇歳を越してから中途採用で職安に行かなくてはならない、かといって家庭のことを考えると裁判することもできない。そんな人たちの気持、自分の意志でもなく希望退職させられ、じっと耐えている人の気持はどういうものでしょうか。

私たちの生活も、定職につけず、なれないバイトをやったり、行商したり、大変ですが、その

人たちのためにも、一日も早く誰がみてもこのような不当なことがおこらぬよう、働き生活する権利が認められるよう、敏速な判決をお願いして、私の陳述を終わります」

III 夫婦一緒に首切られ

——若い相原夫妻の場合

1 子どもが生まれるというのに

夫が首を切られ、あるいは、妻が首を切られ、家族ともどもたたかっている夫婦のことを書いてきた。

だが、この夫婦は二人一緒に首を切られてしまったのだ。夫婦ともども首切られた三組のうち、一番若い、相原幸雄(26)、勝美(23)夫妻と生後六カ月の香利ちゃんのことである。

夫婦そろって、指名解雇になった時、勝美は妊娠五カ月の身体だった。夫は電子交換機の配線(ラッピング)の仕事、妻は、小型クロスバースイッチの組立ての仕事、二人とも高卒入社後、沖電気の現場第一線の仕事を、一生懸命やってきた。幸雄は八年間無欠勤で、遅刻もほんの二、三回あった程度、なぜ、事もあろうに、夫婦ともども首を切られなければならないのか? しかも、間もなく子どもが生まれ、希望に満ちた親子の新生活が始まろうという時に。まさか、ここまでの残酷な仕打ちを会社がしようとは、本人たちも周囲も、誰も予想しなかった。三人の若い

親子を、情容赦なく巷にほうり出さなければならぬ、それほど危機が、沖電気という会社のどこにあるというのか？ この会社に働くすべての経営者・管理者、職制たちは、自分たちの職場と、自分の暮らしを見つめ直してほしい。そして考えてほしい。沖電気をつくりあげてきた労働者のおかげがえのない仕事をとりあげ夫婦と子どもを路頭に迷わせることを、なんの良心も痛めずにできるほど、あなたたちは、人間の心を失ったのかと。

勝美は仕事中に課長に呼ばれて、肩叩きされた。その後係長に、

「やめた方が、お前のためだよ。荒っぽいこととしていて、ぶっつかったら危ないぞ。へんな子が生まれたらどうする？ 死んで生まれたらどうする？」

彼女は、頑張った。

「大丈夫です。ご心配いりません」

課長は押しつけるようにいった。

「とにかく、帰って、父ちゃんとよく話し合おうんだ！」

そして、翌日も、そのつぎの日も「どうだ？ 決まったか？」としつつこくいわれた。でも、頑張っていたら、夫婦のうち、どちらかは残ることができるだろうと信じていた。

一〇月三十一日、一斉に指名解雇通告を受けた日、幸雄のところへ勝美から電話がかかってきた。

「私……今……指名解雇だって課長に……どうしよう……どうしたら、いいの……」

勝美の声は涙声になっている。幸雄は、励ますように、叱咤するようにいった。

「そんなもの、つっ返すんだ！」

だが、電話を切つて聞もなく、今度は、幸雄のところ、N課長が、指名解雇通告をもつてきた。幸雄は、自分への通告をつき返すのがせい一杯で、妻のことを抗議する余裕さえなかった。翌日から、夫婦ともども、仕事をとりあげられ、職場から追い出すための、あらゆる嫌がらせをされた。幸雄は何度も、仕事をさせるように要求したが、その都度いわれた。

「あなたのやる仕事はない。明日からも来なくてもいい」

勝美も、仕事を前にして初めはほんの少しの仕事を、そのうち仕事の材料を一切とりあげられてしまい、一日中、座ったきりでおかれた。彼女が、じっとしていられなくなって、立って、仕事をほしいといえ、大きな声で、怒鳴られた。

「仕事なんかしなくていいから、座ってる」

係長の声は人一倍大きく、職場の隅々にまで聞こえる。ここの仕事は騒音が激しく、接点をうちこむ器械の音が響きわたり、特別に大声を出さなければ聞こえないから、自然に、誰も大きな声になってしまう。

2 沖縄から夢を抱いて大企業へ

勝美は、怒鳴り声にじっと耐えながら、故郷沖縄のことを思い出していた。この辛い時を乗りきるために、じっと、故郷を思った。「私は、どうして、いつも、鼓膜の破れそうな騒音の中で

生きなければならぬだろうか？ 沖繩のコザ、嘉手納空港を飛びたつ米軍戦闘機の騒音の下で、大きくなり、今は、機械の騒音の中で、必死に生きている……本当に、私の赤ん坊はちゃんと五体満足で、生まれてくるだろうか……”

彼女は普天間高校を卒業すると、希望を胸に上京してきた。貧しく餓しかった、母と自分の人生を、自分の力でなんとかきりひらこうと、夢を抱いて、晴海埠頭に降り立ち、沖電気という、大企業を目指した。同郷の仲間たちも、大勢、一緒にやってきた。

母は苦勞のしつづけだった。焦土となった沖繩・コザの街で、ずっと働きつづけてきた。若い時に、米軍基地兵士の美人コンテストで、優賞したことがあるほど、評判の美人だった。でも、結婚や生活に恵まれず、勝美が物心ついて、小学校、中学校と通うころも、貧乏暮らしの連続だった。

物心づいた頃には、よく、野山に、タンポポをつみにいき、カエルをとりにいって、食料にしたものだった。タンポポは油でからあげにし、蛙は肉のかわりに煮て食べた。だが、蛙もやせかけていて、ほとんど肉がなかった。それに、雑草の中を歩く時、気をつけないと、子どもたちが時々、ハブに噛まれて、生命を亡くした。

小学校に入ると、小遣いは、みんな、自分で働いて稼いだ。自分の家では、ハエを二〇匹殺すと一セントもらえたし、隣のおばさんの肩をもんであげて、もみ料をいただいた。

中学に進むと、ヤクルトの配達をし、『琉球新報』を配って、ノート代をつくった。ヤクルトは、まだ復帰前だったから、一本一セントの収入だった。彼女が中学二年の時、本土復帰とな

り、お金がドルから円にかわり、変な感じになったものだった。彼女の胸には、幼い頃から復帰というの、島がずっと寄っていった、本土にくっつくことというイメージがあった。

彼女は、こんなふうには、家が貧しくて、働かなければならないことが恥ずかしかった。人前ではほとんど口をきかず、無口な子ということになっていた。沖電気に入り、寮で、若い仲間たちを知って、とてもおしゃべりになった。

勝美は、今、こうして、東京で、新しい生活をつくり、希望を託して働きつづけてきた、沖電気、なんとも考えようもない、ひどい仕打ちの中にいて、あらためて、二三年の人生と、日本という国のことを考えた。

どんなに貧しく、どんなに、米軍の支配の中に生きてきても、今度の、沖電気の経営者たちほど、冷酷無比の仕打ちをされた経験は今だかつてなかった。

勝美は、考えれば考えるほど、涙がこみあげ、怒鳴られるたびに、お腹がキリキリ痛んだ。心臓が激しく動悸して、苦しかった。一人になって、よく泣いた。彼女自身の悲しみだけではないのだ。同じ沖繩出身の同僚が、つぎつぎとやめさせられていく。Kさんは、課長にいわれた。

「君は、身体が丈夫じゃないようだし、都会の空気が合わないようだな。身体のために、空気のいい沖繩に帰って、仕事を見つけた方がいいだろう。その方が、両親も安心だろうし、君にとってもいいだろう」

Kもやめ、Z君も肩叩き一週間ほどで、やめてしまった。沖繩出身の中でも、とくに話すのが

苦手で、いつも黙りこくっているZ君は、果たして、沖電気をやめて、どこか就職できる場所があるのか。

勝美が、あまりにもひどくやられるのをみて、ある人がいった。

「あんまりかわいそうだから、やめてしまった方がいい……」

ある主任が

「夫婦とも首は、ちょっとひどすぎるから、交渉してみたら、なんとかなるのでは……」
といってくれた時は、本当に嬉しかった。

でも、職場は日一日、みんなが物を言わなくなり、暗く重苦しい空気になっていった。

勝美には、課長に怒鳴られる辛さより、みんながだんだん口をきかなくなり、仲よくつき合った人たちが避けて通るようになることの方がずっと辛く、悲しかった。

ここでも職場集会で、係長クラスの組合員が、

「もう十分にやるだけのことをやった。これ以上やって、一部の人間のために一万三〇〇〇人が犠牲になる必要はない」

と発言するようになり、別の積極的な意見をなかなかいえない空気になっていった。「ストライキはやめた方がいいけど、指名解雇は反対だ」という人たちがいたけれど、係長たちの前では、とても発言できなくなり、無理をすれば、自分の身が危なくなるということを考えなければならなくなってしまった。もう、いきいきと自由に発言できる労働組合の集会ではなくなったのだ。

こうして、勝美たちが職場を去らなければならぬ、一月二〇日が近づいてくると、もう、

多くの人が、職場集会そのものに出席しないようになってしまった。

3 はじめて知った道

勝美は、夫とともに職場を去った。翌朝から、門前に立ち、みんなと一緒に、就労のためのたかいを始めた。ゼッケン胸に、本店にも、富士銀行にも抗議にいった。だんだん大きくなっていくお腹をかかえ、できる限り、ぎりぎりまで、たかいをつづけた。

四月、沖繩に帰り、母の側で、無事、子どもを産んだ。香利と名づけた。母が祖母となり、母親そっちのけで、なめるように可愛がって面倒をみてくれた。沖繩を離れ、仲間たちの戦列に復帰する時、母が泣いて、孫との別れを惜しんだ。

埼玉県蕨市にある、六畳のアパートに帰りつき、「今、無事、着きました」と、沖繩に電話をすると、母は電話のむこうで、声をあげて泣き出した。一週間たって、その後の様子を知らせると、赤ん坊の泣き声を聞いて、また泣き出した。

それから、母は孫の声を聞きたがり、ほうっておけば、二〇分でも三〇分でも、赤ん坊の奇声や叫び声をきいて満足し、ときおり「オッカア」と、今いったといっは大喜びする。おかげで、二〇分間三〇〇〇円なりの電話料金を請求され、首のない夫婦暮らしの現実を思い知らされた。仕方なく、その後は、時間を有効に、経費を安くあげるため、赤ん坊の泣き声をテープにとつて、一番効果的に「オッカア」などと聞こえるようなところを、聞かせることにした。

今、幸雄と勝美は朝、子どもを駅に向う側にある保育園にあずけて、活動を開始することにしてゐる。朝起きて、食事をつくり、ミルクをのませ、山のようなおしめの洗濯をすませて、夫婦揃って家を出る。このおしめは全国の支持する人びとから送られたものであり、ベビーベッドは地元の蕨特殊鋼の組合の仲間たちが、贈ってくれたものである。どちらかが、香利を保育園にあずけに行き、駅で待ち合わせて、電車にのる。別なところへ行く用事のない時には、勝美は九時に事務所について、「支援する会」の事務をするのが任務になっている。

勝美は、慣れない事務の仕事にとまどい、先輩たちに叱られながら、毎日、カードづくりや支援する会、九〇〇〇人もの会員の人たちの記帳整理に追われている。なにしろ、入社以来五年間、ガラスばりの作業室で、一〇種類もの部品を曲げたり、エアードライバーでしめたり、ハンダづけしたり、考える暇もなく、三、四〇秒に一個の割合で、コンペアー利用で製品をつくるのが、彼女の仕事だった。学校出て、それ以外の仕事は知らないのだから、自然、自分の頭で考えて、物事を判断し、処理することには、慣れていない。だが、少しずつ慣れてきて、仕事の目的や目標がわかってくると、面白くやりがいもある。

勝美は働きながら、子どもを育て始めて、最近やっと母の気持がわかるようになってきた。

母は、今もレストランでつかう、ルウを朝早く起きて煮込む仕事を、毎日つづけている。母が精出して朝、豚にエサをやり、手入れをし、朝五時ころから二時ころまで、大釜にルウを煮込みつづけて、月六万円ほどの収入をえるのだ。

“あんなに働いても働いても楽にならない。”

勝美は、まだ、四〇代だけど、働き過ぎでバセドー氏病になったり、苦勞しつづけた、母の女としての一生を思う。自分は、今から、どんなふう生きていくかを考える。

たたかいだからと張りきっていても、あんまり忙しすぎて、オルグや仕事がうまくいなくて、まったく自信をなくしてしまう時も、時々やってくる。そんな時は、自分一人、みんなの輪からはみ出しているように思えて、逃げ出したくなってしまふ。そして、洗濯に食事に掃除に、そんな仕事がとてもわずらわしくなつて、休みの時には、一日なにもしないで、ぼおとしてゐることもある。つくることは一切やめて、好きな本でも読んでいたい。幸雄が疲れているから、交替するといつても、意地になつて、いうことをきかないで、ふてくされてしまふ。

「子どもと一緒に、沖繩で生活する」

といつて、幸雄を困らせることもある。彼女には、争議が勝つて、いつか、沖繩の母と一緒に暮らしたいという願いが確かにある。

幸雄は時々、勝美の気持がわからなくなり

「俺はどうしたらいいんだ」

と悩み、

「俺が勝美をダメにしてるんだらうか」

と、気にする。

勝美は、幸雄が好きで結婚し、香利を産み、親子三人で、たたかいの生活をつづけている。わずかな間に普通の結婚では味わえない、さまざまな経験をした。

彼女はまだ若い。二三歳の母であるとともに、青春のど真中、延長線上をつっ走っている。結婚について、夫について、愛について、人生について、仕事について、今、いろんなことについて、いっぺんに、自分の責任をもつ人生の問題として、きちんとした自分の考え、自分の行動で示さなければならぬところに立っているのだ。今まで、会社の仕事の中で、知らず知らず、いわれたことだけをやるような、消極的な生き方になっていたのをあらため、すべて、自分の頭で考え、自分の心でつかみ、自分の手足で行動していかなければならぬ。すべて、つくり出していかなければならぬ。しょぼんとなった時は、大変だ、逃げようと思うけど、仲間と一緒になにかうまくできた時には、人生こんなにすばらしいと感動してしまふ。いろいろ浮き沈みはあり、晴れの日も雨の日もあるけれど、やっぱり、みんなでたたかうようになって、初めて、こんなに大勢の人と知り合い、話し合い、力を合わせれば、負けないで、みんな生きていく道もあることを、少しずつわかり始めてきたように思う。

一〇月のある日——昨夜まで降りつづいていた暴風雨が上がり、からりと晴れあがった、秋日和。虎の門の沖電気本社前の歩道に、沖電気争議団と支援する会の人びと、二〇〇人がせい揃いし、若者たちのフォークの歌声が、オフィス街に広がっていく。

八人ほどのフォークグループの真中に、勝美のひとときわやせて高い姿があった。歌う歌は、「心さわぐ青春の歌」。ドラムを叩く、中野達弥、ギターの八島、ベースの荒木、フルートの平井、沖バンドの若者たちが、のんびり、はがらかな音を、昼の食事をすませ、歩いていく労働者

たちに、響かせる。

「沖電気は不当解雇を撤回せよ！」

「われわれは必ず、沖電気に戻るぞ！」

力強いシュプレヒコールが終わると、また、歌声が、人びとの耳に心地よく響く。勝美は、気持よさそうに歌っている。この瞬間は、香利のことも、沖繩のことも、すべてを忘れて、このたかいの歌を全身でうたう。首を切られて、あきらめず、たたかう若者たちの心が一つになり、やさしくのびのびとした歌声になって、人びとの心にしみ渡っていく。

「私たちは職場に帰りたいのです。」

私たちは仕事をしたいです。

みんなと同じように人間らしく、きちんと働き、きちんと生きていきたいのです。

沖電気の経営者は、思い出して下さい。

私たちは、今、職場にいる仲間とともに、せい一杯働いて、沖電気をつくってきた労働者です。

日本は、民主主義の国です。労働者の生きる権利、働く権利が、きちんと保障されている国です。

そのことを沖電気の経営者に守ってもらいたいのです。

みなさん、聞いて下さい！

私たちの心を、私たちの歌を！」

第三章

人間使い捨て

——技術革新・体質改善の名のもとに

I 一〇億余の黒字転化と大量新採用のなかで

—解雇後一年が証明するもの

沖電氣に、情無用の合理化首切りの動きが出てから、一年三ヵ月の年月が過ぎる。今、ふり返ってみると、当時「会社になんらかの合理化はあるにしても、『指名解雇』まではやらないだろう」という見方が、解雇者たちを含めて、大方の考え方であったように思う。

よく注意してみれば、七八年三月だけで、中高年職制を一〇〇人も整理解雇し、計一八〇〇人をこえる労働者を、四年間に減らしてきた事実は明らかだったし、六月に新聞発表された三宅社長の話でも、合理化の意図は、明確にあらわれていたのである。

今思えば、労働者の見方が甘かったし、会社側の狙いや意図を見抜けなかったということなのだ、よく考えてみれば、多くの人が指摘しているように、「死語になった『指名解雇』はまさかやらないだろう」というふうに判断することの方が、正常で平均的な労働者の感覚であったということであろう。つまり、『指名解雇』は労使関係として異常な事態であるとともに、経営者の中ですら「いかにも電電公社出身らしい役人的発想と、古い伝統にあぐらをかきつづけた沖電氣らしい甘え」という見方がでるほど、常軌をこえた行為であったことは間違いない。

その後、沖電氣の表にあらわれた諸状況をみても、『指名解雇』がどれほど異常な大企業への犯

罪行為であったかは明白であり、差し迫った経営危機から行なわれたものでなく、三年後の史上最高の利益を確保し、エレクトロニクス産業界の技術革新に落伍しないための「体質改善」、労働者支配を狙いとした「事実上、誰の目にも明らかになってきている」。

七八年度の決算では、対前年比で営業利益は二倍の五九億円、經常収支は、前年の赤字から一挙に一〇億九九〇〇万円の黒字を計上し、『日本経済新聞』の七九年度上期中間決算の増収益ランキングでは、沖電気は、二八位にランクされていること。

雇用の面では、女子二名を新規採用し、八王子事業所などで明らかになったように、アルバイトや下請け会社を通じての社外工募集を行ない、一九八〇年度は高卒一五〇名以上、大卒一〇〇名を予定していること。すでに、解雇直後、「沖ソフトウェア社員」として、約一〇〇名を採用し、その後も大量に採用をつづけていること。

残業は、解雇進行中から激しく、品川、芝浦、本店の三事業所で、多い時には、一日四〇〇〇時間を超えており、休日出勤も、月三五〇〇人を超える月もあるということ。

こうした、「指名解雇」中にすでに明らかだった、ソフトウェア部門、IC生産部門などを中心とする、労働力不足、外注生産急増の状況は、「指名解雇」の目的が、会社が説明していたような経営危機で人が余っているということではなかったことをいよいよ明白にした。

はっきりいえば、前述した技術革新と沖電気の古い体質の改善、両方の必要を認めるとしても、まず技術革新で必要なくなる部門の労働者に、必要な教育をほどこし、配置転換することこそ、最初にやるべき努力だったといえるだろう。

現に、忙しい仕事をかかえていた、本店ソフトウェア部門や八王子IC部門の労働者たちが、首切られたことは、まさに、仕事の必要性とは別の理由で切られたこと以外の何ものでもない。そんな職場では、さっそく、アルバイト労働者を入れたり、他部署から労働者を移動させて、穴埋めをするという状況なのである。

こうしてみると、あらゆる状況が、「指名解雇」がいかなる理由からも必然性のない、不法不当な犯罪行為であるという事実を立証しており、「指名解雇」しなくても、技術革新に勝ち抜く、体質改善はできたということが出来るのだ。要するに社内的には指名解雇者をいけにえにして、すべての労働者が、会社の意のままに動くようになるファッショ的生産体制をつくり出すことが目的であったと、もう一度断ぜざるを得ないのである。

その結果、社内の最近の噂でも、会社が目指した「沖電気一〇〇年に当たる一九八一年に売上高一七〇〇億、売上利益五%以上」という目標は、達成できるメドがついたという声が盛んに聞こえてくるのだ。

かくて、沖電気経営者が、「指名解雇」を見せしめにして一挙に進めた、人間切り捨て中心の合理化はその後、つぎつぎとさまざまな労働者の悲劇と矛盾を生み出しつづけているのだ。

Ⅱ 残酷の一語——中高年の場合

1 「玉突き」、CWGグループへ編入・ローンも終わらず

中高年層が、この数年、沖電気の合理化進行の中で、おかれた状況は、残酷無惨の一言につき。職制・平労働者をとわず、配転・出向・首切り、あらゆる形で、今までの職場を追われて、ほとんどの人たちが、不安定で、屈辱に満ちた状況の中で、必死にもがき、たたかわざるをえないのが実情である。

もう数年前から、肩叩きをうけ、下請け会社にうつっていったAさん(58)のようなケースが少なくなる。Aさんは沖第一次下請けのB社にうつり、今度の合理化の中で、親会社沖電気から送りこまれる後輩に席を空けるため、また、この会社を首になった。いわゆる「玉突き」というケースで、親会社から下請けの順序に従って、順送りに、労働者が送りこまれ、首を切られる状態をいう。妻子を養うため、まだ働かなければならないAさんは、その後、九ヵ月ほど、転々と小さな町工場を渡り歩き、ひどい労働条件のため落ち着くことができず、今年の夏から、また、沖電気の第二次下請けの子会社で働くようになった。

出向をまぬがれた人たちは、解雇の年の初めころから、社内に、CWGという特別なチームを

つくられ、中・高年・病弱者を集めて、仕事をさせられるような取扱いをうけた。前述の、品川工場部品課のフロアに、一五人ほどの人たちが集められて、仕事は、部品の線むきとか、ちょっとした組立てをするとか、基板組立てのための準備作業をするとか、余った部品などを集めて管理するとか、時には、高いところに登って機械の清掃作業をするとか、要するに、雑用、補助作業を容赦なくやらされた。

「三〇年も生産技術の仕事やってきた人間が、高いところにのぼって、機械の掃除をしてねえ、若い連中は、掃除のおやじとしか、見ませんしねえ……みじめな気持です……」

そう語るMさん(59)も希望退職の対象にされ、誰にも相談せず自分一人で、まだやめるわけにいかない、抵抗し、頑張ったけれど、結局、やめて、今新しい職業訓練のために、訓練所に通いつづけている。このCWGにいた人たちは、今、もう、ほとんど社内には残っていない。

四〇代になったばかりのXさんの場合は、なんともいえず、つらく悲しい状況である。妻や子どもたちに、希望退職させられた事実を、率直に語る勇気がなくて、Xさんは、今までと同じように、弁当をもって家を出て、毎日、公園のベンチなどで、それを食べて、職探しをつづけているのである。なかなか、仕事が見つからず、半年たっても、そんな日々がつづいた。

四〇代で解雇になった人たちの仕事と経済的状況の矛盾は大変深刻な場合が多い。Sさん(45)の場合は、元課長、子どもはまだ、中学と高校生で、家のローンも払い始めて間もなく、とにかく年からいっても必要からいっても、まだこれから一人前以上に働かなければならない。だが、沖電気の課長と同じレベルの賃金を保証する会社はなく、今なお、アルバイト程度の仕事をしな

がら、本格的な再就職の可能性を追い求めている。

2 日向ぼっこが唯一の楽しみ

——馬鹿にされても恥ずかしくても

出向にもならず、首にもならず、沖電気社員としてとどまった人たちの状況が、首になった人たちよりも幸せといえるかどうか。それほど、みじめでつらい立場におかれているのが、残った中高年労働者のあからさまな仕事と生活の現状である。

ずっと、ハンダづけの仕事をしてきた労働者が、芝浦工場の食堂の皿洗いをさせられているし、今まで、腕のいい機械職場の職制だった人が、関連企業の人間として、自分の指揮してきた職場のクズ拾いをやらされているケースもある。

主任・係長クラスの四〇代社員たちが、守衛になっていたり、本社に連れていかれて、するともなく、配車係をさせられたり、新入社員の仕事といえるコンピュータ用紙のとりかえをやらされ、郵便物に切手をはって、局まで持っていくといった事例が、はいてすてるほど転っている。

もはや、中高年の人たちがこんな状態におかれていることが、気の毒であるとか、非人間的状況であるとかうけとる感受性も、若い社員たちの間に薄れているようにみえる。

かわいそうとは思っても、仕方のないことで、電機・エレクトロニクスの職場には中高年はいらないし、向かないと考え、少なくとも、自分に関係あることと考える心のゆとりも、その中高

年労働者に、未来の自分を見る先見性も失われている状況である。あるいは、感じて、表面に出すことのできない、すさまじい生産増強と働き過ぎの現実が、働きざかりの若年・壮年層をしぼりあげているといった方がいいだろう。

長年働きつづけてきた、現場からひきぬかれて、本店の雑用的仕事をさせられている中高年労働者たちは、昼休みになると、誰ともなく、寄り集まって、玄関の前で、日向ぼっこをする。この光景をみて、若い社員たちは、なんと無様で、かつこうの悪い年寄りたちよとつぶやく。本店育ちの若年社員たちにとっては、昼メシ時に所在なくむらがる習慣など、見当もつかないのである。だが、当事者たちにとっては、慣れない、居心地の悪い人間関係の中で、唯一、息がぬけ、ほっとできる時なのである。なつかしい仲間、昔のいきのいい仕事の日々を共有し、語り合うことのできる仲間たちの、思い出に生きる、唯一の時なのである。

ある人がいった。

「それはもう、何度も、やめたいと思っています。偉そうにそっくり返ってる三〇や三五の若い職制たちに思いきり、たんか切って、辞表叩きつけて、サヨナラしたら、どんなにせいせいするかと思いません。

でも、現実は何え……やっぱり、やめるわけにいかんし、他所へいくあてもなし、少々、馬鹿にされても、恥ずかしくても、今のままでいた方が、いいんです。仕事はどんな仕事でも家族に、沖電気の社員だといって、家を出て、出勤できる、それが、大事なことなんです」
あわれであり、残酷であり、屈辱だと、自他ともにわかっていても、そういう本音で語り合

い、人と触れあうことのできなくなっている職場、そして、そのことを変えようと努力しない労働組合には、もう、なんの期待もかけなくなっている労働者たち。

「自分の身は自分で守らなければ……」

そうつぶやきながら、一人去り、二人去り、いつの間にか、長く見慣れた、職場の主であり、仕事の鬼であった労働者たちが、戦争中からこつこつ働きつづけ、沖電気一〇〇年をつくりつけてきた、栄光の中青年労働者たちが、そっと、職場から消えていく。誰にも祝福されることなく、そっと頭を垂れて、職場を去っていく。

そして、それまでできなかった人たちは、自ら、自分の生命を絶つ道しか残っていない。本庄事業所の茂木茂男さん(48)は、希望退職肩叩きの進行中、一〇月二六日に、近くの林で首をつつて死に、『朝日新聞』は、

「茂木さんは以前から胃病に悩み、さらに最近には沖電気工業が従業員約一割の希望退職募集の方針を打ち出し、自分も整理されるのではないかと心配していた、という」と書いた。

また、「仕事がおそい」「やめた方がいい」といわれつづけて、泣く泣く退職した、芝浦事業所の橋本孝久さん(51)は、指名解雇者が、会社から追い出される一月二〇日、突然、この世を去った。

III 女たちの運命——現代女工哀史

1 電機の脚光を支えた短い青春

女子労働者もまた、中老年労働者に劣らず、激しい切り捨て、使い捨て政策の中で、ここ数年、どんどん、仕事を奪われ、やめさせられていく人たちが、ますます多くなっている。電機産業は、もっとも新しく、もっとも脚光を浴びた若い女性たちの職場であるといわれるようになって、もう二〇年近くがたつ。テレビを初めとする家庭製品、そして、情報通信関係の機器などが急速に生産を拡大し、コンペアーを前に白いスカートの娘たちがズラリと並んで働く職場の光景は、なにか希望につながる明るい話題として、新聞・テレビをにぎわしたものだ。

今、沖電気争議団には、その時代から一〇年以上働きつづけてきた、梅沢、斉藤、五味田、中村、松本、板垣、東田、米田、鹿角、宮部の一〇人の女性たちがいる。仕事に希望がもてなくて、賃金が安過ぎて、二五にもならないでやめていく女性が多い中で、この人たちは、親を養い、結婚をし、子どもを育て、一生懸命、電機職場における女性の世界をきりひらいてきた人たちである。希望退職の動きの中でも多くの女子社員が、納得のいかない理由といきさつで、会社をやめさせられた。

その時の気持を、板垣てつ子はつぎのように書いた。

「ローンの返済と母親や子供の扶養のために『希望退職には応じられない、最後までがんばろう』と家族会議まで開いて決めたのに……『あなたがやめなければ、ダンナをやる』といわれ、泣く泣くやめていった婦人。

一年中二〇度の温度の職場で働いてきたために指の関節炎をおこし、この一〇月に手術をしたばかりの女性もやめさせられました。

『今やめても再就職の道はない、指名解雇されてもやめない』と誓いあったのに、彼女のアルバイトに職制が毎日電話したり、係長や主任までがのりこんで責めたてたのです。そして彼女はわざるをえなかった。

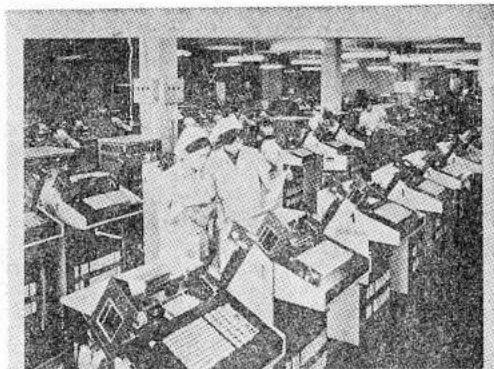
『私の手はごらんのとおり字も書けません。そこまでしてやめさせたいのならば、あなた方の好きなようにして下さい』

その次に来た時には、退職金をおいて逃げるように帰っていきました。

私は、この二人に『私の分までがんばって下さい』といわれました。そして、私は『あなた方の分までがんばる』と誓ったのです」

この女性は、今も、手の腱鞘炎の症状が直らず、頭痛や身体の痛みにたえながら、職探しをつづけている。彼女には、もう病んだ心と身体を休めることのできる故郷も家も、ないのだ。電話をして、取材を申しこんだ時、彼女は、苦しそうな声でいった。

「今は、そっとしておいて下さい。今は、お話したくありません」



日立製作所の工場



ワヤメブリン・カローの工場

電機の栄光を支えた婦人の青春

みんな、学校を出て、仕事と人生をきりひらくことを夢みて、有名大企業「沖電気工業」に入社してきた娘たち——その大半が、夢破れて、恋人や結婚にも恵まれず、疲れきって病んだ身体をひきずり、二三か四で、もう年をとったと肩身の狭いおもいで、職場を去り、どこかへ消えていってしまった。故郷に帰れる人、家に帰れる人はまだいい、なんのあてもなく、どこへ行ってしまったか消息もわからない多くの娘たちがいる。

中村光子(31)

は、かつて一緒に働き、一緒に希望を語った、同僚たちが、どこでどうしているのか、できたら探してでも会いにいきたいと思う。

彼女が入社したのは、いよいよA型交換機からクロスバー式交換機へ

と、電話交換機が大きく変化する代わり目の時代、職場は若く希望に胸ふくらませた一五歳から一八歳くらいの娘たちであふれていた。

彼女は大田区馬込の中学を卒業すると、すぐ沖電気に入社したのだ。

父がクリーニング屋の職人をしていて、戦争中から戦後にかけて、苦勞のしどおし、貧乏のしどおしの中で光子が生まれた。戦争が終わった翌年、昭和二年のことだった。

疎開先の栃木の田舎で、住み込み先が、父につらくあたり、家族五人で、つれこみ旅館に夜逃げして生きのび、やっと夢見た東京へ戻って、住みついたのが、馬込のおんぼろアパート。南京虫が一杯いる、六畳一間に、親子五人がひしめきあって、雨がたくさんふると、胸まで水につかってしまふ暮らしだった。まだ、汲みとり便所の時代で、雨の水と一緒に、便所がぶかぶか浮かんだものだった。

彼女が中学二年の時、バレーボールの合宿にいつて帰って見たら、父親が死んでいた。姉たちも中学を出ると働き、彼女も早く、仕事をしたいと思った。クラス五〇人のうち、八人くらいが就職組で、やっぱり、進学組が大きな顔をしていて、いやな思いをしたものだった。

彼女の仕事は、クロスバー交換機のWSR（ワイヤースプリングリレー）という、名刺入れくらいの大きさの部品を、組立て、調整する仕事であり、これがたくさん組みあわされて、あの大きな交換機の架^カが^カできあがるのだ。

同じフロアには、まき緑のコイルをつくる職場もあれば、コイル組立てをする職場もあり、彼女たちのリレー組立て調整の職場もあった。

コンペアーの前にまず四人が並んで組立て作業をする。できたものが運ばれて、一〇人ほどの娘たちが調整作業をし、検査をするのである。

その頃、職場の空気はなごやかで、楽しいものだった。労働組合の青年部の活動も活発で、職場には、自由にいたいことがいえる空気が流れていた。仕事のスピードもそれほど速くはなく、時には、働きながら、歌うこともできたし、コンペアーにお菓子をのせて、とどける余裕もあったから、かえって一人ひとりが意欲をもって仕事にうちこむことができたのだ。仕事そのものの中にも、終わった後の人間関係の中にも、人の触れ合いが確かに存在していた。

だから、会社がその頃、家電の女子職場でよくやっていたのを真似て、ネックカーフやスカーフをかぶれといった時には、強制されるのはいやだと、みんな反対していうことをきかなかつたものだ。

2 職場・生産体制の急変のなかで

だが、一九六〇年代が進むにつれて、職場の空気は急速に変わっていった。

もっとも大きい要素は、やはり、技術革新による生産体制の変化であり、クロスバー交換機の生産工程そのものの変化とともに、大きくは沖電気の生産そのものが、クロスバーから電子交換機生産、そして半導体コンピュータ生産の導入へと大きく変わっていくプロセスの中で、今までの職場のあり方が変えられていったのである。

同時に、労務政策が自由な職場活動を抑え、自主的な労働組合の活動を制限する方向が目立つようになり、技術革新そのものというより、技術革新にともなう、仕事の変化を利用して、労働者同士の人間的触れあいを失わせる職場内外の労働者管理が行なわれるようになった。

歌声喫茶にいったことで、職制に呼び出されて、しつこく嫌がらせをいわれるような状況があちこちの職場で増えていき、職場の空気は、みるみる悪くなっていった。

この空気に嫌気がさして、とくに若い労働者がやめていく現象も目立つようになった。世の中心体は、高度経済成長期の真ただ中にあり、沖をやめても、他にいいところあるという空気が若い労働者には強くあったから、いやになると簡単にやめていった。

それでも、女性でも働きたいという人たちも増えて、そういう人たちは、がまんして、定時制高校を卒業してやめる人、各種学校を卒業して、保母や看護婦の資格をとってやめていく人などがつぎつぎにでた。

光子は結婚し、子どもを産み、今、首切られて、なおたたかいつづける中で、あらためておう。

青春の何年間、沖電気のある時期に、確かに、いきいきと流れていた働く女性同士の連帯感、つまり、仕事そのものの中に、今より触れあいと希望があり、ゆとりのある気持で働くことのできた、職場生活。光子には、あの女性の働く職場にあった、充実も意欲も、決して、幻ではなかったという実感が身体の中に生きている。みんなが去っていったのも、仕事をつづける見通しがもてず、人間関係が悪くなり、一生働き人生をかける見通しがもてなくなることが原因

なのだ。もし、そんな労務管理がやられなければ、もう少しましな給料がもらえて、気楽に共稼ぎできるならば、もっと大勢の同僚たちが、やめないで、今も働いているはずだと思ふ。

第一、光子がずっとやっていた、リレーのハンダづけの仕様のうちに、小さなピンセットの先で、一ミリほどむいた細い線の先を穴に入れハンダづけをしていくといった細かく、器用さと敏捷さを必要とする作業は、男性よりはるかに適している。会社が人減らしを始め、女子社員補充をしなければならぬから、彼女の職場でも、他の事務職場から送りこまれてきた男子社員が、同じ仕事をやるようになったが、仕事の出来は、ずっとよくなかった。だから、リレー職場では、女子があくまで主力であり、男性は品物の運搬など、副次的な仕事が多かった。

光子は、悲しいけど、沖電気だけでなく、電機の職場では、まだ、女性が生涯働いていける労働条件も環境も確立していないという事実を、認めざるをえない。ソニーでも、松下でも、日電でも、本当に、女性は、一八歳から二三、四歳ころまで、若くて張ちきれそうな、春青の一時期だけ、減茶苦茶に働かされ、後は追い立てられるようにして職場を去らなければならない。現代女工哀史がつづいているのだ。そのことに満足できずに、頑張りつづけた、彼女たち一〇人、そして、それにつづく、五人の後輩たちが、指名解雇されてしまった。

光子はなんとしても頑張りぬき、勝ち抜いて、職場に戻ろうと思う。人間らしく、胸をはって一生涯働きたいことのできる仕事と人間の世界を、沖電気の職場につくろうと決心している。たとえどんなに技術革新が行なわれても、会社が、必要な研修と教育を行なえば、彼女たちは、新しい知識と技術を身につけて働きたいという意欲も能力も、もち合わせているのだ。今、全国

の働く女性の職場がふたたび、女性締め出しの攻撃にさらされている時、なんとしても、その攻撃を打ち破り、一五人の女性がたたくい抜いて職場に戻り、電機の職場に女性の仕事の世界を確立する一里塚となるために、頑張ることを決意している。

IV 危険を押しつけ、管理支配は一貫

— 下請け関連の運命

1 機械に人間を合わせる生産

電機産業において、生産の下請け企業に依存する割合は大きく、家電松下電器の下請け管理のすさまじさなど、伝説のように語られているが、経営体質の古さが目立つ、沖電気の場合も、次第に下請け関連企業を組織化し、情報機器総合メーカーとしての体質づくりをはかる動きが強まっている。通産省の指導で、最初、沖電気だけ日電・富士通・日立など大手各社の超LSIの開発グループからしめ出されていたけれど、現在、電電公社の技術援助をうけて独自に九州に超LSI工場を新設するなど、沖のこの分野への割りこみが本格化し、バスに乗れるか、遅れるかの大事な時期に立っていることは確かである。

目下、生産拡大の目玉部門になっている本店ソフトウェア関係、八王子事業所IC関係での、

仕事の下請け外注化の度合は、きわめて大きく、労働者のおかれている労働の現実には、機械に人間を合わせる生産の「一典型」といっていいほどですさまじい。

ソフトウェア部門は、本店ソフトウェア本部を中心に、各事業所でも扱っているが、現在、仕事量はますます増加の方向にあり、社員の残業強化だけではこなしきれず、場合によっては、外注依存度五〇%という仕事の進め方をしている。本店関係のある技術者は所定時間内労働時間一七〇時間をこえる、一九〇時間の残業をひと月間にやった。つまり、一日あたり七時間もの残業ということで、毎晩夜中まで働いていたことになる。最近ではついに、三〇〇時間を超える残業をした技術者がいることを耳にした。

そこで、下請け企業、沖ソフトウェアの役割が重要になり、現在、沖電気の一〇〇%出資によるソフトウェア労働者（プログラマー）の提供貸出し会社の機能を、フル回転で果たしつつある。指名解雇に前後して、沖が四〇人以上の大卒者を募集したことが、『赤旗』にスッパ抜かれ、問題になったが、沖電気は「四〇人の採用は、沖電気でなく、沖ソフトである」といい逃れをした。だがそれはいい逃れにならず、要するに、沖電気の剩員どころか、決定的に人手不足の現実と、下請け切り換えの状況を、実証した結果になった。

ソフトの場合の外注仕事の実際は、沖電気社員の指導のもとに、派遣されてきた沖ソフトの労働者たちが働く形が、一般的であり、沖ソフトの労働者に仕事の責任をもたせることはほとんどない。海外の出張仕事の場合など、下請けやよその労働者が、沖電気社員のマークをつけて仕事する場合が少なくない。こうした実際は、新しい生産形態における人間貸出（昔の口入れ業）的

内容をもっており、職業安定法違反の疑いも考えられる。

このように、仕事量が増えても、下請け企業でこなしていく仕組みは、通産省の指導にもとづくものであるとともに、労務対策の必要上からきているのだ。つまり、仕事の性質が、頭脳を酷使し、しかも徹夜徹夜の連続で、ソフト技術者三五歳限界説が常識になっているように、耐えられずやめていく若者も多く、若く安い労働力を、必要に応じて、新陳代謝させる仕組みを生み出しているのだ。

八王子の半導体関係の生産も、まったく、労働者殺しといっているいい労働条件を労働者に押しつけ、ここでも社員、関連下請けをとわず、大変な人手不足の状況が生まれている。

仕事の性質上半導体加工は炉を使い、中断せずに作業する必要上から、連続操業、そして、二交代制による二四時間操業が前提となっている。そこで、現在とっている新勤務体制は、夜の二時間勤務を三日つづけて、後四日休むという、変則で苛酷な勤務形態を、多くの労働者に強制している。品川工場から、労働者を配転させてもたりずに、アルバイトや八王子近辺や山梨あたりの外注に人を集めて、仕事をさせる状態が増えている。調査の中で、山梨県の多月で人員を募集し、沖電気で働かせるトンネル採用の実態もつかまれてきている。さらに、できあがった半導体部品を組立てる仕事は、労働力の安い、香港・台湾などでやらせる体制もとっているのだ。

2 下請け関連支配は労組支配も一体で

—金石舎、炭特殊製鋼の実際

沖電気は、こうした下請け関連企業の労働者の掌握には神経を使い、沖ソフトなどは、沖電気労働組合の一分会の扱いをして、すべての沖電気関連企業における労働者支配の貫徹に心を配っている。労働組合関係でも、かつては、沖関連協という形で、全国金属、全電線など、上部単産のちがう労働組合も参加していたけれど、昭和四三年以来、沖労連ということで、電機労連傘下の組合を中心に、たたかう組合＝全金系異分子排除のやり方をとっている。

下請け関連企業の中でも、労務支配が思うようにいっていないところには、情容赦ない、沖電気労務管理を貫徹させようとする。

沖電気合理化の始まる、七カ月前の三月には前述したように千葉県にある水晶振動子をつくる連結関連企業金石舎研究所の労働者に対して、同じやり口での指名解雇を強行した。まず、希望退職募集をして、ひきつづき、二カ月後には、指名解雇して、会社が好ましくないと思う労働者たちを排除したのである。

《希望退職の募集等について》

(1) 正規従業員の希望退職の募集

イ、募集対象者

正規従業員で退職を希望する人。なお次の各項に該当する人には退職を勧奨したい。

- ① 勤務成績不良の者
 - ② 欠勤、遅刻、早退が多く、勤怠の悪い者
 - ③ 病気休職、長期欠勤等のある者
 - ④ 健康面、能力面等に問題があり、十分な業務遂行に支障ある者
 - ⑤ 勤労意欲の欠如している者
 - ⑥ 業務の遂行に非協力的な者
 - ⑦ 上司、同僚との協調性に欠ける者
 - ⑧ 業務上の指示、命令に不服従または違反した者
 - ⑨ 職場規律を乱す者
 - ⑩ 資産があり、当面生活に困らない者
 - ⑪ 自家営業（農業を含む）等により給与以外に収入の有る者
 - ⑫ 共稼ぎをしており、配偶者に収入の有る者
 - ⑬ 子弟が既に成人しており、当面生活に困らない者
 - ⑭ 配置転換を要する者であって、配置転換の不可能な者
 - ⑮ 住居の移転を伴う勤務地変更、出向等の出来ない者
 - ⑯ 今後の厳しい会社諸施策に耐え得ない者
 - ⑰ その他、前各号に準じ会社に貢献する度合の少ない者
- ロ、人員 二四〇人

この解雇基準は日経連主導型で沖電気の場合とまったく同じ発想・同じ基準といえるし、それでも、希望退職しめきり、指名解雇通告の期間が沖電気よりはひと月ほど長い。沖電気のみならず一九九日の希望退職募集期間がいかにも異常かよくわかる。沖電気の場合は、沖労組内の好ましくないと考える労働者を切り捨て、金石舎の場合は、全国金属に所属する第一組合員切り捨てのやり方をとったのだ。明らかに、やがて沖電気本体で、指名解雇の大バクチを打つための、前段攻撃を金石舎にしかけ、その反応を見たと考えられる。沖電気労働者は、この攻撃がやがて自分たちに向けられるとは、考えなかった。労働者は、いつの場合も、人がいい。

現在、一六名の指名解雇された第一組合労働者たちが、争議団を結成して、裁判闘争をふくめて、たたかいを進めている最中であり、沖電気の指名解雇撤回闘争の発展とともに、今後の動向が大いに注目される。

この金石舎争議団は、地方誘致企業の特徴として、地元採用労働者、とくに、平均年齢三〇歳前後の既婚婦人が多い点であろう。農業だけでは生活できず、家計の大きな部分を背負っている農村婦人が、仕事と自立への願いをこめてたたかっている点で、沖電気における婦人の職場確立のたたかいに通じ、民間職場の婦人労働確立の大切な任務も背負っている。

同じ、関連下請けでも、埼玉の蕨特殊製鋼の場合は、同じく沖電気一〇〇%出資の磁石鋼、珪素鋼などを主力製品とする会社で、一度、首切りを強行しようとして、失敗した過去がある。一九七五年、クロスバー交換機から電子交換機生産へ体質改善する時期、狂乱物価による不況の影響の中で、沖電気は、蕨特殊製鋼の体質改善と全国金属第一組合つぶしを考えたことは間違いな

い。沖電気の労務指導のもとに、ことがはこばれたけれど、組合側の適切な対応によって、希望退職者がそんなに多く出ない間に、会社側の指名解雇をふくむ合理化の強行を食いとめることに成功した。彼らは、希望退職が出たら、すぐ対応し、ブラック・リストを作らせず、賃金以外の労働条件の変更を強行させない、さらに、すぐ地域共闘を組むなど、実に、敏速な行動で、沖電気資本の動きを、内外から封じこめるのに成功したのだ。

沖資本は、この頃から、関連企業の中で、経験を蓄積しながら、今度の、沖電気指名解雇攻撃の手法を、周到に準備した傾向がある。蕨特殊製鋼での失敗を生かして、金石舎の希望退職者募集は、短い期間で終わらせ、間髪を入れず、「指名解雇」に切りかえて、なりふりかまわず、労働者を強圧的に攻撃する方法をとった。金石舎で成功すると、沖資本はさらに、期間を短く、鋭く、労働組合をまきこんで、指名解雇パニックを、沖電気各事業所に、おこさせることに成功したのである。

沖電気の労働者が、会社側の労働者締め出し攻撃にさらされている時、蕨特殊製鋼・金石舎の労働者から受けた、具体的な協力支援は、大きな励ましと力になった。

蕨寮から、中野百合夫など指名解雇された四人の労働者が追い出される攻撃を受けた時、蕨特殊製鋼の仲間が駆けつけ、守ってくれた力は、争議のイロハも知らなかった若い沖電気労働者を大いに、力づけた。彼らが、寮防衛に駆けつけた眼の前に、四人への退寮通告書をもって、元電機労連幹部で、今は沖電気厚生課長に「昇進」した、佐川善作が現われた時、みんないっせいに、彼をとり囲んだ。

「なにしに来た！」

「労働者を裏切って、なにをするんだ！」

「あんたも、いやしくも、電機労連の中執だったんだらう」

「四人の労働者を首切って、寮から外におっほり出すことを、あんたはやるのかね！」

全金蔵特殊製鋼支部の労働者たちは、怒りをこめて、沖電気の仲間たちのために抗議した。彼らは、それ以上、ゴリ押しをして四人を追い出すこともできず、引き揚げていった。全金蔵特殊鋼労組の小野委員長が、感慨深そうにいった。

「沖電気の若い人たち、本当に、変わりましたねえ。初めは、ピラのまき方もわからなくて、われわれが地図を書いて、教えてあげてねえ……」

下請け関連企業のたたかう労働者とともに、現在、さまざまな首切り合理化の重圧に苦しんでいる労働者の立場にたつたかうことは、沖電気争議団にとって、きわめて重要なたたかいの方向である。民間大企業でのたたかいが、少しずつ前進していく芽の一つは、ここにあることは確かで、もう一つの芽は、日電、松下、ソニーなど、同じ産業に働く労働者との連帯であり、そして、さらに、地域のさまざまな職種の労働者たちと、地域共闘をつくりあげることが三つ目の、新しいたたかいの芽なのである。沖電気のたたかいはここにも、新しいたたかいの可能性と希望をもっている。

V 技術者たちの運命

——人間と技術消耗のなかで

沖電気における「技術革新」「体質改善」の名による人間切り捨て合理化の問題点を、中高年、婦人、下請け関連企業の分野で、見てきた。今、沖一〇〇年を直前にして、「指名解雇」を突破口にした沖電気全事業所における人間支配の労務管理が定着しきるか、それとも、この不法不当な労働者切り捨て管理の非が国民の前に明らかにされ、新しい道をきりひらくか、この大事な分岐点に来ているように思う。

沖電気の技術者の状態に触れてみよう。その生の声を伝えながら。解雇されて、技術から切り離された、前述の名大大学院出身の折戸や、東北大工学部出身の争議団幹事中屋重勝、同じ東北大大学院出身の鳥越一志(33)など技術開発の仕事をしてきた労働者の仕事への思いはまた格別である。板垣のように、職場で仕事をとりあげられている人もいる。二〇年働きつづけ、つくりあげてきた労働者の頭脳と技術が、ある日突然とりあげられた時の精神の状態をなんと説明したらいいだろうか。商社で、外国語のベテランが窓際族になる話、超一流の機械工が掃除夫になる話、今、さまざまな職場で人間と技術抹殺の人事管理が資本の意志で、民間企業にまかり通っている事実を、見聞するけれど、中でも、技術者と呼ばれる人たちが、自分たちの正確に精密に築

きあげてきた世界をとりあげられた時の転換のきかない悲哀は、格別であろう。

1 激変する技術とともに使い捨て

— 研修・育てることをせず

その点で、解雇者の中でも、ICのプロセスや回路づくり、ソフトウェアのプログラマーたち、そして新製品の開発にかかわるすべての技術者と呼ばれる労働者たちの悩みは、複雑でデリケートである。

前述したように、この部門に所属していた労働者にはもともと、「指名」どころか、人減らしの必要などまったくなく、むしろ人材が足りないのが現状なのだから、すぐにも職場に戻ってやる仕事は山積している。

だが、問題は、この技術者の世界の進歩は、まさに、今や、日進月歩といって過言でなく、超LSIの進歩にしても、二、三年周期で、倍、倍とその能力が大きくなっていく状況にあるのだ。ということは、二、三年単位で、技術者のレベルは、どんどん変わっていく、企業があるシステムとともに、技術者の生命を終わらせ、使い捨てにしてしまう事態が進んでいるのだ。

会社は、機械システムに、人間をつけてやるといういい方をする。つまり、ある一つの新しい機械装置が開発されると、その装置の生命のある間、それにかかわった技術者をとことん使いきるといふことである。もう一ついえば、その装置の寿命とともに、その技術者の生命は終わり、

新しい製品には、別の新しい技術者をつけてやるということなのだ。

つまり、技術革新のスピードアップとともに、技術者そのものが、機械についてまわる素材にされつつあると、いいのではないか。

今、解雇撤回でたたかう技術者も、職場に残って、沖電気の技術革新の現状に四苦八苦させられている技術者たちも、このすさまじい技術の世界の状況と、自分がなにをどう努力したらいいかを見つげ出すために、みんな苦しみ悩んでいる。

首切った技術者を職場に戻すことは当然のこととして、とにかく現場の沖電気における技術者の能力を本当に生かし、意欲をもって仕事にとりくめるような職場にすることが、共通した願いなのである。

沖電気は、今回の「指名解雇」にもその姿勢が出ていているけれど、伝統的に、社員の教育や訓練をやらない会社といわれており、労働者を育てる体質をもっていないといつて、いい過ぎではないようである。

どこかの職場に、ある労働者をぶちこんで、ほとんど、研修・教育らしいこともきちんとやらずに、そこでなんとかはいあがってくればよし、そうでなければ、「落ちこぼれ」としてほったらかしにしておくといった、まことにずさんな人事管理がまかり通ってきたのだ。

とくに、高度経済成長期の最中、コンピュータ部門拡大のために採用した、学卒高卒の労働者の中で、その傾向がいちじるしい。とるだけとっておいて、ろくな指導をせずに、あいつはダメだと、レッテルをはって、放置するやり方で、多くの若者が、自分の場所を見つげ出せないでい

る現象が少なくない。

ある労働者が、開発の仕事に向くのか、プログラマーに向くのか、現場に向くのか、デリケートなエレクトロニクス産業における能力開発という点で、そんなに簡単に結論がでることではないのだ。

プログラムにも個性があり、人によって極端な場合には、仕事の出来に三〇倍もの差が生まれるという。こんな個人差は、肉体労働では、絶対に考えられないことなのだ。

プログラマーが、若い記憶力を駆使して、複雑多様なプログラムをつくり出す能力は、技術者の能力としても特別な性質をもち、誰でもが向いているとは限らない。少なくとも、新しい開発や創造の能力とは、まったく異なるといっているし、大変な記憶力、集中力、体力の三拍子を必要とする、知的現場労働といっている性格をもっているのだ。

とにかく、今、沖電気の技術者たちは、大学卒の設計マンたちも、高校卒の試験調整マンたちも、これから、自分が、技術者としてどんな役割を果たし、なにをどう学んでいったらいいのか、その点で、少しでも安定して自信のもてる仕事にとりくみたい要求を痛切にもっている。その意味で、「指名解雇」を強行した後の職場で、労働者がどんな要求をもっているかを、八王子事業所の技術者二人に、きいてみた。

2 対話——技術者たちの悩みと期待

○「技術者が、解雇され、仕事を干された時の状態について、どう思いますか？ 日進月歩の技術の世界で、すぐ使いものにならなくされてしまう不安と恐ろしさについて……」

●「僕も追い出されて同じ立場におかれたら、恐らく、同じ気持ちになるでしょうね。技術者は、自分でつくりあげる仕事で、社会でどんな役割を果たすかに強い関心があり、だから、仕事への愛着が人一倍強いんです。

それから、技術者は一面、子どものようなところがあって、新しいものを創り出すなら金もいらぬという開発バカ的傾向をもっています。でも、今、"指名解雇"が出てから、自分で、会社やめていく技術者が増えていくんですよ……」

○「え？ 技術者が沖電気をどんどんやめる？ どういうことですか？」

●「つまり、こんなふうにガタついて、首切りをどんどんやるような空気に、イヤケがさすということですね。あらためて、自分のやってる仕事をみると、責任ある仕事はやらしてもらえない、給料はべら棒に安い、沖電気にいなければならぬ理由も、魅力もないことに気づくんですね。」

○「あなたはどう思うんですか？ 同じ技術者として？」

●「また、あのグループから、あんな優秀な技術者がぬけてしまったってきくと、本当にいやな

気持ですよ。それでなくても、落ち気味の沖の水準が、一人二人と抜け落ちるたびに、落ちていくんですからね。沖のためとかなんとかいりより、技術者仲間として、身につまされるんです……でも、そう思っても、現状の仕事をとっても、給料をとっても、労働条件をとっても、なに一つ、将来の展望につながる魅力が、ここにはない。だから、『お前、他所へいって、いいなあ』という事になってしまふんですよ……でも、なんとか、こんな中で、いい仕事をみつけて、つくり出していくようにしたいと思えます。それはもう、技術に生きる人間の執念みたいなものです」

○「そんなに魅力ないんですか？ 技術者にとって、沖の職場は？」

●「なんとというか、残る理由をしいて探すと、一定の地位につくこと、上司に可愛がられること、他に行くあてがない、まあ、これくらいしかないんですよ。つまり、積極的な理由はなにもなく、愛社精神もなくて、なんか、仕事への意欲なんかぬきにした打算みたいなことだけになっ
てしまふんです」

○「今の状態では、そんなに、いい仕事ができませんか？」

●「ええ……それは、今度の激しい合理化がやられる中で、つくづく痛感しているんですよ。つまり、開発の仕事というのは、自分の頭で、創造的にやるのが一番大切なことなのに、なんだか、上司の方ばかり見るような空気ができてしまってる。人の顔色を気にして、率直な意見もいわなくなってしまうと、もうこれは、いい仕事なんかできない。技術者の腐敗といっているんですよ」

○「人間的にいい人で、技術の優れた人が、やめてしまおうという話もききましたが……」

●「そうなんですよ、ばかばかしい上意下達の職場管理のやり方に、我慢できなくなっちゃうんですよ。いい技術者は、デリケートで、良心的な人が多いから……つまり、八時半から始まるのに、八時二〇分に出てきて、競争して体操やらされるようなことに耐えられないんです。ある職場で、体操に出なかつたら、上司から一三回も注意されたそうです」

○「半導体関係の職場が滅茶苦茶に忙しいことをききましたが、超LSIの九州工場建設のニュースなんか、職場で、どんなふうにいわれていますか？」

●「二交替の深夜労働で、一二時間ぶっ通しに働きつづけて、四日休む……どこの大企業でもこの形とってますし、新工場はみんなこの形とると思います。が、とにかく、労働者は調子が狂って、なんとなく、デレデレして、ひっくり返って、酒を飲むという感じで、意欲的になにかをやるという感じにもなりませんね。第一、四日休めるといっても給料は、そうよくなりませんし、とにかく、精神と肉体のバランスが崩れて、実感としては、骨までしゃぶられるという感じですよ。」

九州工場については歓迎する空気です。でも、首切つといて、なんだという空気もありますね。それと、各地に工場ができて、あっちこっち振りまわされることへの不安もあります。なんとか、会社の一方的にいい分だけでない、仕事と事業所の選び方をね……こういう点でも、労働組合がなにもしないことへの不信が強いですよ……とにかく、今のままでは、新工場つくっても、労働者の本当の意欲や力をひき出せない、不正常的状況でゴリ押ししても、いい人がどんどん逃

げてしまおう」

○「沖での半導体産業の未来は？」

●「半導体産業は若い産業で、最近ではインベーターブームでもわかるように、中小のメーカーもどんどん割りこんでいます。IBMを頂点に、価格競争が激しいのもIC産業の特徴で、不況になった時にどうなるかという不安が、新しい産業だけに強くあります。沖の場合、なんといっても後発メーカーですから、余程のことなければ、追いつけないから、結局、早く早くになってしまおうわけで、要するに、手抜きをしてつくるということになってしまいます。事故がおこれば、労働者の責任にされてしまいますし……」

○「沖電気の未来は？」

●「重化学産業から情報産業へと比重が移っていく中で、いっそう寡占化が進むことは間違いないので、そこで、沖がどこまで頑張れるかですけど……二年後までは見通したっても、その後は、新工場を軸に、ICがどうなるかにかかっているでしょう。八〇年代の早い時期に一兆円売りあげ、まず、数年後に純利益一〇〇億ということでしょうが……とにかく、IC産業は後発メーカーがどんどん、追いかけてきますからね。なにしろ、アメリカは一〇倍の力もっているし、伸びようとするれば、アメリカにいくことになるわけで、まず、松下のカラーテレビのように、徹底的に合理化し、徹底的に安くという道だけでしょうねえ……」

○「あなたの未来は？ 最近、大卒ブルーカラーという話をききますが……」

●「そう、四四年ころから、大卒を年に二〇〇人くらいパンパンとって、もう、今や、大卒で

も、現場で、どんどん同じ仕事やらせます。そんな中で、なんとかいい仕事つかもうとはいあがる連中は、「マイウエイ」なんていわれましてね……高卒の場合は、ある程度割りきっているけど、大卒がいじけてますね。酒飲んで、『なんのために、俺は大学出て、ここへ来たんだろう』なんてぼやいてね」

○「仕事に展望もてないってことですか？」

●「そう、今のままではね。仕事がないのでなく、本人にふさわしい仕事、意欲をもてる仕事を与えられないということです。高卒でも大卒でも、仕事のやらせ方で、どんどん伸びるんですよ。それが、沖電気はひどくダメで、才能鍛える場がなくて、それで、やめていってしまうんです。残ってるのも、『誰かを蹴落とすしかない』なんて、飲んでグチるしかなくて、まあ、管理職だって、査定されてるんですからね……」

○「では、技術者として、なにが一番問題なんですか？」

●「とにかく、会社としては、今は、大学出て二年で戦力になる時代ですから、どんどん若いのを入れて、使い捨てするということ。えらいテンポとスピードで、仕事も職場もかわっていく。特別に、身変わりの早い人間でないと、とてもついて行けなくなる。三〇歳そこそこで、もう勝負ついて、三五歳で、なんとか課長にすべりこめば、もう、後は、技術者としては、生命終わりです。だから、考えますよ、こんなすさまじい合理化のスピードと変化の中で、資本主義社会の技術者は、なんともみじめなエレジーの世界に生きるんだと」

○「あなたは、どうしてやめないんですか？ 沖電気と同僚になにを語るんですか？」

●「若い人たちに沖の未来なんて話、ダメですよ。世界の状況の中で、どんな技術者が必要なのかということ話し合うこと、そして、日本の未来について語ることに、そうすると、大卒の若者も眼を輝かせますよ。つまり、技術者には、大きな夢、豊かなロマンが必要なんです。毎日、あくせく働いて、展望が見えなくてやっている時、そんな話いいなあということになります」

○「わかりました。一言、こんな状況の中で、指名解雇とたたかっている七一名の労働者のこと、どうなると思いますか？」

●「あの人たちは、一番沖電気にとって必要な人たちじゃないですか……あれだけの知恵と情熱、これがいい仕事をしていく、一番大切なものでしょう……とにかく、会社の指名解雇が通るようじゃ日本は闇です。でも、勝つと思いますよ。今後、われわれが、人間らしく、技術者らしく、仕事ができるかどうかは、あの人たちが勝つか負けるかにかかっています。今でも、あの人たちの裁判とたたかいはあるから、会社もあんまりひどいことはやれないでいるんですよ」

第四章

新たなる連帯を求めて

——若者たちはいかに食い、生き、変わったか

私たちは、今まで、時代の先端をいくと、自他ともに認める、大手情報企業、沖電気工業における、労使関係の常識をこえた「指名解雇」の実態と、その後の職場と労働者の問題点を、大づかみに見てきた。

私たちは、ここで、首切られて、一年三カ月、塀の外にほうり出されながら、日々、たたかいつづけている労働者の変わりようを見る必要がある。多かれ少なかれ、大企業の仕事と職場生活しか知らなかった、解雇時、平均二八歳の若い争議団員が、巷にほうり出された一日一日を、どんなふうに生き、働いているか、裸の人間の生きざまをぜひ知ってもらいたい。

会社はもう、厄介払いしたい、労働組合まで、もう縁が切れたとふれ回っている時、当の若者たちが、いかに食い、いかに働き、いかに、仲間をつくり、どんなふうに、未来と人間に希望をもって生きているのか、その偽りのない真実は、必ず、この七一人の若者たちと同じように、組織もなく、労働組合もなく、一生懸命たたかい抜き、生き抜いている、日本全国の無数の働く人たち、若者たちに無限の励ましと勇気を与えるに違いない。

労働者が、せい一杯、自分の人生をかけて仕事に生きる時、そのささやかな、だが、かけがえない働く者の仕事と生活を、資本が奪おうとする時、やむにやまれぬ願いをこめ、自分たちのスクラムを組み、たちあがる時、必ず、その心と願いは同じ働く者、同じ若者たち、そして、心あるすべての日本人に通じるものであることを確信することができるのだ。

沖電気労働者の真実を見よう。その変革の一日一日を。

I 技術を失いたくないと痛切に悩むなから

— 渡辺秀雄の場合

1 一〇年争議で心中はイヤだ

争議に突入した時、渡辺秀雄(29)の、最大の関心事は、ソフトウエア技術者としての能力を、どうすり減らさずに、生かしていく道があるかどうかであった。

だから、彼は指名解雇になった後は、仕事を探して、新しい道を開拓するつもりで、裁判闘争までやる気持はなかった。

理由は、まず、恐らく一〇年かかることを覚悟しなければならぬし、今なら、若い、四〇歳近くになってからでは、もう戻っても、ソフトウエア技術者として使いものにならないだろうということである。それに、争議団という感じが、みみっちく、みすぼらしくて、なんともイヤだという思いもあった。そして心の底に、労働者への不信感がこびりついていて、労働組合が指名解雇者を置き去りにして、闘争終結を提案した時、「ベテンだ！ 俺は許せない！」と憤りの声をあげたし、その後、労働者がさらに大きい合理化に苦しんでいる姿をみても、「自業自得だ、俺は知らん」という思いが強かった。

年の暮れに、二番目の子どもが生まれ、自分が、「不当解雇を撤回させる会」の一員として、裁判を含め、どんなふうにやっていくかを、はっきりさせなければならぬ状況にいた。病院のベッドの側で、妻と生まれたばかりの赤ん坊の顔をみながら、彼は悩み抜いた。『俺は、どの道をいったらいいのだろう?』

彼の気持は揺れた。今まで、技術者として、労働者として、働く者の生活、権利、民主主義を大切にしようという考えを基本にやってきた。だが、今、相手にガクンとやられたら逃げ出しに行こうとしている。それでいいのかという思いが一つ。もう一つは、一〇年争議で心中するのはいやだ、ソフトの仕事をやりたい、指名解雇の日までたたかかって任務を果たしたのだから、職についてもいいだろうという思いがあった。妻に、一応の結論を話した。

「俺は、争議団やめて職につくよ」
妻は、いった。

「あなた、それでいいの? 本当に、それでいいの? 後悔しなければ、それでいいけど……」
渡辺は、妻の、この言葉で、また、ぐらついた。迷っていると、妻がまたいった。

「もし、あなたがたたかうなら、私も、それなりの態勢をとらなければならぬし、勤めるといふなら勤めるで、その方向もあるし、……どうするの……」

やっぱり、決断のつかない渡辺に、妻が、一つの提案をした。

「仕事しながら、たたかいやることにしたら……」

彼は、その道を弁護士に相談し、争議団にも、討議してほしいと申し入れた。争議団として

は、今から、みんなの気持を一つにして、裁判闘争とたたかいを結びつける道を、真剣に模索している時で、とても、渡辺のマイウエイを、こまかく討議する暇も、余裕もない時だった。中山代表がいった。

「とにかく、自分で勝手に、探しなさい」

最初はNマイコンという会社で、月給一五万六〇〇〇円、ボーナス五カ月ということで、それほど悪くない条件だった。そのことを争議団に報告すると、ちょうど、闘争支援のわらび座公演をみんなで、とり組んでいる時で、みんなに

「闘争やっていること話したの?」

「いわないのはフェアじゃないよ」

といわれた。

彼も、そのとおりの思い、そのことを、社長にいった。この会社は、社員六〇名ほどの、日本電気の子会社なのだ。社長はいった。

「私にむかって、そういうことというのは、おかしいじゃないか? 二兎を追うものは、一兎をえぞということがある。あんたに争議をやっていく気があるなら、アルバイトでもして、とことんやりなさい」

そして、三日後に、不採用通知が来た。

結局、八王子にある従業員一〇人ほどの企業に、システム・エンジニアとして入社して、働くことになった。仕事を始めてみると、システム技術を生かすどころか、IC販売のセールスマン

ということである。給料は二二万円出すということだった。だが、一週間、一〇日と経つうちに、渡辺の気持は、また不安になってきた。

彼の毎日やる仕事といえ、ICを数えてセットして人に売りつけること。こんな仕事は誰にでもできることであり、彼の期待していた、エン지니어としての能力開発の要素など、どこにもないのだ。彼の脳裏には、頑張ってたたかっているみんなの姿が浮かび、

「俺は逃げ出したんだ」

という内心の声、いつも聞こえるようになった。彼は、そっと、みんなのたたかいたかいの写真を出してみれば、考えこんだ。

「俺は、やっぱり逃げ出してゐるんだ……職をもたないことへの恐怖で……浅草あたりのおあにさんやフーテンの寅さんのようにもなれない……いつでも、会社に出動して、背広ネクタイで仕事していかないといられない人間……いや、そうじゃない……どんな場合でも仕事は大事……技術者としての自分の仕事も大事に決まってる……だが、今は、それができない……アルバイトの仕事にも徹しきれない……焦っていることはわかっている……でも、どうすればいいんだ、どうすれば……」

2 やっぱり「会」にもどって

——頼もしい妻の一言に支えられ

彼は、考えあぐんで、自分が、今、どうすればいいのか、わからなくなってしまった。

アルバイトで金を稼ぐことも、争議をつづけていくうえで必要であること、みんなで、各地各職場をまわり、仲間の労働者に訴えることも、このうえなく大切なこと、すべて理屈ではわかっているのだが、自分がなかに集中すべきなのかがつかめないのだ。

もう一度、青い鳥を探すように、たたかいとアルバイトと技術への渴望を一石三鳥で満たしてくれる仕事を探すことなのか……”

彼は、考えれば考えるほど、足の踏み出せない、自分の情なさを思い七転八倒した。家に帰っても、子どもの顔を見ても、味気なく楽しめない日々がつづいた。

彼がまた苦しんでいるのをみて、妻がいった。

「みんな頑張っていて、いろいろいわれると思うけど、仕事はつまらなくても、お金をプールできんだから、今のまま、つづけていったらいいんじゃないの？ みんなと同じでないと、こわいんでしょ？」

妻にいわれてみると、また、気持が揺れて、わからなくなってしまふ。気をとり直して、出勤をつづけるけれど、心のしこりはとれそうもない。家に帰ると、気持がいらだって、ちょっとし

たことで、頭にきて、物を投げつけたり、大声を出したり、子どもにまであたりちらしてしま
う。

どうしようもなく荒れて、みじめな気持を日々、味わいつくした末に思った。こんな気持で生
きていくことはできない。会に戻ろう、みんなに笑われても会に戻ろうと。

彼は、妻に、その気持を打ち明けたらうえでいった。

「最悪の場合は、この家を売ってもいいと思ってるし、……」

三年前から都の住宅公社の一戸一三五〇万のローンを払い始めていた。

その後、君に迷惑をかけるから別れてもという言葉をのみこんだ。

妻は、前と同じ考えをいった。

「あなたは、お金を出して、みんなに貢献しているんだから、わかってもらえるんじゃないの？
なにか仕事していくことは大事なことでしょう？」

渡辺は、急に声を大きくしていった。

「だけど、俺はやるんだ！ とことん、やるんだ。楽なことじゃないだろうから、いよいよとな
ったら、君と離婚しても……」

あんまり、歯切れはよくなかったけれど、とうとう、とっておいた言葉を口にしてしまった。

妻は、彼の顔をみつめていった。

「あなた、勝手なことばかりいっているのね！」

妻の言葉は激しく、怒りをこめていた。

「離婚したいというなら、離婚してもいいわ。でも、私には仕事があるし、それだったら、あなたが出て行けばいいんです」

妻は、都立のある研究所の職員なのだ。

彼は、まったくまずい立場になってしまった。考えてみれば、彼女のいうとおりである。彼も別に、別れたいわけでなく、たたかいつづける意志を表明するために、つい、そういったまでのことなのだ。いろいろ、ぐずぐずいわけしているうちに、妻が、彼がみんなのところに戻ってもいいといって、さらに、つけ加えた。

「戻るなら戻っていいけど、一つはつきりさせておいて下さい。活動をやって、疲れたとかなんとか、いわないようにして下さい」

渡辺は、嬉しさとともに、自分の弱点をちゃんと見抜いている妻がすごく大きく、頼もしく見えた。彼女は、離婚の一言ですっかり頭にきて、怒ったけれど、もう冷静に、先のことを読んでいるのだ。彼は、心から妻は立派だと思った。

それから、妻は、グチ一ついわずに、夏の行商の時には、団地の中で麦茶をたくさん売ってくれたし、お金がなくても、いっこうに暗い顔をしたことがない。

渡辺は、久し振りに会に戻り、初めて、北陸オルグとして、国鉄労働者たちの職場を、一つひとつ訪ねて歩くようになった。

渡辺は、大勢の見ず知らずの労働者に励まされ、多額のカンパをもらい、職場から職場へと訪ね歩きながら、あらためて、仕事のこと、妻のことを思った。

「やっぱり仕事がしたい……本当に、自分をぶっつけ、世のため、人のためにもなる、いい仕事をした。これは、俺だけのことじゃない、職場の同僚たちもみんな悩んでいる。首はつながらなくても、雑用、雑仕事ばかりで、技術者らしく、人間らしく、生きがいのある仕事ができないことに苦しんでいる。これは、俺の願いであり、みんなの願いなんだ！ だから、俺はたたかっている。自分の職場に戻るためであると同時に、沖電気の職場を、みんなでいきいき働ける職場にするためでもあるんだ！」

時々自信がなくなるけど、今は、自分のため、同僚のため、いい仕事と明日のために頑張っていることだけは、はっきりいえる。”

たたかいの中で、若者たちは、人生の大切な宝を一つひとつ見つけ出していく。今まで、側にいながら、仕事のすばらしさ、妻の心のけなげさも、なに一つ、感動することなく過してきた。たたかいの中で、自分が、どんな人間とどんな仕事の中で、人生をつくり出しているのか、そのことの意味と感動が初めて、自分のものになっていく。

Ⅱ 五人組をつなぐもの——仕事と友情をとりもどす

——東田稔と四人の友

1 消えゆく機械職場にこめた青春

東田稔(32)がづらい思いでわかれた、工具職場のXYUR四人組はどうしたのか？ 同じ、指名解雇の対象にされ、ギリギリまで一緒に頑張ってたたかかった四人——彼らは最後まで東田とともに、頑張るつもりでいたのだけれど、労働組合が自分たちを捨てて敗北宣言をしたことに怒り、絶望して、東田に申しわけないといいながら、消えていったのだ。家族をかかえ、明日の仕事を探して、憤怒と悔恨の思いを胸に、職場から消えていったのだ。

あの時東田は、あまりにもつら過ぎて、自分たち夫婦が首になったことも、子ども三人を、どう育てていくかも忘れて、四人との別れの悲しみにひたって、なかなか気が晴れなかった。仕事と仲間、この労働者の生命の源が、いっぺんにもぎとられてしまったわけで、あの頃は、もう、友情も連帯もこれっきりになってしまったと思った。

四人は、まだ若いし、仕上げ工としての腕もあるから、そう苦労しなくても仕事は見つかるだろうと楽観していたけれど、やはりそう簡単にはいかなかった。

Yはなんとか、機械の仕事で働き始めたけれど、中小企業の場合は、やはり、沖の時のように、仕上げだけの技術でやっていくわけにはいかず、機械もつかい、仕上げもするということがないと仕事が見つからなかった。Rは妻の実家、茨城に引っ込んだ。

Uは目下、アルバイト的に働きながら、本格的に働く仕事を探しているところ。Xは、まだ、全然あてが見つからない。彼は、まだ独身で頑張っており、父親にかわって、家の責任を果たしていくためにも、そろそろ、決まった仕事について、稼がなければならぬ。

肩叩きで、いやなおもいをしていた時から、一年近くたって、ある日、そのうちの三人は、ふらりと、撤回させる会の事務所に、東田を訪ねた。

久し振りの再会で、職場に残っている五味田靖子(32)の夫もやってきて、昔のこと、今のこと、いろいろと話に花が咲いた。

「仕事は忙しかったけど、学校も、さぼらんで、よくいったなあ」

「中卒、一五歳、ほんのガキだったなあ」

「今と違って、中卒が職場の三分の一いたし、働きながら、勉強するふん囲気があったよ」

XYそして、東田は昭和三七年中学卒入社同期生で、揃って、定時制高校で勉強したのだ。高度経済成長期の早い時期であり、職場に人間的で民主的な人間関係が生きていて、中卒の少年たちが学びながら、会社生活の中で、能力を育て、技術者や熟練労働者に成長していく可能性と道が、確かに存在していた。

「仕事も、新しい仕事がつぎつぎ出てきて、忙しかったなあ」

「俺なんか、初めプレスにまわされて、目の前で指つぶすのを見たら恐ろしくなって、それで、仕上げにまわしてくれといったら、してくれたものなあ。職場にも、余裕があって、活気があったよ」

「主任クラスは、昔からの職人や親方がいて、仕事の修業はきつかった……ちょっと、まづくつくると、『お前なんか、やめちまえ！』と怒鳴られて……」

「そうそう、口でなんかいわずに、黙って、仕上げ品を、ゴミ箱に捨てられちまってさあ……つぎの朝来てみると、きれいにもういっぺん仕上げられて、てめえのやったのとは、似ても似つかねえ、立派なものになって、置いてあったものなあ」

「そうだったよ、腕と仕事に自信もった、職人さんが、職場で威張って……みんないい人間ってわけじゃねえけど、結構人情が通用してたもんなあ……」

彼らが夢中になって、勉強し、仕事を覚えたのは、そんな古い話ではなく、せいぜい一五、六年前の、同じ沖電気の職場での出来事なのだ。東田もXも、みんな、昭和二一、二年、戦争の終わったころに、この世に生まれ、親が苦労し、貧乏する中で、物心つき、成長し、働くことは人間の当然の成り行きと考えて、中学卒で企業に入り、青春前期を花開かせた。遊んで大学に行ける層からは、貧しい勤労少年と思われるも、彼らには、希望と夢と花があった。仕事を覚え、人間を学び、仲間と連帯してつくる職場と青春の歓びを体験した。山歩きも、歌声も、友情も、恋愛も、何もかも、この一五歳から、すべてをぶちこんだ、沖電気の工具職場でこそ育てることのできた、花であり、実であったのだ。労働と人間連帯が、彼らの青春をはぐくみ、人間性を育て、

人生をつくりあげてくれたのだ。

「おかしくなってきたのは、四二、三年ころからかなあ」

「そうそう、仕事もクロスバーから電子交換にかわって行って、今までの職人的職制が、だんだん、隅におしこめられて、それで、ZDだ、QCだ、労務管理だってなってな」

「遊びやサークルにけちつけど、あのところからだぜ。工具の連中と遊ぶの気をつけろなんていわれてさ」

「東田がアカだなんていわれて、俺なんか、アカでもシロでもなかったけど、そういうことコソコソいうのが頭にきてさあ……」

「だけど、よくまとまって行ったよなあ……フォークダンスに、オールナイトスケートに、ハイキング……楽しかったぜ、俺たちの青春は……」

当時の工具職場には、一〇〇人の労働者がいて、技能者養成所まで会社がつくって、社内でも、大切な職場として、工具労働者は肩で風を切って歩いてきたものだ。

だが、今、四人組が去り、東田一人、もう一度、復帰を目指してたたかいつづけている、工具職場には、もう、一五人ほどの労働者しかない。そして、品川工場閉鎖とともに、栄光の工具職場は消えさり、どこか地方の工場に吸収され、やがて、工具の仕事そのものが、社外下請けの仕事となってしまう運命にあるのだ。これは、工具に限らず、高崎・長井のフライス職場、芝浦・中野百合夫の板金工場など、機械職場といわれ、かつて重要な位置を占めていた職場が、みんな同じ運命におかれている。一言いっておけば、この現象は時代をリードし、合理化の先端を行

くといわれる電機、情報機器産業における技術革新が生む必然的合理化の道という側面と、その合理化は人間抹殺のためでなく、より人間らしく働くためという、根本の問題が問われている、もっとも典型的な状況だということ。

2 引き裂かれても引き裂かれても

夢中で、話し合っているうちに、夜が更けて、「撤回させる会の事務所」は少しずつ、人が減っていく。若者たちがオルグから帰り、成果を報告し、明日の行動予定を話し合って帰っていく。入口に近い机で話し合っていた、五、六人の学生たちが、沖電気争議の話に驚き、感動しながら、出ていく。

Xが、ほつんといった。

「やめた後、一番心残りはさあ……」

一呼吸おいて、つづけた。

「東田一人残してきたことなんだよなあ」

YもUもうなずいている。Xは自分の心にいきかせるように、さらにつづけた。

「ここに来て、みんなが頑張ってる姿みるとさあ……一年たって、みんなだんだん鍛えられてさあ、たのもしくなっていくのをみるとさあ……どうして、俺はおりちまったのかなあと、また、口惜しくなっちゃまって……」

Xの言葉をきいている東田の眼のふちが、少し赤く、うるんでみえる。東田がみんなに誓うようにいった。

「おれたちの工具職場がなくなってもさあ、俺は沖電気へ戻るよ。勝って沖へ戻る。どんな仕事でも、俺はやるつもりだよ」

Uがうなずきながら、いった。

「そうだよなあ、勝って、東田が職場へ戻って、大企業のやり方をかえさせれば、それは大きなことだもんなあ。全国の労働者のためになることだもんなあ……」

Yが、また、口惜しそうにいった。

「われわれ三人は、それを、放棄しちゃったんだから、つらいところあるよなあ……今いったって、もう戻って来ねえけどさあ……」

みんな複雑なおもいをかみしめて、黙ってしまった。今夜、こんなに語り合えても、もう二度と四人が同じ仕事、同じ職場で語り合った、あの世界は戻ってこないのだ。かけがえのない、仕事と友情の世界を破壊されてしまった、とり返しのつかない、悲しみ、傷跡。

Uが低い声でいった。

「この前、Oに電話したんだけど、電話で、泣いてるんだよなあ。残ってたって、なんの見通しもねえって、いつ首になるかわからねえのに、仕事はきつくって、残業、残業で、麻雀もできねえ、話し合う仲間もいねえって……いいながら、泣いてんだよなあ……」

Yが、少し、明るい顔でいった。

「おれたち、やられた四人は、とにかく、もう目標も行く道も決まってきたけど、残った連中は、どうしようもなく不安なんだよなあ。高崎か、本庄か、首になっちまうかって、本当に心細いんだよなあ、ガキは小さいし、女房は若いし、どう生きてくのかってさあ……考えると、泣きたくなるよなあ……」

四人は、残った職場のかつての同僚たちのことを一生懸命心配していた。首切られた自分たちの方が幸せに思えるほど、まったく荒れて殺伐として、なんのあてもなく、仕事と仲間の飲びの無くなってしまった、職場のことを。そこに残った、同僚たちの悲しみを。

七九年の夏も、五人は、昔からつづけてきた職場の仲間での「山歩き」をやった。今年は、菅平から、奥深い山中を歩きまわり、最後は温泉につかって仕上げをするという、工具職場伝統の行事である。

職場に残った仲間も参加してくれた。一緒に黙々と信州高原の尾根歩きをしていると、昔と同じお互いの暖かい心の通い合いが戻ってくる。山道で会おうのは、兎か野鳥くらいのもので、ただ黙って歩きつづけるだけだけど、みんなの気持は柔らかなごむ。夜ともなれば指名解雇のことも、それぞれに違った道を歩いていることも忘れて、みんなでつくった仕事のことや、品川の夜のことや、つきからつきと問わず語りに、話がはずむ。

恐らくこの山歩きは、来年もさ来年もつづくだらう。たとえ会社のひどい仕打ちで、みんなバラバラに引き裂かれ、別々の道を歩いても、この一年に一度の山歩きはつづけていくのだという。

そこには労働者の変わらぬ友情の世界を見た。資本が引き裂いても、息を吹きかえし、育っていく、労働者の新たな連帯の姿をみた。

この夜、ささやかにビールを飲みかわし、お互いの友情の絆を、しっかり噛みしめている時、かつての上司Pの消息が話された。

「P主任がなあ、今、どうしてると思うう？」

五味田が、みんなにきいた。

「やめて、下請けにだって、また、品川の中のどこかで働いてるとか聞いたけど……」

東田がいうと、五味田が答えた。

「そう、まわりの金クズ拾って、集めてるんだよ。工場のまわりのさ」

Xが、つらそうな表情でいった。

「自分が、親方だった職場の、鉄クズ拾わせるとはなあ……本当に、今の経営者たちは、人間の氣持つてものがわかんねえんだよなあ。品川でなく、芝浦で働かせればいいのによ……まったく、ひど過ぎるよ、沖のやり方は……指名解雇だけじゃねえよ……」

Yが、思い出すようにいった。

「P主任は、俺たち首切った当事者でも、結構本人、本気で自分の責任だと思つてたようだなあ」

「うん、本気でみんなの前で頭下げてたからな」

P主任は、指名解雇者を出した後、係の人間を集めて、

「私の職場から、解雇者を出してしまったことは、私の力のなさ、不徳のいたすところで、本当に、申しわけない……」

と挨拶し、すっかり元気をなくしてしまった。そして、やがて自分も首になり、下請けの立場で元の職場で、廃品管理する羽目になってしまったのだ。Uが、ビールをのみ干していった。

「なんてったって、職人だったよなあ。あの人は……」

「そう、本ものの職人ってのは、自分が損をしてもやる時はやるものよ。近頃は、要領のいい職人しかいねえもんなあ……」

「最後の職人だよ、あの人は……」

五人の工具の男たちは、腰をあげるのが惜しくて、いつまでも飲みつづけ、語りつづけていた。

III シラケ世代の変革

——二〇代はなにをみつめて翔ぶのか

若者たちが一度、現実と直面し、たたかわざるをえない状況におかれた時、予想をこえた大きな力を発揮し、自らも周囲も気づかなかった可能性をきりひらく。

若者たちの特徴は、いつの時代も、若さと未知の魅力をもつことに変わりなく、角度をかえて

いえば、生活経験と人への思いやりの薄い連中と呼んでいいのではないか。今、シラケ世代などと、無責任に、大人たちが名づけるけれど、もとをただせば、家庭にはじまり、学校そして会社、きちんと目標をもち、一貫した人間づくりをしていないところから、競争人間や無責任人間が大量生産されつつあるとっていいのだ。早い話、沖電気の若者の扱いをみていけば、一目瞭然ではないか。高度経済成長の成熟期からこっち、鳴物入りで、金の卵、とかなんとかいつて、地方から、集団でかき集めておいて、ろくに教育もしないで、仕事の都合で、ひきずりまわし、いらなくなれば、ポイとほうり出す、これで会社や大人を信じる若者たちが育つわけがないだろう。多くの若者たちが、シラケる前に、あきらめて、そっと消えていくのが、大方の現実である。大人たちはよくいう。甘ったれるんじゃない、昔は誰にも教えられたもんじゃねえ、身体でおぼえたもんだと。だが、親も教師も、テストと競争しか教えず、会社に入れば、コンピューターとコンペアーにふりまわされ、いったいどこで、人間や仕事の心をつける時があるというのだ。

1 人生のイロハを争議で学び

沖電気争議は、このシラケ世代の若者たちを鍛え、変革していく学校だと、人はいうのだが、二〇代の大半の若者たちは、ソフトウエア技術者の道をつかみ、家庭をもっていた渡辺、一七年の仕事と仲間と職場をもっていた東田といった先輩たちのような、自分の世界を、まだ、仕事の

中でも私生活でも、もっていない。だから、渡辺が、争議の中で、仕事への愛情と世界を追求し、東田が、仕事と仲間の連帯を、再創造し始めたような、自分の世界の変革は、多くの二〇代独身青年にはみられない。

たとえば、青葉台寮九名、第二蕨寮四名の寮生争議団員たち。年齢でいえば、一二歳から二九歳までの独身青年たちばかりである。

彼らは、まさに争議に入って、なにもかも一つひとつ驚きうろたえながら、同僚仲間を頼りに、今日まで自分をつくり成長させてきたのだ。つまり、争議の中で、人生のイロハを一つひとつ修業中であり、会社も学校も教えてくれなかった真実と知恵を、目下、日々身につけ、もう固まりかけていた生きる姿勢を、大きく変え始めているとわかっていい。

まず、最初の強烈な体験は、会社の寮追い出しとのたたかいだった。会社の理屈は、一方的に指名解雇をしておいて、もう社員でないから不法占拠であって、即刻、出ていけということである。どう対処していいかわからず、早速、青葉台寮のある、神奈川の争議団や第二蕨寮のある蕨地域の労働者たち、そして、弁護団の先生たちに相談し、とにかく、不法不当な解雇にもとづく寮追い出しは無効だということで、たたかう方針を決めた。だが、相手がなにを考え、どんな出方をして来るかもわからず、場合によっては、暴力団をし向けて来るかもしれないという情報も入った。

みんな、とにかく必死だった。

青葉台では、一番年長、リーダー格の平井盛博(29)を先頭に、外を守ってくれる争議団の人



若者たちは自分の世界と文化を求めて

ランシーバーにハンドマイクまで揃えた。不安ではあるが九人と寮生たちの蔭の支援もあり、ふだんから、平井の呼びかけで、やっていた、キャンプやサークル活動の経験が大いに役に立った。みんな、緊張しながら、わいわい

びとの支援に応じて、中での九人の防衛態勢を考えた。

まず、踏みこまれることに備えて、三畳半ほどのそれぞれの個室の入口に、机やロッカーのパリケードをつくり、それぞれ、中に籠城態勢をつくった。自炊ができないから、食パン、缶づめ、ハム、チーズ、それに、戦時食の乾パン。電気を切られることに備えてローソク、トイレにも行けないことに備えて、ビニール袋にポリバケツ、それに、お互いの連絡をするオモチャのト

がやがややり、トランシーバーで管理人の悪口いつてるのを傍受され怒鳴りこまれたり、仲間できつくる岩の生活は、敵しさの中に、おかしな明るささえ感じられた。

第二藏寮の方は、広い寮に四人だけなので、さすがに、一人ひとり、部屋にとじこもると、いつ会社側が襲ってきて、追いつかれるかと、不安と恐ろしさで、眠れない夜を過した。

斉藤和成(27)などは、ドアはベッドで完全封鎖し、窓から屋根づたいに出入りする、特別警戒態勢をとって、暮らしていた。

彼の場合、指名解雇で追い出されるまでは、たたかう気持はなくて、みんなからもやる気ないと思われていたくらいで、実力行動には、まったく不向きな、高専卒ソフトウェア青年と違ってよかった。彼の心に、怒りという感情がつきあげたのは、会社の内と外に別れてまったく、縁が切れたという姿勢で、威圧するように立っている上司たちの姿を見た時であり、また、一日中、嬉し涙が出て止まらない、初体験をしたのは、電話で、父親に、「ねばっこく、頑張りなさい」と励まされた時だった。その時から、彼は自分を、意識して変えるように努力していった。

数日の寮の攻防を頑張りぬき、会社の攻撃を、ともかくにもくいとめて、居住権を守りぬいたあたりから、斉藤の今までなかった積極的な人とのつきあいが始まった。

彼は風呂でも食堂でも、寮生たちと額を合わせれば、できる限り、挨拶をし、語り合うことにした。それは、ごく自然な遊びのこと、碁のこと、最近の仕事の様子など。彼にしてみれば、離れてしまった職場の様子が、本当に気になるし、今はなにをどんなふうにつくっているのか、ますます、沖の中でも比重が高まっているソフトの仕事の状況を知りたい、気がついてみると、今

までになかったほど、熱心に、お互い話し合っているのだ。

「まあ、あんまり、面白くないねえ、仕事は……なんか、息がつまりそうで……」

同じ寮の東北出身のOが、近いうち、やめたいということをお口に、その理由を語った。

「それと、僕には、密室の中で、一年中、エアコンの空気吸ってるのが、肌に合わないんですよ」

「アレギー？」

「そうなんですよ、春花どきが全然、だめなんです、なんとも、気分も調子も悪いし、この寮の生活にしてもねえ……」

四畳足らずの個室は、まるで、コンクリートの立方体という感じで、斉藤の部屋など、雑然として、下着とエレクトロニクスの本が重なり合っているというふうに、まずエンジンヤ用の監獄部屋といっておかしくない感じである。それに比べて、Oの部屋は、狭い空間をきちんとつかって、本の空間、コーヒーマシンの空間、ハイクラスなコンポと音の空間、そして、天井に近く、彼の趣味の本命といえる、模型、手づくりのSLの空間と、見事に、自分の小さな世界を立体的に構築しているのだ。繊細で才能ある、最近の若い技術者の小世界をみる感じで、これほどのこまやかさと器用さがあればあるほど、会社の広大なフロアでの本質的に無神経で非人間的な職場のあり方、指名解雇をふくめた乱暴な人間の扱い方にたえられないということのようなのだ。

「田舎の家が、電気関係の会社やってますし、まあ、帰って、落ち着いて考えてみます」

もう、彼の気持は、沖電気を離れて、田舎での自分を生かした生活設計の方に向かっている。

2 自分たちの世界と文化をもちたい

齊藤は、複雑な気持だった。Oのように、現在の会社のやり方に批判をもち、技術も優れ、人間のにもいい若者たちが、みんな、愛想をつかして、会社をやめていってしまう傾向が、非常に強いという点である。第二廠寮でも、青葉台寮でも、骨のある技術者がつきつきに、やめてしまうのだ。

みんないうのは、給料がひどく安いこと、仕事に系統性や創造性がなく、滅茶苦茶忙しいだけで、つまらないこと、指名解雇しておいて、一方で、人をかき集めるなど、経営方針、労務対策がひど過ぎることなどである。齊藤たちが、オルグ先の別の電機会社で、こんなふうに暖かく支援されたよというふうに話してきかせると、

「沖みたいな会社ばかりじゃないんだね、その会社、なんていうところ？ 僕、その会社にかわるうかなあ……」

と、話は、争議支援の話から、本人の職探しの方向になってしまふ。

こんなふうに話し合っていると、首を切られた自分たちのこと以上に、現在の職場の状況が、多くの労働者にとって、ますます、落ち着きにくいものになっていく深刻さの方に話移っていく。つまり、一つ、はっきりしていることは、今、会社が超L S I九州工場の建設を目玉に、品川工場閉鎖、本部高層ビル建設など、大量の人事移動、合理化を推し進めつつある現状が、労働

者にとつて、決して、好ましく、希望を感じられる状況としては、受けとられていないということである。どこへとばされても、仕事を交えられても、頑張りますといわせるほど、沖の仕事と生活に魅力や希望を見出せない人が少なくないのである。とくに、会社が関心をもって若年労働者や技術者に、その傾向が強いといっている。指名解雇者に対する残っている労働者たちの関心も、そういう自分たちの不安定な状態の中で、解雇直後の、やっぱり、会社に睨まれたら損をするという、恐怖感をとまった見方から、微妙に変化してきているのだ。

「ひょっとすると、彼らのように頑張ることがいいことかもしれない。裁判も、会社が負けるだろうという声をあっちこちで聞くし……」

労働者たちは、首切られて、なおたたかう七一名の運命に、首切り直後より、はるかに大きい関心と、自分たちの運命との関係を、意識し始めている。七一名がどうなるかは、沖電気の全労働者がどうなるか、そして、電機労働者全体、日本の大企業労働者全体の運命にかかわっているかもしれないのだ。

平井も斉藤も、職場の話を引きげばきくほど、そして、自分たちの今後のたたいの方向を考えれば考えるほど、やはり、本当に、もう少し、人間的で、夢のある毎日の暮らしを、たて前でもなく、本音でつくりたいと考える。斉藤は理屈ぬきで、石のプログラムづくりといえる碁の世界に没入する触れあいを、本当に大切にしたいと思うし、平井は、ずっと、つづけてきている、青葉台バンドの演奏活動をどんな忙しい時でもつづけていきたいと考えている。彼は大学時代から音楽活動で、みんなと触れあう喜びを体験していたし、沖に入ってからフルートを身につけ、バ

ソンドリーダーとして、寮生活のうるおいをつくりだすために、今日まで、変わらぬ、頑張ってきた。ペースの荒木真(27)、ギターの八島崇好(22)、それに、八王子の富樫直志(29)のトランペット、笹島常信(27)、中野達弥(24)たちのドラムが入って、結構、争議団バンドができあがるメンバーが揃ってきた。一週に一度は、青葉台寮の地下室で、練習をつづけることも身につけてきた。音楽とは、文化とは、日々、空気や水のように、絶えることなく、つくりつづけ、やりつづけるものだ、若者たちは、素直に行動を持続するようになった。第一、どんなに、オルグがうまくいかなくて、自信がなくなると、明日さぼろうかと迷っている時でも、音合わせをやっていると、なにかしら、暖かいものが、胸の中にこみあげてきて、スカッとした気分になれるのである。首切られた自分たちの生活とたたかいがホンモノの人間らしさをもつためだけに、今の殺伐な電機労働者の生活が、本当に一人ひとりの個性と文化を大切にするようなものに変えるためにも、こんな生の音の世界、人間の連帯ある文化が、どうしても必要だと考える。会社の盛んに宣伝する二一世紀への情報化社会づくりに欠けているのは、やっぱり、働く者、一人ひとりの人間を大切にす社会づくりという点である。目の前に生きている人間一人ひとりの欲び、悲しみ、怒りを大切にすした民衆自身による、触れあいと感動ある人生づくりこそ、われわれが、初めて、民衆の手でつくり出していく、夢みる自由で豊かな人間社会づくりの、もっとも大切な心なのである。自由で豊かな人間の心の世界をぬきにして、なんの情報化社会であり、コンピューター世界であろうか。労働者を切り捨て、人間を粗末にして、なんの未来社会であろうか。

平井は、首を切った相手に対する「怒り」だけのたたかいをしたくないと思っている。人生の

一番春秋に富み、未来を目指せる、黄金の時を、本当に大切にし、一度きりのお互いの青春を、とことん悔いなく歩きたいと思う。競争と差別とゴマスリ仕事でなく、「友情」「連帯」そして、人間の無限の能力をひきだす、ホンモノの「仕事」。この三つを大切にするためにこそ、一日一日を頑張って、たたかっているところと考えている。だからこそ、彼は、首切られて、いっそう、希望にあふれ、飲みに満ち、日々、すべての人びとの中に入っていく。地域や電機の仲間たちの中に、そして、職場の若者たちの中に。音楽だけでなく、ある時は、オートバイ気遣いとともに、はるか房総や信州の自然の中に、遠乗りに出かける。若者たちの、その瞬間の友情は、純粹で、暖かい。平井は、本当に、人間が好きである。仲間が好きである。仕事が好き、音楽が好き、オートバイが好き、仲間が好き、彼のこのあくことなき、人間連帯への渴望と純粹の愛こそ、職場の同僚や上司たちに、送別会の席上、「フレ、フレ、平井」と叫ばせ、今なお、友情を育てている大勢の友人たちが、職場にいるエネルギーなのだ。

争議は、この若者の、連帯と友情と文化づくりの世界を、さらに大きく、無限の可能性にむかって、押し広げていく。自由で豊かな、若者たちのホンモノの連帯の世界を、一日一日、創り出し、築いていくのだ。

IV なぜ、現代青年が動かされたのか

——二二歳の八島崇好の場合

ここまでくれば二二歳の八島崇好の生活にふれないわけにいかない。
彼こそ、争議やたたかいなどに縁の無いシラケてガメツイ現代青年の典型といわれていたのだから。

寮生被解雇者の中で一番若い八島は、いつも、自分の好みと要求を大切にする、きわめて「ナウな」若者である。自分の嫌いなものには、見向きもせず、好きなものとなると、とことん迫っていく傾向は、今の若者の特徴といっている。新たな青年労働者像創造のテーマでもある。

なぜ、こんな若者がゼッケン胸にたたかい始めたのだろうか？ なぜ逃げ出してよそへ行かなかったのだろうか？ 会社の計算に入っていなかった「指名解雇」効果がこんな形であらわれたといっているのではないか。

1 人生初めての深い「裏切り」にあい

彼は青森の田舎にいる頃から、自分の好きな絵や歌でグループをつくり、その仲間づきあいを

大切にしてきた。小さなグループだけに、お互いの気心もしれ、共通の好きなことで行動をともにしているのだから、裏切られることもなく、人間の関係とはこんなものだろうと考え、今日までやってきた。

会社に入っても、彼の、この生き方は変わらなかったし、仕事をちゃんとやり、人づきあいをきちんとすれば、自分が人に嫌われることもなく、まして、会社を首になるような恐ろしい事態がおこることなど、夢にも想像する余地がなかった。

事実、彼は仕事を熱心にやっだし、遅刻も少なく、上司にもかわいがられて、ひどい取扱いを受けた体験はまったくなかった。

所属するシステム技術部の仕事は、顧客から送られてくるプランをシステム設計して、営業に渡す仕組みになっていて、あってもなくてもいい部だなどといわれもしたが、結構、創意性も発揮できて、積極的にとり組めば、なかなかやり甲斐のある仕事を開発することも可能だった。

彼は、担当のC係長にかわいがられ、隣のD係長とも好きな絵のことでつきあいが出来、自宅まで招かれる関係になっていた。

C係長は、よく、彼を飲みに連れていっては、先輩として、仕事の話、人生の話を、いろいろしてくれた。中学卒業一五歳で、沖電気に入社し、夜間高校に通って、一生懸命に働き、努力して、遂に、三〇歳過ぎに、係長に昇進できたことが自慢の種で、酔うと、必ず、若いころの自慢話が出た。

「若い頃には、俺も労働運動の学習会なんかやったものだよ」

八島は、品川駅近くの赤提燈やたまには新橋あたりで何度もご馳走になる中でC係長と次第に親しくなっていた。八島はできる限りなんでも話すようにし、時々、埼玉県の係長の家まで遊びにいくようになった。

八島は、係長が自分を信頼してくれているのが嬉しかった。ただ、同じ部の、E、Fのことをいろいろ批判したり、悪くいうのは、あまりいい気持はしなかった。

Eは、我の強い性格で、人との折合いがあまり良くなかったし、Fは、気の弱いところがあり仕事がかまく早くできないことを気にして、一週間もつづけて休んでしまい、やっと出てくると、係長に叱られて、また、一週間休んでしまうような状態がつづいた。

八島は、初めのうちはなんとかしようど努力していたFが、次第に、やる気をなくし、無気力になっていく姿を目の前にして、なんとも無惨というおもいが胸をしめつけたものだ。それでも、Fのことを、自分の問題と考える気持は薄く、自分は係長とうまが持っているというおもいが心の隅に確かにあった。

八島が肩叩きされたのは、課長からだだった。広い会議室で、二人っきりで、鍵までかけて、一時間半もいろいろいわれた。こうした異常な状況での話し合いなのに、課長の話は、ひどく、遠回しに、

「希望退職についてどう思うかね」
などと聞くだけで、しかも、退職募集要綱で、目線を隠すようにして話すのがひどく不自然だった。

「おれも、田舎が京都で、本当は帰らなくちゃいけないんだけど……」などと、気を引くような言い方もした。

八島がジーバンで会社に来ること、朝の体操をやらぬこと、倉庫に鍵をかけ忘れて始末書をとられたことなど、だんだん、つみ重ねていく課長のいい分をきいているうちに、八島も次第に、間違いなく退職勧告だと思いつ出した。

八島は、肩叩きを課長から、三度うけた。だが、C係長はそのことを知らされていなかった。

八島は、係長が、飲み屋に誘ってくれたのを幸いに、事実を話した。すると、C係長は、急に怒り出していった。

「そんなことを、俺にいわないで、勝手にやるとは……」
しばらくすると、またいった。

「八島のこととは絶対に、おれを通すことになつたのに……」

係長は、何度も、くり返して、肩叩きが、係長抜きで、課長直々にやられたことに、不満をいった。そして、課長に交渉してやるから、労働組合にはまだいわないでおくようにといった。だが、八島が約束の一日を待った末に聞いた言葉は、だめだったから組合に相談しろということ。八島の肚の底には、とにかく、最後は、係長がなんとか自分のことを心配してくれるということへの期待と、長年、飲みながら、語りながら、育ててきた人間的信頼への確信が、あった。

その日、C係長は、午後八島を新橋に呼びだした。出先からということで、海上保安庁関係の書類を持ってくるようにという理由だったが、非常に不自然な理由だった。お互い、仕事を一緒

にしているもの同士、忙しい時に、わざわざ届ける必要などない書類であることは、わかっているのだ。

係長の態度は、電話中も、会ってからも、不自然で、ぎこちなくいつもの調子とはまったく違っていた。突拍子もなく、関係ない仕事の話をするかと思えば、勤務時間中であることにお構いなく、飲みに行こうといひだす。しかも、「最近、金ないから、家に行って飲もう」ということなのだ。

八島は、なにかも、異常で、唐突で、お互いの自然な心の通じ合いがぶちこわれていることを、はつきり自覚していた。

そのおもいを決定的にしたのは、電車の乗りかえの時、彼が新聞を買いに行こうとした瞬間、係長は、いきなり、彼の腕をつかみ、こわばった表情でいった。

「後一〇分で家に着くから、もう、買いに行かなくていい」

ひどく真剣に、まるで、逃亡者を警戒する刑事のような目付きだった。

とにかく、C係長の一挙一動は、すべて、異常で、常軌を外れており、顔付きは、時が経つにつれ、いっそう不機嫌にこわばっていくように見えた。

八島は、この日、C係長の家に泊った。

奥さんとは冗談をいいあい、子どもと遊んで、いつも来た時と変わらない関係だった。引越しの時には、彼が手伝いに行き、冷蔵庫の古いのをいただけるといった仲で、若くて気のいい八島は、亭主より、奥さん子どもにすっかり気に入られていた。

結局、この日から翌日にかけて係長の酒の相手をしたり、奥さんの内職である区役所の広報折りの仕事をみながら、子どもと遊んだりして、特別に、肝心な話はしないまま過ぎていった。

翌日の夜、帰る時、C係長がバス停まで送ってきていった。

「どうだ、もう決心ついたか？　まだ、考えは変わらないか……考えた方が、お前のためにいいんだぞ……」

とうとう、予想していたことを口にした。恐らくこれまで、いい出せなかったのだろう。

八島は、心の中で、この人とのつきあいも、これが最後だと自覚した。この瞬間、確かに、これまで家族ぐるみで係長との間にあったはずの人間の絆が冷酷無惨にぶち切られてしまったのだ。こんなにも、もろく、人間をつないでいるのが、断ち切られてしまう事実への抑えられない怒りと悲しみがあった。人生初めての深い「裏切り」の実感だった。

八島の行動は、この日から始まった。

デモに行き、オルグに行き、新聞をつくり、一通りのことをみんなと一緒に行動した。彼らしく、時に、気がむかないと、すっぱかしたり、さぼったりすることもあるが、ぎくしゃくしながら、なんとなくみんなについていった。

彼は、今でも時折、C係長と仕事のことを思い出す。高校卒業後、四年間、間違はなく、自分の周囲にあった、仕事と人間関係が、一ぺんにもぎとられてしまった事実による、心の傷は、日が経つに連れて、深く重いものになってきた。彼にとって、人間の生き方が、根本から問われているのであり、なんとしても、自分の新しい居場所と生き方を確立しない限り、逃げ出すわけに

いかない気持になってきた。

彼は、今、自分がなにものであり、どこに行こうとしているかを考える。いや、考えさせられるといった方がいいだろう。つまり、仕事もなく、職場もなく、毎朝、自分たち争議団員だけで集まって、一日一日、目標をもち、手をとりあってやっている生活なのだから、なにもかも、自立して、判断し、行動しなければ、何事も進んでいかないのだ。

「おれは、いったい、なにものなのだ……」

2 絵・ビートルズ・フオーク

そしてオートバイを限りなく愛し

八島は、高校時代の自分を思い出す。

絵だけは、小学生の頃から好きで、八戸工高時代には、美術部で油絵をやり、県南高校連合主催の展覧会を、みんなでつくったりもした。電気科の勉強よりは、絵にかかわる事の方が、はるかに面白く、いきいきと行動できた。彼は、授業に熱中でできず、電気科を選んだのは失敗だったのかと考えたほどで、彼の主要な関心は、学校生活以外の楽しみを求めて、行動する方向に向かっていた。

八島は、決して、自分は不真面目だったと思わないし、自分なりに、納得がいき、情熱がもてるものを、いつも求めてきたように思う。会社の仕事も、上司とのつきあいを含めて一生懸命人

こぼし
くん

こぼし
くん

首切りされた
妊産婦たちと...

東田 照子
6ヶ月です

相原 勝美
6ヶ月です

加藤 てる子
8ヶ月です
フーッ

首切りの三宅です

あなたの会社でも
ボタンひとつで
出向・西配転が出来る

OKI FAX
Hi! 10
新発売!!

このように 西配転をいやがる
者も どこにでも



カンタンに西配転させる
ことができます。



なつっこく、やってきたことには、自信がある。

あの頃、放課後、絵を描いて、家に帰ると今度は、ラジオとステレオをよくきいたものだ。ビートルズナンバーはほとんどきいたし、岡林信康のフォークにも熱中した。社会のことには無関心だったけれど、歌の中で語られる、結婚誓った男女の愛が、未解放部落出身者ということでもダメになるという事実には、強烈な衝撃をうけた。ジョン・バエズの反戦歌で、戦争のことも考えた。今、彼女は逆なことをやり始めたように思うけれど、当時、八島が、アメリカのフォークソングから知らず知らずを受けた物の見方考え方は小さくなかった。ベトナム戦争のことも、彼は、新聞からでなく、フォークソングの世界で知ったのだ。

だからといって、彼は、そのフォークの世界がすべてだったわけではない。ビートルズから、インド音楽に興味をもち、外国語にも興味をもち、東京に来てから、神田外語や慶応の外国語学校で、英語、フランス語をちょっと、かじったりもした。彼は自分の生き方が、いつも、こんなふうだったことが、会社の気に入らなかったのではないかと考える。つまりなんにでも好奇心をもって眼の前にあらわれる魅力あるものに、すぐとびついていく。それが、人間でも、仕事でも、労働組合でも、青年運動でも、先入観もたないでとびついていくことがきつと気に入らなかったのだ。

高校卒業前には、火がついたように、オートバイに凝りだした。今は、中学三年が、オートバイ年齢の初まりといわれるのだが、彼は、その点ではおくて、しかも、ナナハンの新車でなく、今はもうなくなった、メグロの超クラシックバイクを探し求めたのだ。

ある農家の納屋にあることを聞いて、見にいき、どうしても、手に入れて、修繕して、乗るために、兄を口説いた。だが、このバイクをもう一度、娑婆に復活させるためには、大変な金と暇と厄介な手続きが必要だった。彼は、ひるまず、車を兄貴の友人に頼み、陸運局までいって、二五〇ccの書類手続きを始めた。ところが、肝心の廃車証明書がなくなっていたので、また、再登録するために、前の所有者を訪ねて、頭を下げて頼んだ。そして、一方では、自動車部の同級生にきいて、このバイクが使いものになるかどうかを相談し、バイク屋に日参した。さらに、もう一つ肝心の、バイクの運転免許をとる努力もして、とにかく、三年の冬は、このバイク騒動で過ぎてしまった。

このバイクに乗って、颯爽とわが町を走り回る時が、遂にきた。それも、よりによって、沖電氣に入社のため、東京に出発する日の夜のこと、でも、八島は、押えきれない喜びを身体一杯にみなぎらせて、修理したてのバイクにまたがり、町中を走りまわった。知りあいの誰かれに、得意になって手を振って。

彼は、バイクを修理屋にもって行って、頼んだ。

「すみません、これ、東京に送って下さい」

上京してしばらく、彼は東京の街を、この古めかしいメグロ二五〇ccに乗って、駆けまわった。

八島は、バイクに乗っている気分が、まことに好きなのである。とくに、この車のこのラインが好きなのだ。このクラシックカーに乗っている自分を見つめる人びとの視線にあうと、ぞくぞ

くする。車のことを知らない人たちの不思議そうな視線にありと、ざまあみろといたいし、同病のオートバイ気遣いたちが、なつかしそくに嬉しそくに近づいてくるのに会うと、抱きあって万歳をいいたい気分にもなる。

つまるところ、やっばり、人に目立ちたいし、カッコいい姿をみていただきたいという、自己顕示欲が人一倍あるのだと、八島は、自分について考える。なにか、オートバイの救世主か親分にでもなったような、不思議な義務感をすべてのオートバイに対して、感じる。軒下に、錆びついて捨てられている、哀れな中古車の姿をみると、胸がうずく。拾って行って、なんとか再生させてやりたいという強い欲望にかられる。

「俺がやってやらなきゃ、誰がいったい、こいつを救うのだ……」

八島は、国定忠治が、捨て子か捨て犬をもらって育てるような気分になってしまふのだ。若者の方が中年より、よっぽど浪花節なのだと考える。そして、もう一つ、こういう気持の通じあえる仲間が、一人、二人、五人と、あちこちにできて、連帯の輪が広がっていくことも、このうえなく嬉しいことである。

彼も会員になっている浅間ミーティングクラブは六〇〇人の会員を擁し、年に一度、愛車ともども、北軽井沢に集結することになっている。

3 初めて知る新鮮な人びととの出会い

— 父母とも未知の人たちとも

八島は、今、機関紙「こぶし」の編集担当者として、とくにマンガを毎号描きつづけている。得意の似顔絵はなにかあるたびに、ひっぱり出されて、活用される。彼は、次第に、仕事が目白くなり、最近では自分がみんなにとって必要な人間だといわれることに、快感を覚えるようになった。

「これを一生懸命やってくれば、ひょっとすると、俺の生きがいが見つかるかも……」

八島は、締切時間に迫られて、一流の悩める漫画家のような表情で仕事にとりくみながら、この充実した時と仕事のことを考える。あらためて、会社の仕事についても考える。会社の仕事も人間関係も、もし「指名解雇」みたいなことを、会社の上層部がやらなければ、だんだんよくなって、充実したものになっただろうと、今でも思うのだ。C係長と一緒に、沖電気製品についての企画やアイデアをどんどん考えていくようなことは、とても興味もてるのだ。だから、以前にも、オートバイ屋になったら人にすすめられた時にも、やはり、会社への未練が捨てられなかった。それに彼にはオートバイで商売しようという気もなかった。カブの修理でメシを食うようなことをしたら、もうオートバイに情熱がなくなってしまうと思ったのだ。

あの頃寮の部屋で一人ぼつんと壁を眺めて、俺の生きがいはないのかと、何度も考えつづけて

たものだった。自分の好きなことと仕事が一つになれば、一番幸せだと思った。

会社の中で、それが実現できればとも、本気でおもった。

だから、今、こうして争議の中で、初めて、自分の絵を描く才能が役に立ち、毎日、その仕事を考えていられるのは、本当に幸せな気分になってしまふのだ。やっと、探し求めていた青い鳥に会えるかも知れないという、人生初めての感動と充実の時が、手の届くところにあるのかも知れないのだ。

八島は、今、自分の絵に、思想と創造性のないことに、本気で悩んでいる。やっぱり、貧乏菓子屋の息子で、ろくに芸術的教養を学ぶ時もなかったことが気になり、今からでも、どこか専門学校にでも入って勉強したいと思う、それにつけても、今は、塀の内外に別れてしまったけれど、慶応大学出のD係長の豊かな芸術への素養と、義母が画廊まで経営している、その、なんとも自由で豊かなふん囲気をうらやましいと思う。古風だが、しっとりした家の一階には、グランドピアノがでんとあり、ピアノ叩きながら、歌をつくり、コーラスの指導もする、そんな生活の豊かさが、本当にうらやましいと思う。人間、こんなふうに住生活することができたら、定年になってやることのなくなる、貧しい労働者の暮らしではなくなる。八島が、この人から受けた影響は実に大きかった。八島は、C係長でも、D係長でも、やっぱりいいところがあると、今でも考える。C係長の庶民的な人間くささ、D係長の才能、そういう魅力は、会社が指名解雇なんかやらなければ、みんな、いきいきと、会社の役にも立っていくのにも思う。

だが、塀の内外に別れさせられると、もう、別の人間になっていく姿が、とても寂しいし、悲

しいのだ。いま、門前ピラまきの時など、D係長が、以前は「オックス」と挨拶してくれていた笑顔が消えてしまったのが寂しい。あらためて、今は、首切られて、争議の時であることが身にしみる。

八島は、この争議の中で、いろいろな初めての出来事を体験し、さまざまな人に出会うことから、実にたくさんの収穫をえて、人生が豊かになりつつあるというふうに感じている。もう一ついえば、同僚であれ、先輩であれ、友人であれ、あるいは、親兄弟であれ、こんなに新鮮なおもいで、人と触れあうことが生まれて初めてと、いいのだ。

それは欲びだけではなく、怒り、悲しみ、とにかく、八島の心と身体で、なにかをいわないではいられない、そんな気持で、人と接する体験をいつているのだ。

世田谷のある工場に、ひとり、オルグに行った時、会社側に、暴力を使って、外にほうり出された時の、あのなんとも、荒っぽく、骨にまでこたえた、人間の憎悪の力を忘れることができない。八島は、初めて、暴力と権力の恐ろしさを、身体で知った。だから、翌日、抗議のデモで、工場を包囲した時、彼は、心の底からつきあげてくる怒りと興奮で、人びとのデモの先頭に立っていた。

また、田舎の父母のことも、こんなに気になることは初めてである。なにしろ、古い和菓子屋の夫婦で何十年やってきたのだから、青森の古い町のしきたりと物の見方が、骨のズイまでしみこんでいる。母親は、息子の状態を気にして人にきかれても、積極的に話さないようにしているくらいだった。

兄が継いだお菓子屋を廃業して、また、サラリーマンになっていることも、父や母には寂しい限りだし、そのうえ、次男が首切られて闘争中ということでは、あまりにも、刺激が強過ぎるのだ。

八島は、いろいろ考えた末に、母親を、夏のわらび座招待家族旅行に連れ出すことを思いついた。八島は、バスでいくみんなに先行して帰郷し、わらび座の本拠地秋田へ母をつれだした。母親は、初め、警戒していたけれど、わらび座の原団長を初め、大勢の若者たちが、心をこめて、歌と踊りと語らいで、歓迎してくれる気持にほだされ、次第に、息子と息子を支援して下さる人びとへの見方が変わっていった。わずか一泊三日の交歓だったけれど、母はすっかり、うちとけ、最後には、自分の気持を手紙に書いて、わらび座に残していくまでになった。支援する会として、慶応大学の黒川俊雄教授たちなど文化人・学者まで来て、息子と一緒にいることに、大きな驚きと、安心感をもったのだ。

「息子の解雇が気にかかるある日、わらび座に連れていくとの電話があり、行く日の来るのを待ちながら、心を踊らせていました。

現地については静かな田んぼの中の大きな建物にびっくりいたしました。楽しい歌や踊りに励まされ、そして、人々のなごやかなふれあいに何もかも忘れて、のんびりと三日間を過ごしたことが嬉しい思い出となりました。

自分の息子が一人じゃない、たくさんの仲間がいるんだなあと、心のなぐさめになりました。中山代表さんをはじめ、わらび座の方々の一生懸命な、熱気あふれる力とともに、私たちも負

けないでがんばります」

この旅行から帰った後、母親は、わらび座はアカだと人にいわれることを気にしながらも、もう前のように、息子のことを隠すことはしなくなった。沖電気という会社がなにをして、息子は今、どうしているかという事を、きちんと、近所の人たちに話すようになった。息子は恥ずかしいことをしているのではなく、胸を張って、みんなに支えられて、堂々とたたかっているんだという事を。

V たたかいの中の新しい門出

——真喜志夫妻の新婚生活

沖電気争議団の若者たちが、一人残らず、自分たちの能力を發揮し、文字どおりみんなですくりあげる楽しいお祝いの日がやってきた。

それは、真喜志晃と阿部ふくみの結婚を祝う集いの日。まったく、貧しく、ささやかであるけれど、争議団としてみんなの心と手でつくられた手づくりの結婚式。そして、たたかいとともに新しい人生を歩み始める二人への祝福の日。

結婚の集いといえは、よく、式は家族とかうるさい人たちで一度やって、気楽な集いを別に持つという場合が多いけれど、この日は、正真正銘、こればっきりの、結婚式およびみんなで祝う

集いということ。

争議中の若者たちのお祝いにふさわしく経費も安く、会費二五〇〇円でもあげようということで、争議団員は、みんなそれぞれ、役目を分担して、数日前から、会場や進行の準備、そして、料理などの準備を進めてきた。板垣てつ子など、女性の団員は、サンドイッチなど料理をつくるのに大童だったし、平井を軸とする音楽グループは、祝宴の演奏のための練習が大変だった。そして、光栄ある集いの司会をすることになったのが、相原夫妻。彼等が選ばれるのには、出身地による因縁があった。新郎の真喜志は沖縄、新婦の阿部ちゃんは宮城。そして、相原夫妻はその逆で、夫が宮城、妻が沖縄で、つまり、東北と沖縄のはるか離れて育った若者たちの聖なる愛の讃歌とともに歌おうということである。

同じ日本人といっても、沖縄と宮城では、気候風土から言葉、風俗、習慣まで、なにもかもひどく違っている。相原夫妻の場合にも、食事一つとっても、お互いの好みを調整するのに大変手間どって、交換機やコンピュータの調整よりはるかに難しい事業だった。妻は、ぬかづけのおしんことか、あっさりした野菜の味噌汁など、食べたことなく、沖縄では、必ず、あぶらの多い豚の三枚肉、豚足に、豚の耳まで食べるし、おつゆにも必ずといっていいほど、肉類がぶちこまれる。夫は、妻の家に泊って、つぎつぎに出される、豚の各部所の肉を眼を白黒してのみこむのに閉口した。そして、妻は、初めてみる東北の粉雪が、風になって、下から横から捲きあげてくるのに恐れをなし、夫の背に負われて、雪道を歩いたものである。恐らく沖電気での集団就職により、北と南の男女が集められなかったら、一生会うこともなかったお互い同士だったろう。

相原夫妻は、緊張して、後輩たちのために恥ずかしくない司会進行ができるよう、一生懸命練習していた。妻は、ぎりぎりまできりつめた首切り暮らしの中で、目をつぶって、夫の晴れの背広上下を、つるして買ってきた。入社の際に買って以来、初めての背広新調なのだ。

いよいよ、ベートーベンの第九「歓喜の歌」の調べとともに、中山代表夫妻に先導されて新郎新婦が入場してきた。内々の仲間・家族・友人を中心に、一〇〇人ほどの人たちが、じっと、二人を待ちうけ、大きな拍手で迎えた。

1 首なし若者の愛の成立

——こえてきたいくつかのヤマ

首のない若者と、職場に残った若い娘が、あらゆる条件を乗りこえて、たたかいの中の新しい門出をするまでには、いくつかの大きな山を越えてこなければならなかった。

若い二人にとって、まずなによりも、愛の成立が第一条件だった。次第に、自由なつきあいできにくくなった沖電気の職場で知り合い、よく、みんなと一緒に山に登った。お互いの気持が近づいてきたことはわかっていても、真喜志はいつも以上に口が重くて、なにも語らない。仕方なく、阿部ちゃん、名前をいわずに、ある娘がある若者にほれているけど、どうしたらいいかと、なぞと、真喜志の気持を聞こうとした。真喜志が彼女が自分の気持を打ち明けたのだという事を悟ったのは、もっと、ずっと時間が経ってからのことだったのである。

二人の愛の確認ができたなら、真喜志が首になってしまった。結婚をどうすべきか、考えざるをえなかった。ただでも、低賃金の若い労働者同士の結婚なのに、今は、固定収入といえ、沖電気品川工場部品二課に勤める二一歳の阿部ちゃんの入七万円ほどだけで、後は、真喜志が争議団員として働いてもってくる金額が加算されるのである。

でも、二人はもう迷いはしなかった。問題は、両方の親たちに納得してもらうことだけだった。

阿部ちゃんの家は、宮城県牡鹿半島の根元にある小さな島で、代々、漁師で生計をたててきた。今、お父さんは戦争で足を悪くして恩給をもらい、海には出ていない。かわって、長男がカツオ船に乗って、二、三カ月も、赤道あたりまで遠洋航海に出かける暮らした。阿部ちゃんは、昭和四八年に、この年二〇〇人の沖電気新入社員の中の、唯一人の中学卒業生として、入社した。その後、港区八潮高校夜間部を四年で無事卒業し、働きつづけているのだ。

阿部ちゃんの家では、彼女の熱心な説得と真喜志の誠実な人柄を見込んで、結婚への反対はなかった。ただ、長女が三月に結婚したばかりで、二人娘が嫁にいつてしまうと、今、落ち着いて働いている長男が、好きな人でもできて、家を出てしまいはしないかと、心配しているくらいだった。

真喜志家の方が、いろいろと、問題が複雑だった。まず、結婚以前に、真喜志が、会社を首になってもたたいつづけていることへの不安が大きく、とにかく、沖繩へ帰ってでも職を見つけて働いた方がいいという考えが、まだ、親たちの中に残っていた。

真喜志と阿部ちゃんは、二人揃って、両家および親戚への挨拶説得にまわった。二人で、東北と沖繩へ行くには旅費が大変だったけれど、人生の大事のためなのだから、無理をして、金を工面した。

真喜志家の人びと、親戚の人びとは、この若い二人のひたむきで、真剣な態度に好感をもち、二人の結婚を喜ぶ空気にかわっていった。筋を通して、親だけでなく、親戚にまで挨拶するけ



愛と仲間があれば……（真喜志の結婚）

目のある若者たちに、沖繩の大人たちが、すっかり惚れこみ、歓迎したのである。二人の真心が、沖繩の守礼の心に通じたのだ。

阿部ちゃんが、一生懸命、結婚しても、みんなに心配かけないよう、働きつづける

し、二人で立派にやっけていくからと、話しているのを聞いていて、真喜志の父方の叔母さんが、突然声をあげて泣き出した。

「よくまあ、会社を首になった、晃と、一緒になって、働いて頑張っていて下さると……あんなに小さかった晃がこんないお嫁さんを見つけて……ほんとうに有難うございます……」

叔母さんは、阿部ちゃんの素直な心に感動したのだ。とかく、家とか収入とか、派手でぜいたくな夢を追いたがる、今の娘たちの風潮の中で、七万円の収入、しかも、沖電気の修羅場に一人残って、夫を支えて働きつづけるという、若い娘の純粹な愛に打たれたのだ。もう、今は無くなってしまったのかと思っていた、けなげな働く女の真心に打たれたのだ。

「元気でな。身体にだけは気をつけて……」

叔母さんたちは、心から、二人の門出を喜び、祝福してくれた。

2 息子たちと仲間を信じる

中山夫妻の新郎新婦紹介につづき、二人は婚姻届に署名し、駆けつけた親たちに、感謝の花束を捧げた。

式が終わると、いきなり、争議団バンドの音が会場に鳴り渡った。八王子の富樫代表の吹きならす、トランペットの音色がひととき高く、せつせつと、二人の愛の讃歌をうたった。

平井のフルートも、八島のギターも、荒木のベースも、中野のドラムも、みんな、せい一杯、

歌いあげている。たたかいの中で、みんながつくる、この純粹な愛と友情の時を、心ゆくまで歌いあげている。本当に、なにかも、貧しいが胸をはってたたかいつづける若者たちが、まじりつゝ気なしの手づくりでつくった、愛の集いなのだ。誰もかれも、みんな、くつろいで、手づくりの料理を食べ、杯をくみかわし、歌い、語り、肩を組んで、たたかいの中の新しい青春の門出を心ゆくまで祝福した。ここにも、また「名指し首切り」という、会社の残酷非道な人間切り捨てが生み出した、たたかう人間の愛と友情と連帯の世界があるのだ。

秋田からわらび座の仲間たちが駆けつけて、祝いの太鼓の音を響かせ、北国の民謡と踊りを、二人に捧げた。

阿部ちゃんのお母さんお母さんも、真喜志のお父さんも、ソーラン節のリズムに身体を動かし、一緒に、声も出している。眼には涙さえ浮かんでいる。こんなに、手づくりで、暖かくて、しかも、こんなにすばらしい、自分たちの音楽をもった結婚式など、見たことないのだ。田舎で心配していたような、とげとげと、暗くて貧しい争議団のイメージとは、全然ちがうのだ。

「あの子は、人の中で、ちゃんと口をきいて、やっていけるだろうか……」

沖繩育ちの真喜志が見ず知らずの、冷い都会の人間たちの中で、ちゃんとやっていけるかどうか、お母さんは、それが心配だったのだ。

「ふくみが変な男にだまされはせんだろうか」

阿部ちゃんのお父さんお母さんは、わずか一学年一クラスの島の学校で育った娘が、明るくまともに幸せな家庭をもてるかどうか、それが一番心配だったのだ。

今、親たちは、この暖かい仲間たち、若者たちにとり囲まれ、新しい一步を踏み出そうとしている息子と娘の幸せを、確かにその眼で見、肌で感じる事ができたのである。首はなくても、収入はとほしくても、この暖かく、豊かで、聡明な仲間たちが一緒に進む限り、子どもたちの未来に不安はないと。人間にとって一番大事なものが、愛と連帯にあることを、働きつづけ、誠実に生きてきた、沖繩の父母も、東北の父母も、その身体と心で知っているのだ。

真喜志の父親は、飲びの心を、沖繩の歌に託してうたったし、阿部ちゃんは姉とともに、仲間たちと肩を並べ、若者の歌をうたった。この日、若者たちと家族友人たちは、一つにとけあい、いつまでも、名残りつきなく、交歓の時を過していた。

新郎新婦と両家の人びとは、婦りに、両家の近づきのために、はりこんで超高層スカイビルのフランス料理の店に入って、いささか恥ずかしい思いをさせられる羽目になってしまった。

勢いよく入って、コース料理を注文したまではよかったけれど、どっさり並べられた、ナイフとフォークの使い方を知っている人間は誰もいなかったのである。真喜志も阿部ちゃんも、東京住民とはいえ、一生に一度、結婚の時にでも眼をつぶって入るのがせい一杯であって、こんな高級料理店など、のぞいたこともなかったのだ。

「えれえとこに、入っちゃったなあ」

阿部ちゃんのお母さんは、小さな声でいったものである。

「私は、あんみつでいい」

とにかく、汗をふきふき、まわりのテーブルの人たちの食べ方をのぞいてみたり、必死のおも

いで、口におしこみ、なにを食べたのか、さっぱり思い出せないほど、みんなで、あがりっぱなしの晩餐であった。

3 二人そろって沖電気の門をくぐる

二人が無事、信州松本付近の新婚旅行から帰って間もなく、新居を訪ねてみた。六畳に流しつきの、ごく平均的アパートの一室に、新郎新婦は、少し緊張して、ぎこちなさそうに座っていた。

部屋の中には、本箱と冷蔵庫と小さな食卓があるだけで、まだ、学生下宿に毛の生えた程度のことたずまいである。もっとも、最近の学生は、洋服ダンスから家具一式にとり囲まれて暮らす手あいが結構いるから、まず、この新婚夫婦の部屋は、古来、日本の貧しき若夫婦の生活の原点に立っているといつて間違いないだろう。結婚式の時のみんなのカンパで、食器戸棚が贈られることになっており、冷蔵庫も先輩からのもらいものなので、正に、文字どおり、男と女が身体と心だけで始める愛の巣なのだ。

「料理つくるのが、二人とも一番にが手です。なにしろ、寮の生活しか知らないから……」

真喜志は青葉台寮、阿部ちゃんは女子寮、二人とも、家を出てから沖電気の寮生活しか知らないで、まだ、ろくに家庭料理などつくった経験がないのである。二人とも、あらためて、親たちの知恵と経験の大きさを思い出していた。三度三度食べて、子どもを育て、家族みんなが人間

らしく暮らしていくために、どんなにお互いが協力しあい、助け合って頑張ってきたものか、家族の連帯の力の大きさを、初めて考えられるようになったのだ。

「二人のうちは、夜も忙しく、二人とも外で外食ですむけどね……勝美さんとは大変だよね……」

ちょっと先輩の相原夫妻が、目下、0歳児を育てながら頑張っている姿は、二人のもっとも近い先輩像であり、目標なのだ。同じ沖繩出身の東田夫妻の三人の子育てをしながら頑張っている苦勞などは、どんなふうにしたら、その真似ができるのか、まだ、全然見当もつかない。でも、とにかく、三〇代の先輩たちはみんな、二人、三人の子育てをしながら、たたかいの中の生活建設をつづけているのだ。

阿部ちゃんの職場は、伝送関係の部品のコイルまきの仕事で、結構忙しく、平均二時間ほどの残業をしている。この仕事もほとんど機械化されて、外注に出されているけれど、難しい仕事や設備のないものだけ、手仕事で、つづけているのだ。

品川工場閉鎖という現実の中で、解雇者と結婚した、真喜志ふくみの仕事と職場がどうなっていくのか、それは、二人だけでなく、品川工場全労働者の運命にかかわっていることである。まさに、厳しい新婚第一日の朝である。

Ⅵ 沖のある場所は故郷

労働者はいつも貧しかった。

戦争直後までの「飢える」「ご飯が食べられない」絶対的貧困の時代はすぎたけれど、今なお、労働者は、新しい貧困の中で苦しみもがいている。真喜志、八島、シラケ世代若者たちのルーツもやはり、農村であり、漁村であり、都会の労働者家庭なのだ。戦後の産業構造の変化の中で、農業・漁業・零細企業など、従来安定した生産基盤をもっていた産業が行きづまり、大量の地方青少年が、新しい工業生産の周辺に流れこんできたところから、始まった。電機産業の資本家と労働者群のお互いの義務と責任の関係はまず、ここから始まるのだ。

板垣道明は、戦争前後の混乱で、適職に恵まれず、現在無職、涙金の老齢年金しか収入のない父母を山陰の田舎に残して、妻・子二人とともに生きているのだし、相原勝美は、沖縄で不安定な雑業に働く父母の娘であり、佐藤正子は、まだ独身といっても、すでに帰っていく場所のない青森の農村の娘である。

みんな一人ひとりだが、もはや、故郷にも、父母のもとにも、帰って暮らす条件をもたない労働者たちなのだ。たとえ、親や兄弟たちが、彼らを呼び戻して、「指名解雇」や「差別虐待」の現実から救い出そうという気持をもったとしても、もはや農村の生活基盤そのものの中に、出ていっ

た息子、娘を受け入れ、働き、生きていくことを保障するエネルギーが失われているのだ。

独身争議団員の一人、佐藤正子(25)は青森の農村部出身。家族は一町歩なにがしかの田と木材の伐採で、生計をたてているが、彼女の気持の底には、できれば、田舎で暮らしたいという願いがある。オルグや行商に疲れて、ふと田舎のことを思うと、無性に帰りたいくなり、どんな仕事でも、田舎の周辺で働けばと考えてしまうこともある。だが、親たちは「争議などやめて、嫁に行け」とはいうものの、帰って来いとも、どうするとも、聞いてくれない。彼女の身の振り方に関係するようなことは一言もいってくれない。

彼女は、今、争議の中で、自分の帰っていく場所のない厳しい現実を「女三界に家なく」という昔ながらの女の悲しみとともに、あらためてかみしめているのだ。親のつれなさをいう前に、彼女には百姓のつらさがわかってしまうから、自分のことは、いえなくなってしまう。心細いおもいで、久し振りに帰郷する汽車の窓から眺める田んぼの姿——減反のため、あちこち、草ぼうぼうになり、荒廃していく姿をみる時、正子は、農村でも、大企業でも、自分たちを襲っているものの赤裸々な真実を、そこに、みないわけにはいかない。彼女は、どこにも逃げる場所も、帰る場所もないことを、いやでも応でも考えざるをえないのだ。

彼女の出身地青森だけで、五人の争議団員がいる。板垣てつ子、八島、中野達弥(24)そして、飯田康男(29)である。沖電気社内に、青森出身者は大勢いる。とくに、高度経済成長期に東北と九州が、集団就職の主要対象地域になってから、急激に、その数が増えたのである。五人はみんな似たりよったりの境遇である。帰れば、土地と仕事が待っているような恵まれた人間は一人も

いない。飯田康男の家は、三トンほどの小舟をつかう、沿岸漁民である。父親はもう年とって、長男が後をついで、帆立貝の養殖を中心に頑張っている。養殖より、沖で、自然に育った貝をとる方がいいし、もっと大きい舟をつくりたいと考えているが、そう簡単に、見通しは立たない。弟は太平洋漁業で働き、労働組合の活動をしていて、彼に頑張れといって五万円を送ってきた。

真喜志と同じ沖縄組も負けず劣らず、貧しく厳しい生活環境に生きている。相原・市川・そして、一番先輩の東田熙子、みんな沖縄島が大戦の中で受けた、とりかえしのつかない戦禍の傷跡を背負って、成長してきた。彼女たちが生まれ育った戦後の生活の中にもさまざまな形で戦争の影が色濃く残り、なによりも、新しい支配者米軍政府によって、すべての生活の根っ子をおさえられていた。多くの人がびとが米軍基地の周辺で生活をたてなければならぬ、貧しく産業の乏しい沖縄の暮らしの厳しさを、彼女たちは、小さい時から、身体で知って成長してきた。経済的貧しさと精神的屈辱、その共通体験から、本当の独立と自由を求める沖縄の心を、彼女たちも知らず知らず身につけて育ってきた。

沖縄も、東北も貧しさとたたかい、日本近代の侵略と搾取の歴史を、住民の血と生きざまに刻みつけて、今日も生きている。

東田熙子の母と姉は、敗戦の時、サイパン島で米軍支配の屈辱に生きることを拒否し、自決しようとして、姉はとうとう自ら生命を絶ち、短い人生を終えた。相原勝美の両親は、働いても働いても、今なお米軍と基地の町のしがらみの中で、安住の生活をえられないで苦闘している。故郷は美しい。人間もなつかしい。だが、暮らしはますます貧しく、逃げ場のないしがらみの中に

ある。

労働者には、もはや、戻るべき故郷はないのだ。父祖の地に戻って、両親を養う、仕事も経済力も、息子や娘たちにはない。

企業のある街が、労働者の第二の故郷である。仕事と職場と妻子のいる街が労働者の故郷なのだ。沖電気のある街、東京が、八王子が、本庄が、高崎が、関東三三〇〇万人の生活圏こそが沖電気を支え、働きつづけてきた労働者たちの故郷なのだ。

沖電気の若者たちは、確かに、大きく変わり、成長している。一年前には、職場からほろり出されて、まったく、右も左もわからない若者たちの集団だったのに、今、こうして、日々のたたかいと裁判闘争とそして、家庭の建設のたたかいまで、一つひとつ、新鮮にいきいきと自分たちの心や身体を、豊かに成長させてきているのだ。自分のことだけでなく、仲間のこと、職場全体の労働者のこと、電機の仲間たちのこと、そして、東京中、日本中の仲間たちのことを考え、行動できる労働者に、成長しつつあるのだ。

争議は、若者たちの学校である。一九世紀から語り伝えられてきた、働く者の真理は、今、一九八〇年代から二一世紀を目指す、日本の青年労働者の人間建設の中で、見事に甦り、現代の若者たちの不変の真理として、新しく魅力ある若者づくりの世界を、一つひとつ拡大しつつあるのだ。

終章
芽吹き

——若き争議団の成長と支援のひろがり

I 沖一〇〇年の人間扱い

——軍用電信から超LSIを支えた力を食って

1 企業の礎をきずいた末に

私たちは、「指名解雇」という人道に反した手段まで使って、生産性をあげ、史上最大のもうけをつくり出そうとしている。「沖電気一〇〇年」（注、一九八一年にあたる）について、労働者の立場から、きちんと考えてみる必要がある。

沖電気一〇〇年の中で労働者の生活は、どう変わったか？ 幸せになったか？ 八五年前、近代日本の、最初の本格的侵略行動、日清戦争の時、沖電気にとっても最初の本格的企業拡大があったことは間違いない。

「黄海の海戦の勝利のあと、日本軍は長駆・清国の首都北京に迫ることになって、東京―北京間の軍用電信に必要な一切の機器、建築材料をはじめ付属雑品にいたるまで、すべての納入が沖電気工場に命じられたため、その製作、運搬に連夜徹宵の作業を続けなければならなかった。この作業は容易ならぬものであったが、これによって、大いに利益を得ることができた。沖電気工場の経営的基礎は、まず日清戦争時代に固められたとみていいだろう」（『沖電気工業九〇年小史』）

ダイヤモンド社刊より)。

この日清戦争を皮切りに、日露戦争・第一次世界大戦・満州事変・第二次世界大戦と、まさに、日本の侵略と資本主義発達のしがらみの歴史を通して、国家権力の歩みとともに、沖一〇〇年がつくられてきたという事実は、誰の目にも明らかである。

沖五〇年の歴史を体験した労働者は、もう職場ではみられない。四〇年の歴史の体験者、つまり第二次大戦中昭和一〇年代に、沖に入社した人たちも、もうすでに退職してしまっただか、"高等小学校卒、養成工出身"の人たちで、まだ、定年間で頑張っているか、といったところである。

この人たちは、"多かれ少なかれ、戦争中戦争後の厳しい生産体制・労働条件の中で働きつづけ、労働者の生命を、一銭五厘の葉書"か"消耗品"として取り扱った、官僚、軍人、資本家の下で、ただひたすら、沖電気の利益のために奉仕してきた人たちである。

争議団最年長の伊藤善正(58)は、高等小学校を出て、夜学で電機の勉強をしながら、昭和一四年に沖電気に入社し、当時の高浜工場(現品川工場)で手動電話や海軍の船舶電話などの製造事務の仕事をやるところから、労働者の第一歩を歩き始めた。

"希望退職をやめさせられ、現在、庭師になる職業訓練中のNさん(58)、"希望退職"の時に、第一次下請けを首になり、零細企業を転々とし、現在、第二次下請け企業にしがみついているAさん(59)、それぞれ、昭和一年と昭和一六年に沖電気に入社して、同じように、戦時中の軍需生産、そして、戦後の混乱期にはラジオ、アイロン、電熱器、工場によっては火箸の生産までするといふ、沖電気再建のために、文字どおり、すべてをかけ、"火の玉のよう"に燃えて働いてきた。

そして、朝鮮戦争から、本格的な、戦後再建、やがて高度経済成長時代への突入。電話交換機でいえば、手動電話交換機の時代からクロスバー交換機の時代、さらに電子交換機の時代へと、この六〇代、五〇代の労働者たちが歩んできた歴史は、まさに大戦から、今日の情報化産業時代をつくり出してきた、もっとも苦勞し、企業の礎をきずいてきた人たちの歴史であるといつて、過言ではないのだ。

この人たちが、前述したように中高年不要労働力として、多くの婦人労働者とともに塵埃のよりに切り捨てられたのが、今回の希望退職強要と指名解雇による合理化の一つの側面である。

2 高度成長を支えた「金の卵」たちの運命

この戦中派から、戦後再建の時代を支えてきた労働者群のつぎに、特徴的な性格をもって登場してくるのが、昭和三〇年代の高度経済成長時代前期に、全国の農漁村や都市の貧困層の中から一人二人とひき抜かれ、集められた貧しくても頭のいい少年少女たちの群といつていいだろう。

争議団の中村光子や辻野正弘(37)、そして、ひどい仕事差別とたたかっている板垣さんたちが、この時代を代表する「金の卵」前期の労働者群なのだ。この時代にはまだ、合理化や職場での労働者管理はそれほど激しくなく、貧しく学歴が乏しくても、労働者が大企業を目指し、そこで自分のものと呼べる仕事もち、才能を鍛え、人間として成長することが許される「働く自由」「能力をのばす自由」が、電機職場に存在していた。

その次が、昭和四〇年代、高度経済成長時代の爛熟期に、全国の後進地帯から「金の卵」の鳴物入りで、大量に集められてきた、いわゆる集団就職組の労働者群である。中卒から高卒へと金の卵の比重が移り、工業高校の電気科卒業生が、大企業からひっぱりだこで集められたのが、この時代で、若者たちが、エレクトロニクスや、コンピュータへの夢と希望を胸に、電機産業に流れこんだものである。だが、現実には大きなひずみがあり、多くの高卒労働者は、夢みた、研究開発や企画製図などの気のきいた頭脳労働ではなく、まったく単純な現場生産労働者にされ、しかも転々とつまらない不熟練労働の間を、ひきずり回されていく新しい型のブルーカラーになっていったのである。要するに、以前は中学卒業者をブルーカラーとしていたのを、一九六〇年代中頃からは、高卒者がそれにとってかわったといっているのである。今回の「希望退職」指名解雇の対象となり、たたかい始めた二〇代の高卒青年労働者の大半が、この状況の中で、電気に入社してきた人たちである。仕事も労働組合活動も一生懸命やって裏切られた屋代、上司に人間の絆を求めて裏切られた八島、彼らは、この競争と労働者切り捨ての労務政策に納得できず、人間らしい職場関係と仕事を求めて、立ちあがった若者たちなのだ。

そして、超LSIのIC生産とコンピュータ産業へと、力点を移しつつある合理化後、現在の職場では、大量の大学卒の技術者群が、計器や机を前にして、微細精密な頭脳労働に明け暮れる、頭脳労働ブルーカラーに変わりつつあると聞いていいのだ。

たとえば、沖電気本店・ソフト事業部のプログラマーたちが並んでいる、ただっ広い部屋を見渡すと、まことに壮観である。広い部屋に、大量の机と椅子が並べられ、見たところは、普通の

事務系オフィスと変わりなくて、違いは、その机の前に一枚のプログラム用紙をおき、じっと宙をにらんで、それぞれのコンピュータ、ソフトウェアのプログラムを考える技術者がズラリと並んでいる点である。まったく、外から見ると、技術者たちが、なにもせず、空間をみつめて考えているだけ。だが、その頭は、たえず、極度の集中力・記憶力を駆使しながら、それぞれの機能をもつプログラムを考案中なのである。

プログラマーや設計者たちは、仕事の性質からいえば、従来のブルーカラーの範疇に入っていた仕事とは異なっていることは確かだが、現実には情報産業が必要とする生産現場の一線労働者として要求される労働の質量からいえば、まさに知的現場労働という表現がぴったりしてくるのだ。また、賃金水準や独身寮の生活実態からみても、沖電気では大学卒技術者の場合も、高卒者と大きな差はなく、全体として巨大な頭脳生産労働の現場労働者群という見方が適切に思えるのだ。

戦後三四年間の生産現場における労働者の扱い方の特徴的な変遷を指摘してみたのだが、とにかく目につくことは、高度経済成長期に入ってから、この十数年での、労働の質・量のさま変わりすさまじさである。ほんの数年で新しい機種が発明され、技術革新が進むたびに、生産体制も技術内容もがらがらかわっていき、昨日生産の中心の花形職場であったのに、今日はもう、跡形もなく消えているといった変化が、つぎつぎにやってくる。しかも、電話交換機での、手動↓クロスバー↓電子という変化は、いわば技術革新の革命的变化といわれるほどのものであり、そのたびに労働者は、忙しく、自分の担当をかえられ、ふりまわされ、あるいは切り捨てられてきたのである。

II 解雇後の職場・勤務体制が示すもの

——どんな職場・技術をめざしていくか

1 沖一〇〇年にむけての職場体制

労働者は、沖一〇〇年の歴史を血と汗でつくってきた。沖電気の生産力のすさまじい拡大をやりとげ巨大な資本と資産をつくりあげてきた労働者——この人たちが、一人たりとも首を切られる理由はどこにもない。労働者は生涯働きつづける権利がある。まして、時代をリードする前途洋々たる産業と、自他ともに認める大手企業で、労働者を「指名解雇」するなどということは、どんなことがあっても、許されないことなのだ。

くり返していう。沖電気の現在をつくりあげてきたのは、明治・大正・昭和と、この激動の時代を、營々と勤勉に、働きつづけてきた、幾千幾万の労働者なのだ。

そして、今、「指名解雇」を頂点に、日々進められてきた「恐怖」と「踏絵」の労働者支配から、本当に、沖電気労働者の現在と未来をきりひらく、人間らしく豊かな、職場生活と生きがいが生まれてくるかどうか、少なくとも今、すべての沖電気労働者一人ひとりが、自分自身の人

生の問題として、正面から考えるべき時点に來ていることは間違いないのだ。そして、それは、すべての日本の労働者が、八〇年代の企業間競争や産業再編の状況の中で、自らの進路をきりひらくためにも、自らの問題として、うけとめ、沖電気の労働者の行く道を自らの運命としてうけとめる必要があることでもあるのだ。

現在、もっとも、会社の新しい労働者支配のあり方が表面化している八王子事業所の状況を見ると、労働者を追いこみつつある新たな職場の状況を、特徴的にとらえることができる。

八王子事業所は、今、沖電気経営者の考える合理化・体質改善を進める、キーポイントの性質を持っているといいだろう。

一つは、製品開発の面で、前に述べた超LSIなど、当面の情報通信機産業発展のポイントとされる、半導体生産の中心事業所であり、今後の九州工場稼動と合わせて、沖一〇〇年以後の戦略的重要性をもっていること。そして、今一つは「指名解雇」へのたたかいかいにもあらわれているように、職場労働者の中に生きつづけている、労働者らしい権利意識が強く、たたかいの伝統が生きている点であろう。

いわば物をつくり出す経営戦略と、労働者管理支配の戦略がもっとも激発している職場といっている。

職場では、三日夜勤四日休みの新勤務体制がIC関係のすべての現場に適用されるようになり、沖一〇〇年を目指しての、労働者の意識高揚に血眼である。

「会社再建のためにみんな協力しよう！」

「沖一〇〇年にむけて世界にはばたこう！」

といった、労働者自らがつくったスローガンが六〇〇も集まり、労働者の自発性で沖一〇〇年運動を盛りあげようと必死である。その中核部隊は、係長など下級職制群であり、昔のように部長、課長など上からの訓示で物事を進めることをしない。すべて組合員でもある下級職制群が、自分の意見でみんなに働きかけ、職場から再建の自発的な運動が起こっていく形をつくり出すわけである。

多くの大企業ですでに完成しつつある、社員参加の行動スタイルであるが、沖の場合、現在、「指名解雇」と経営危機宣伝の中で萎縮した空気のある労働者の意識感情を、会社・組合タイプの危機打開運動で一挙に振いたたせるやり方をとっているのだ。

最後は、沖一〇〇年をがんばろうという意見になれば誉められるのだから、みんな、次第に、そんな意見しか口にしなくなる。

「自発性どころか、踏絵じゃないか」

会議が終わると、労働者は、本音をいうけれど、少なくとも、進行中には、積極的に、会社を批判する言葉は出しにくい空気が、八王子でも支配的になりつつある。

年が明けてからは、ある技術職場で、SBU体制についてのスローガンを、ある一人の労働者が「S！」と叫ぶと、みんなが、「新時代を迎えて、みんなで結集し」とつづき、「B！」というと、また、「敏速に行動し」とつづけるといった光景があちらこちらで見られるようになってくる。これは、松下電器などで、社員結集に常用している唱和運動である。

こうした、意識高揚運動とともに、現場では、三夜勤四日休の新勤務体制の中で、労働者の生活感覚は、急速に、強引に、変えられつつある。

この新勤務体制は二〇代後半から三〇代半ばまでの労働者には、深夜労働のうえに、一日は休日出勤して、いわば、荒稼ぎのできるいい体制だという人もいる。賃金、一七、八万の労働者が半導体製造で二五万から三〇万を手にする状況が、確かにあるのだ。

いづれにしても、頭脳現場労働といわれるプログラマー技術者が、残業徹夜の連続で、月一〇〇〜二〇〇時間も頭脳を酷使するとか、このIC生産を徹夜連続でつづけるような、情報産業が要求する労働の質と量が、労働者の人間的生活にどのような影響を及ぼすかについては、まだ速断できないことが多いことは確かである。だが一ついえることは、短く、集中的に、そして、機械に合わせて人為的に人間の能力が開花させられ、一〇年も、そのテンポとリズムでやっている、だいたい限界状況にきてしまうことであろう。プログラマー・三五歳定年説もあるけれども、八王子のこの勤務体制も、今後一〇年間ということになっている点も、一〇年先のことは、会社は考えたくないということでもあるのだ。

一〇年の後に、その労働者や技術者が、どんなふうにも、自分の能力を再生産し、新しい働き方、生き方をするのかは、会社のはじき出す、コンピュータには、まだ、計算されていない。とにかく、今ある知的・肉体的能力を、需要と生産のテンポに合わせて、とことん使ってくれということなのだ。

労働者は、一〇年先の自分と企業のあり方に、漠然と不安をもっている。不安をもったまま、

眼先の、「沖一〇〇年で未来を！」と叫ぶ、会社の増産体制の中で働かされているのが現実なのだ。

2 ご都合主義の査定ですむのか

——一〇年後の技術・仕事・職場の建設の見通しを

開発関係の技術労働者の中では、唱和運動はないけれど、朝の勤務時間前の体操の強制が踏絵の役割を果たしつつある。

ある職場では、課長が、「強くお願いする」という形で、一人ひとりの技術者に頼みこみ、二人ほどの労働者が、仕方なく自発的に、勤務時間外体操に参加する返事をせざるをえなくされている。それでも、二人は、参加を拒否したといわれる。

この体操に参加するかどうか、争議団の門前ピラを受けとるかどうか、カンパするかどうか、争議団および職場の積極的活動家とつきあうかどうか、これらが踏絵の基準となって、一人ひとりの労働者の賃金査定が下されるわけで、その影響は昨年の昇給や、一時金の査定、特別報償金の出し方に、確実に反映されている。

だが、そこから、明らかな矛盾が生まれ、技術者の中に、不満と意欲の減退が生じていることも確かな事実である。

ある開発グループ全員が、差別査定を受け、数千円から万単位の報償金ももらえない事態が生

まれた。

当然、その技術者たちは面白くない。理由は、そのグループの開発のリーダーシップを、積極的活動家Kがとっていることにあるらしいといっても、追求されれば、職制たちは、そうはいわない。いえないということであり、さらに、問い正せば、この査定は、当該職制が決めたことではなく、上層部で決めたと答えざるをえないのだ。

なぜなら、このグループは、技術者同士の協力連帯がうまくいっており、みんなで、優れた開発を行ない、八王子事業所の製品売上げの割にもなるような重要な開発を行ない、沖電気の実績向上に大変大きな力となっている事実を、当の部課長は認めざるをえないのだから。だから、仕事の貢献度というのなら、まず、このグループの人たちなども、率先して、特別報償の対象にあげられてしかるべきなのだ。

技術者の中に、不当な差別への不満が渦巻き、そのことへの憤懣がさまざまな抵抗となつてあらわれる。酒を飲む場で、私生活で、時には、課の忘年会の席でも形となつてあらわれる。係長といい、課長といつても、同じ、技術者仲間の、ちょっと先輩か同僚であり、お互い、力は知りつくした関係なのだ。だから、もし力がないのに、処世術で、係長になつたとしたら、人間的にも、技術的にも、スタッフをまとめる力はなく、さりとて、もともとは技術屋なのだから、労務屋に徹することもできない。「俺は寂しい……」こんな言葉が、下級職制である技術者からもれたとしても、まったく、当然といえるのだ。この現実の中から、差別反対の行動がおこり、きちんとした仕事を評価しない会社の方針とたたかう行動が、起こり始める。八王子の技術関係労働

者の査定の不当をただす行動がそれであり、芝浦での板垣さんの不当配転へのたたかきもそれである。そして、時間外の体操強制は、労働基準法にも違反する事実も、労働者が気づき始めているのだ。

沖電気の将来を心配している、ある本店の技術者がいった。

「開発の仕事は、人の和です」

「指名解雇」の「恐怖」をかかけて、進められている「踏絵」的労働者支配の一番の弱点は、この「人の和」を、職場から失わせるところにあるのではないか。

労働者も技術者も、今、自分たちのつくり出している沖電気製品が、ますます激しさを増す、市場競争の中で、その生命をもちつづけ、発展しつづけるかどうかについては、経営者以上に關心をもたざるをえない。その意味では、間違った経営方針とたたかう労働者たち、技術者たちも、人一倍沖電気を愛し、未来をおもっているといっている。

だからこそ、今、IBMは別格として、日本国内でも、日立、東芝、日電など、一〇社もの大企業が、半導体生産に力点をおき、現状では、沖は、その一〇位くらいの力だといわれる地点に立って、これから会社のいう、五位か六位の実力を備えるようになるには、正に、本心に、心底から、技術者労働者が一つになって、その全知全能をふるわない限り、この企業間競争に勝ち残れないことも、よくわかっているのだ。

前にも書いたように、とくに、技術者は、自発性と創造性が生命力であり、そのことを大切に
する人間集団と組織がなければ、開発競争に力をつけることなど夢のまた夢なのだ。しかも、こ

の時代をきりひらく、頭脳と技術には、お金と自由がなによりも必要。だが、沖の賃金は、今も、日電・富士通から二〜三万は低いというのが定評であり、一方、新しい半導体生産にのりこむ大企業は、国内企業でも、沖の賃金の倍はボンと出すというのが現実なのだ。沖の経営陣もそのことは百も承知だろうけど、といって、労働者全体の低賃金抑圧政策の中で、技術者だけを倍にすることもしにくい。そこで、特別報償金で何千とか、一万とかのプレミアムをつけることになるのだが、こんなことでは、恐らく、今後、予想される、外資系大企業の日本上陸によってまきおこるであろう、技術者引き抜き戦争にはとても勝ち残れる見通しは暗いだろう。

賃金が安くても、いい仕事ができるということは、技術者や芸術家にとって、もう一ついえば、人間らしい仕事と職場を求める人間にとって、きわめて決定的な人生選択の基準である。

だから、たとえ、この情報通信機器開発の修羅場と戦場の中でも、沖電気の職場が、とことん労働者と技術者を大切にし、“指名解雇”などの恐怖政策でなく、人間と未来を信じる、製品開発と製造に献身的に努力する道が開けるならば、そこから、企業の未来像と、労働者の人間らしく幸せに働き生きる道との、接点が生まれてくる可能性があることだけは確かである。いや、この道しか、恐らく、沖電気が企業間競争に勝ち残り、労働者も生きつづける道はないのではないだろうか。

とにかく、職場と技術について、一言だけいうならば、今、沖電気は、能力あり、やる気のある技術者および現場労働者がワンサと必要であるということ。これは、恐らく、お互い一致できる点であろう。

しかも、沖の古い技術者がいうように、今までの技術者は、時間かけても、いい開発をして出せば、量産競争のことなど、後で考えることだったが、これからは、速戦即決、すぐ役に立ち、市場競争に勝てる開発にのぞむ能力をもった技術者が大量に要求されるということである。ということは、そんな技術者がころがっているわけではないのだから、新しく、教育し、つくっていくことがまことに重要になる。そんな技術者の卵を育てることのできる、現在のスタッフを大切に、しかも、ゴマスリでなく、本当に技術と人間を大切にする指導的技術者や労働者を大切にすることこそ、沖電気経営陣が血眼にならなければならぬ課題ではないのか。

アカとかクロとかいって、有能な技術者や労働者にレッテルをはり、みんな本音をいわなくなるような職場から、新鮮で、みずみずしい、能力や仕事が育つはずがないのだ。

日本の大企業が、道理に反した、人間抹殺の労働者支配をつづける限り、やがて、自らの競争支配の戦場で、同じ運命をたどることもまた、予測がつく。

そうなることを、誰も望みはしない。

なによりも、生涯をかけて、沖電気に働き、未来を求める、沖電気一万三〇〇〇の労働者の幸せのために。そして、働く者の幸せのために。

Ⅲ 若い争議団の成長を支える

— 財政・家族会の充実

1 すべての人の知恵と力を

七一人の労働者たちが、やむにやまれぬたたかいに立ちあがってから、二度の正月を迎え、一年二カ月の月日が過ぎた。

会社がどんな口実をつけようと、名指して、労働者の首を切るとは許せないし、頑張り抜けば帰ることができると確信して、七一人は、今日も、人びとの中を歩きつづける。

「三カ月も、もてばいいところ」

「半年すれば、半分は脱落するよ」

「なんてたって、やわな大企業の連中だし、シラケの若者も多いし……」

「殿様争議だよな。一人ぼっちでたたかう、中小、零細の首切り闘争とはわけが違うよ」

さまざまな声があり、確かに、批判が当たっていたことも、いろいろあるように思う。

ピラのままき方を知らず、人前で、自分が首を切られた話のできない労働者が少なくなかったのも、偽りのない事実。

だが、とにもかくにも、一年二カ月、裁判のたたかいは始めてからは、一人の脱落者も出さないで、今日まで来てしまったのだ。

「正直いって、初めはどうなることかと、大変でしたけれどねえ、だんだん変わってきたよねえ……危なっかしくていいたいことはいろいろあるけど……そういいながら、いろんな人たちや組織が、知恵も力も貸すようになるんですよ……これからが、いよいよ本格的なたたかいになるから、一人ひとり、きちんと、自分の筋道が立てられるようになるかどうか勝負だな……」

沖争議団が加入した、東京争議団の渡辺清次郎議長の言葉である。

たしかに、さまざまな人の知恵や力を借りて、七一人の若い争議団が一日一日新しい現実にぶつかり、慌てふためきながら、なんとか乗りこえて、いよいよ、大切なたたかいの山場を迎えようとしている。人数も少なく、進行も一番早い本庄の裁判は、順調に進めば、来年には、判決が出ることになるだろう。

昨秋で、全員失業保険も終わり、今や、全員自力で働き、支援する会の会費、そして、全国各地の数知れない労働者のカンパに、支えられて、たたかいつづけているのだ。

七一人が家族一緒に、なんとか暮らしていくことは、この物価高の時代、想像以上に大変である。独身の若者たちは、いざとなれば、会の事務所に寝泊りして、パンをかじり、インスタントラーメンをすすれば、なんとかやりくりもつくけれど、家族持ち、二人三人の子持ちとなると、なんとしても、必要な生活費はつくり出さなければならぬ。

アルバイトに十数人がいき、全員で、行商にとりくみ、なんとか、暮れを越したけれど、ま

だ、なかなか全員の生活の見通しを立てるのは難しい。「支援する会」の会費一万口をさしあたり、二万口に拡大することが必要であり、夏冬の行商も、もっと効率よく、利益のあがるやり方を工夫する必要がある。昨年暮れの行商では、ウイスキー、クリスマスツリー、しいたけ、シクラーメン、本など、あまりにも、種類が多く、仕入れ先もバラバラのため、注文に敏速に応じ、品物を揃えるのに、苦勞した。慣れない商売のため、契約した時の品物より品質が落ちていても、値引きさせたり、とりかえさせる知恵も、なかなか働かない。それでも、全員総がかり、支援の仲間にも応援してもらって、二〇〇〇万を売り上げ、四〇〇万ほどの生活費をつくることができた。生活費を稼ぎ出す苦勞とともに、日々の暮らしの工夫や助け合いが、きわめて重要な意味をもってくる。

2 さまざまなジャンヌダークの登場——家族会

一九八〇年二月、厳しい寒さの中、芝浦会館に、二〇人ほどの家族が集まり、家族会が誕生した時のことである。

若いお母さんたちからは、勤めながら、アルバイトしながら、夫のたかいを支える苦勞や悩みが、話された、なによりも、子育ての苦勞が一番で、安い公立保育園に入れること、送り迎えを、夫婦のどちらがするか、共通の悩みである。須田夫人の場合は、自分自身が保母であるため、勤務時間をきちんと守り、人並み以上に働くために、自分の子のことを考えていられなくな

ることがしばしば。やりくりがつかない時には、夫に協力してもらおうけれど、それは、オルグや行商などを途中で打ち切らせることになってしまう。

高崎から、初めて参加した、岡田夫人も、やはり、いつも家にいない夫を待って、神経をビリビリさせている母子の気持を語り、また、二人の若いお母さんが同じように、新聞も読めず、世の中の動きにもうとくなくなってしまう生活の重荷について告白した。

せい一杯に、はりつめた、若いお母さんたちの気持をときほぐすように、一番年輩の中村光子のお母さんが立ちあがり、話し始めた。

「こういう時は、頭つかって、やりくりすることが一番です。やりくりは、昔からやってきましたから、苦になりませんけど……八百屋にいったら、大根の葉っぱをもらってくるんですよ、若い奥さんたちは食べませんからね。油あげと一緒に、油でいためてやると、孫もおいしいおいしいといって、食べましてね。なにしろ、八百屋の店に捨ててあるもの、みんなもらってくるんですよ……」

戦争と貧乏の中を、たくましく生きぬいてきた、お母さんの生活の知恵は、また格別であり、三〇歳そこそこから、二〇代の若い母親たちのともすると狭くなりがちな気持を、ほっと暖め、ほぐしてくれる。大根の葉と油あげの油いため——この、昔からの貧乏人のご馳走は、安くて、栄養があって自然食のよさも、子どもに伝えることができる。高くて、まずい、冷凍食品しか知らなかった、若者たちに、食生活の原点も教えてくれる。

「うちの光子が、こんな大きな運動やってるわりには、のんびりしてましてねえ……」



1人の指名解雇も許さず——闘争一周年集会

みんな思わず、笑ってしまった。

中村光子は、ここに並ぶ若い母親からみれば、争議団女性リーダー格の一人であり、勤続一六年のベテラン労働者だというのに、お母さんからみると、やはり、苦勞の足らない現代っ子というわけなのだ。

「争議のことだけでなしに、保育園のこととか、地域のこととか、いろいろ、出ていかなきゃならないことがたくさんあるんですけど、光子が疲れて、行かないなんていうと、いってやるんですよ。少しくらい頭痛いなんていったって、気の持ちようだよって……なにしろ、世の中よくすることを早くやんなくちゃって……」

お母さんのこの気迫が、娘たち親子の生活を、下からじっと支え、近所に住む、仲間たちのたたかいても支える。光子の一人息子(7)を、三二人の応募者から八人しか入れない学童保育にもぐりこませようと、一生懸命、運動する

し、また、争議団最大の子持ち、東田夫妻の子どもを公立保育園に入れるためにも、一生懸命奮闘する。担当のケースワーカーをつかまえて、きっぱりという。

「もし、東田さんとこの子を入れないなんてことになったら、あんた方の責任は重大だからね。わかっているだらうね。正直に働いて、悪い会社に首を切られて、一生懸命頑張ってる親子が生きていけなくなんだからね」

入園の可能性が出てきても、相手が悲鳴をあげるまで、お母さんは毎日電話をかけつづける。「それにしても、東田さん夫婦は、本当によくおやりだよね……朝、三人の子を一人ひとりどけにいつて、夕方また、連れ戻しに行く。雨が降って、子どもたち、ずぶ濡れのまんまで、買い物をしてねえ、可哀そうにいつていつても、このぐらい、平気だなんていつてねえ、子どもも、強くなりませよ……。それでも、いくら若くても、夫婦で熱出して、寝こんだりしたら、大変なんですよねえ、親子五人枕並べて、一つ部屋でねえ……本当に世の中、よくしなくちゃ、早く勝つて会社に戻してあげなくちゃ……」

途切れそうになつても、つぎつぎと、また、つづける、この大正生まれのお母さんの話は、居あわせた、すべての人間たちの心に、暖かい灯をともし、明日への希望を植えつけた。自分のことは、一言もいわずに、娘のこと、孫のこと、仲間のこと、世の中のこと、そして明日の勝利への願いを、淡々と語りつづけてくれるのだ。理屈ではない。人の情と助け合いの欲びを人生の宝として、働きつづけてきた母の存在が、どれほど、たたかいと連帯の世界に大切なものか、みんな、この争議の山場で、初めて、知ることができた。

親の力だけでなく、幼い子どもたちも、また一生懸命、争議を支える。

この日、夫婦で出席した中山争議団代表夫妻は、会議終了後、久し振りに、二人の子と夕食をどこかレストランですることになっている。父がいつ帰るかわからず、母は沖電気の職場に残って働きつづけるのだから、小学校四年のあゆみちゃんが、いつも、弟の淳君を保育園に迎えにいき母が帰宅するまで留守番していることになる。母はもう少し、子どもの側にと思っただけで、高崎の長井や同じ品川の真喜志と一緒に解雇されたものの妻として、後指をさされないように、人一倍気を遣い、誰にも文句をいわせない仕事をしなければならぬから、どうしても、子どもたちに、しわ寄せがいく。

あゆみちゃんは、あまり口にはしないけれど、お父さんが普通に勤めているお父さんと違うことを知り、自分なりに考えているようだ。

いつか、駅前で、ゼッケン胸につけて、首切りの事実を訴えていた小父さんをみて、あゆみちゃんは、側に寄っていった。よく、わからないけれど、お父さんと同じような人なのだと思い、応援してあげなくちゃいけないと考えたという。手をさし出して、小父さんの配っていたピラをもらって、大事そうに、家に持ってきた。

小学校四年ともなると、みんな塾に通いだしたり、友だち同士のつきあいも、いろいろ難しくなる。父親としては、厳しい活動スケジュールに追われていても、やはり、姉弟で留守番している二人の顔が、浮かんでくる。そんな時、せめて、声だけでも、電話でやさしく様子をきくと、意外に、つっけんどんな答えが返ってくる時がある。

「用事はそれだけ。切るわよ」

「どうしたの？」

中山が心配してきくと、忙しそうな声でこたえる。

「早くしてよ。雨が降り出して、洗濯物入れてるんだから、忙しいのよ」

あゆみちゃんは、立派に、母親の役をつとめ、洗濯物を取り入れ中だったのである。

中山夫妻が、最近、ちょっと心配なのは、あゆみちゃんが前は、どんな集まりでも、一緒に歩いてきたのに、どうも嫌がるようになったことである。関係のない大人の集まりでも、一緒にいる方がいいだろうと思って、そうしてきたけれど、やはり、考えてみれば、子どもには面白くないのが当たり前である。あゆみちゃんに、次第に自分の世界ができてくると、たとえ、親と一緒にでも、じっと我慢していることが耐えられなくなってしまふのだ。

「できたら、集まりの時に、誰かが子どもの面倒をみて遊んであげたり、時には、映画やスライドなんかして、子どものための仕事も一緒にやるようにしたいと思います」

中山夫人の提案で、これからの家族会の時には、必ず、子どもたちへの対策を考えようということが決まった。たたかひの中で、子どもたちが、人間らしく育つ道も、自分たちの連帯でつくり出していくのだ。たたかひのことを知らなかったら、若い母たちは、自分の子のことしか考えなかったかもしれない。中村の母が伝えてくれた、貧しいけれど、強く賢い働く者の知恵と生き方をひき継ぐことも忘れてしまったかもしれない。

大企業が行なった労働者殺しの行為の中から、当人たち同士、そして、それを支える、数限り

ない連帯の輪が、つぎつぎに生み出されていく。財産もなく、仕事もとりあげられた、労働者とその家族に、無数の働く仲間たちの手がさしのべられる。組織をもち、財産も持つ、大きな労働組合が忘れ、変質させられようとしている、労働者の団結と連帯の世界が、地を這うように、一人ひとりの労働者の努力によって、生み出され、つくり出されていく。

IV ひろがる支援・共闘

1 電機産業・地域の支援

三田の「撤回させる会」の事務所には、毎月、必ず、同じ、電機産業に働く仲間たちが、支援と学習にかけつけてくれる。日本電気、富士通、東芝、ソニー、松下など、競争会社の労働者が、企業の壁をこえて暖かい支援の輪を広げ、月二〇〇円のお金やカンパ、時には、車や労力を提供して、沖電気の労働者を喜ばせている。

「この運動は、沖電気の仲間のためだけでなく、自分たち電機労働者のためです。合理化の中で、朝お早うといって入門したら、夕方門を出るまで口をきかなかったり、人と触れあわない職場になって、労働者が、人間同士の連帯を忘れてしまう毎日です。若い労働者が、ここに来て、狭い事務所に大勢の仲間がひしめき合い、語り合い、喧嘩しながら、いきいきと行動している姿

に驚いたり、感動したりします。ここで感動していろいろなことを熱心にやるようになる若い娘さんも出ます。われわれ、電機の労働者の運動にとって、沖電気のたたかいは、生きた教科書だし、電機の労働運動を深いところで変えていく、再生のための場所だと思つてます」

たたかいの最初から、この事務所に通いつづける、日本電気のKさんは、胸をはっていう。この電機労働者の中で、「支援する会」会員は、二〇〇〇から三〇〇〇へと増加しつつあるのだ。東京各地で、神奈川で、埼玉で、千葉で、そして、愛知で、大阪で、多くの電機労働者たちが、沖電気闘争を「支援する会」に、五人、一〇人と加わっているのだ。

支援する会は現在、一万名に迫り、全国一の大きな支援組織となっており、今後、五万人会員を目指す、広範な運動を展開するために、小島宏事務局長はつぎのようにいう。

「人間的な喜びを大事にするという考え方が必要です。指令や命令によってではなく、運動を通じて喜びがえられる、自己犠牲の中で本当の人間として、労働者としての自分の存在をたしかめる、こういったことが守る会運動の大きなポイント」

そして、多くの労働者に呼びかける。

「二年目が勝負を決める運動の年と言われていますが、沖電気のたたかう仲間を早期に勝利させるために、あらゆる可能性を追求し、工夫をこらした支援活動を」

産業をこえ、地域をこえ、さまざまな労働者の中で、支援の行動が広がっていく。

地元、八王子の地区労働組合協議会は、さまざまな困難を乗り越えて、とうとう、沖電気指名解雇者への支援を、議長見解承認の形で、決めた。

「 議長見解

一、沖電気指名解雇撤回の支援闘争について八王子地域労働運動の原点にたつてこれを支援します。

二、当面のとりくみは「争議団」として要請される、裁判闘争にかかわる署名、物資のあつせん、販売、資金カンパとします。

三、高尾地区労組懇談会など地域共闘における沖労組八王子支部の今日までの役割を高く評価するとともに、今後とも地区労の中で活動をつづけるよう強く要請します。

この議長見解に賛成をしたのは、沖労組を除く全員ということで、国労、全通、都職労、都教組、トリオ、八王子交通など、多くの職場に働く労働者が、この配慮に満ちた、感動的な決定をしたのである。国労八王子の石井代議員は、「首切りは労働者に対する死刑に等しい」と、その気持を、出席者に訴えた。

ついに、壁が破れ、労働者の組織ぐるみの支援が各地に広がり始めた。東京の東部六区（足立、葛飾、江戸川、墨田、江東、荒川）の、人情共闘といわれる地区労組織が支援を決め、板橋、練馬、中野、文京、豊島、三多摩各地などの地区労も、つづいている。高崎でも、本庄でも、その支援の輪は一日一日、次第に大きく広がっている。

このたたかいの裾野の広がりの中で、昨年末、また一つ大きな労働者の連帯行動が生まれた。

それは、沖電気争議一周年を記念する、東京の労働者の集まり。東京地方労働組合評議会の重要単産である、全国一般、都教組、都職労、新聞労連などが軸になり、東京争議団の組織をあげ

て、沖電気闘争一周年の集まりが開かれたのである。一五〇〇人をこす労働者が会場を埋め、国労をはじめ自治労、全通、日教組、私鉄総連の各青年部長などから激電もよせられた。

この集会は、今まで、別々に、たたかいを進めてきた、指名解雇とたたかう、四つの組織、「沖電気の不当解雇を撤回させる会」(六一名)、「沖電気(八王子)指名解雇を撤回させる対象者の会」(六名)、「沖電気指名解雇撤回闘争支援共闘会議」(二名)、「新左翼系グループ」(二名)が、不当解雇を撤回させるたたかいを進める視点で、それぞれの不一致点をこえ、沖電気争議団の形で、統一を実現した集会でもあった。

沖電気の名指解雇と正面から対決するたたかいの中で、内外の統一と団結が、一步一步、前進をつづけている事実の重みは、きわめて大きい。元総評事務局長岩井章氏が、この争議団の統一の意義を高く評価した。

月一回、必ず、争議団と共闘する仲間たちとともに、抗議にいく、沖電気本社への行動にも、全国一般東京地本石井書記長や、各地区労幹部たち、労働運動の指導者たちが、一緒に参加するようになった。

二月、滋賀県で開かれた、電機労連中央委員会の会場では、実によく、沖電気争議団のピラが受けとられた。関西オルグをかねて、屋代、藤原、富樫、箕輪、鳥越が滋賀にいき、ゼッケン胸に、電気の仲間たちに、ピラを渡した。沖電気労組への配慮で、受けとってもらえないのではと心配したけれど、ほとんどの代議員が、ピラを受けとってくれた。参加者一二〇〇の集会で、一二〇〇枚のピラがさばけたのである。

「しっかり、頑張ってたな」五人は、電機の労働者たちが、自分たちのたたかいに強い関心をよせている気持をひしひしと感じた。

2 かぎりなく明るい本庄の事務所

——県内の支援熱く

沖電気七一人のたたかいの広がり象徴する建造物が、高崎線本庄駅の近くにたっている。上野方面から本庄駅構内に入る、少し手前、左側に、「沖電気は不当解雇を撤回せよ」のスローガンをはりつけた、プレハブ二階建の建造物が目に止まる。

これこそ、闘争一年にして、沖電気争議団本庄グループが、たった三人で、多くの埼玉県内支援者の力を借りて、つくりあげることのできた、たたかいの砦なのである。

それにしても、身一つ、食うことが敵しい首切られた人間たちが、事もあろうに、歴とした事務所を所有できるなどということは、また、どういうことであろうか？

経緯をきけば、なるほどと思う。

これまで、首を切られてから、三人が事務所として、一隅を貸してもらっていた大家が、埼玉土建本庄支部の事務所。初めは、西も東もわからなかった三人が、埼玉県内の労働者組織を訪ねて歩くうえでも、また、日常の世話をふくめて、なにからなまでに、この、大工さんや左官さんで組織する労働組合の一方ならぬ世話になった。

三人で手分けして、県内の民間や官公庁の組合をまわり、支援をお願いして歩くうち、次第に行動範囲も広がり、なんとしても、自分たちの勝利のため、また、一緒にたたかう地域の仲間のため役に立つ事務所がほしいという要求が強くなった。

そんな時、土建の仲間が、ある建築現場の現場事務所がいらなくなるから、安く買えるという情報を入れてくれた。

話は一挙に具体化した。

推進力は、支援してくれる仲間の情報と知恵がすべてだった。まず、土地を貸してくれる人を見つけること。借りられた土地は線路に近いから、電車が通る度に揺れるけれど、たたかいの宣伝にはもってこいの土地である。

そして、ぎりぎり安値で買った、プレハブ事務所を、解体して運ぶ作業は、すべて、本職の、土建の仲間たちの友情である。

気迫こもった、抗議のスローガンの字は、本職のペンキ屋さんが、技術料ぬき、実費だけでかいてくれたもの。

さらにまだある。完成した事務所を使う、机・什器の類も、みんないただけ物であり、きわめつけは、中古だが性能きわめて優秀な印刷機一式で、さる公務員組合の好意によるものなのだ。

敵冬の真っただ中というのに、この事務所の二階には、太陽の光がふりそいで、暖かく、明るく、そこに座る三人の笑顔にも、憂いの色はなかった。紅一点の宮部嬢が買いに走ってくれた、とりどりのサンドイッチを食べながら、たたかいの一年をふり返り、語り合った。



連帯

ともに頑張りぬいた、指名解雇対象者たちが、最後には、再就職できなくなるの脅しと血縁のしがらみで、涙をのんでやめていった。その人たちは、今もなお、この土地で暮らし、まだ、再就職の決まらない人たちもいる。今も、三人を励まし、応援してくれる人たちも少なくない。

笹井団長と南本とは、ともに、一年違いで、本庄高校を卒業した、生粋の土地っ子。宮部は、牛を飼う父と弟の三人暮らし。三人とも、ここに生まれ、ここで学び、沖電気に人生の夢を託し

て生きてきた土着の人間たちなのだ。だから、今、三人が、沖電気資本の人間切捨てと胸をはってたたかうことは、すべてこの土地に生きる人びとの願いと本音を代表する行動になっているのだ。多くの人びとの中に、沖電気に

たてついても……”という思いがあるとともに、“ひょっとして、頑張つて勝つてくれたら……”という期待が、ひそかに支援する人びとの胸の中にあるのだ。

「そうですよねえ、支援して下さる皆さんの、そういう気持が、この事務所をつくってくれたんですよ。埼玉の皆さんのおもいでできた建物ですよ」

この、とてつもなく明るく楽しい事務所を、本庄の町につくりあげた原動力を南本はこう語った。

沖電気争議団七一人は孤立していない。労働組合からほうり出されるころから始まった、七一人のたたかいは、今、東京、八王子、本庄、高崎、各事業所のある町に、自らのたたかいの砦を築き、みんなの力で、二年目のたたかいを広げるところまで、到達した。

そして、七一人が日々、たたかいつづけ、支援の輪が大きく広がる中で、一日たりとも忘れることのできないのは、自分たちを育てた職場のこと、その職場で、さまざまな新しい合理化攻撃に苦しみながら働く、沖電気労働者のこと。

3 私たちは訴えます

——職場のみなさん、電機労連とすべての仲間

中山争議団代表はいう。

「私たちは、本当に無我夢中でした。大変なことになり、これからどうなっていくか、どうした

らしいか、試行錯誤しながら、せい一杯たたかい、指名解雇の不当を人びとに訴えて、今日までやってきました。

沖電気闘争は、二年目にして、ようやく、広範な労組による、支援共闘会議を結成し、沖電気を社会的に包囲する態勢を展望できるところまで、前進して来ました。

このことは、当初私たちが、労働組合の中で主張していたとおり、『首切り許すな』という訴えは、大きな世論を獲得できるし、日本の労働組合運動は、指名解雇を許さない力をもっていることが、事実として証明されつつあるのだと思います。

支援の発展は職場の仲間たちにも大きな励ましとして、うけとめられています。自分たちの労組が見捨てた労働者のたたかいを金属や公務員や教員などの多様な労組が支援していることを知ったことは新鮮な驚きとなっています。

私たちは一貫して、指名解雇の狙いは一万三〇〇〇労働者に対する合理化だと訴えてきました。が、沖のその後は、まさに、そのとおりの進行になっています。

今、沖電気は『史上最高の利益』、宮崎工場の新設、新社屋の建設に向けて、ひた走っています。そして、それを支えるのは、二〇〇〇人労働者のいる品川工場の閉鎖、配置転換、残業と夜間勤務の拡大、矛盾を押えこむための教育と職場の専制的な支配の確立です。

しかし、労働者の英知はたたかひの苦衷を背負いつつも、なお、それを許してはいません。争議団支援を理由とする、報復的な賃金差別に対しても、素早く、鋭い自発的なたたかひが組織されました。沖一〇〇年のキャンペーンの嵐に吹きとばされることなく、だからこそいっそう職場

の中に、たたかうエネルギーが、今、蓄積されつつあるのです。

私たち争議団が毎月やっている門前カンパには、会社の妨害と監視の中で、一〇万近い金額が寄せられ、半数以上の労働者がピラを受けとる状況がつづいているのです。

これは水面下のたたかいと連帯の反映だと私たちは考えています」

沖電気労働者とその家族が、多くは水面下からそっと、時には、公然と手をさしのべて、七一人を支援する姿は涙ぐましく、限りないたたかいのエネルギーを育てている。

門前カンパの時、そっと近づいて、渡してくれる封筒はズシリと重く、中には、家族で貯めてくれた、五円玉、一円玉がぎっしりつまっている。

事務所には、毎月、匿名で、同じ差出局から、二〇〇〇円のカンパが送られてくる。

また、社宅を訪ねると、奥さんが、残業が多過ぎて、夫婦語り合うこともなくなった悩みを語ってくれ、息子は、きっぱりと返ってくる。

「親父は会社協力派のようですけど、僕は、みなさんのたたかいを支援します」と。

さらに、職場では、最近、芝浦に立つ、七階と一二階の技術センター構想をいち早く伝えたピラ、八王子工場の三泊四休の新勤務体制になるふくろう部隊のことを伝えたピラが反響を呼び、「争議団のピラが、労働組合のピラより、ずっと親身になって、職場労働者の状態を考えてくれるのではないか」と、話し合われている。

そして、本店、品川、芝浦で、争議団員によって定期的に行なわれている、残業や休日出勤の実態調査の時には、労働者が近づいてきて、声をかけてくれる。

「私はね、職場で、肩を落として、涙ぐんで、やめていった人たちのことがかわいそうで、今も忘れることができない。君たちも、身体に気をつけて、しっかり頑張ってな」

別の人は、そっとお金をさし出していう。

「みんな、生活はやれるんだらうか？ ぜひ、負けないで頑張って、帰ってきて下さい。職場にいる人間は、君たちのたたかいが頼りです」

たたかう七一人は、この職場の人たち、一人ひとりの力を大切につなぎ合わせ、水面下に広く、深く広がる、沖電気職場の「支援する会」を築きあげようと努力する。

そして、七一人と職場の労働者が、しっかり手を結んで、これ以上、悲しい労働者の犠牲が出ないよう、しっかりたたかう決意を固め、実践しているのだ。

中山代表が、最後にいう。

「私たちのたたかいは、沖の一万三〇〇〇労働者の痛みを、自分のものとし、沖の労働者を初め、電機五〇万の労働者の要求に基づいたたたかいになり切った時、勝利することができると考えます。

職場の仲間たちが、きびしい合理化の中で、もう少し楽な気持で働きたいと願う気持、せめて、女房と家族らしい団らんを持ちたいと願う気持、生涯、沖で働きつづけたいと願う気持、そして、必要な合理化の方向にそって、きちんと教育研修を受け、働きつづけたいと願う気持、残業なしでも暮らせる賃金を願う気持、能力や希望にそった仕事をしたいと願う気持、こうした、すべての切実な願いを実現するために、七一人は先頭に立ちます。そして、恐らく、今、沖に働

くすべての労働者が願う、人間らしく働きつづけられる沖の職場づくりのために、とことん頑張りたいと思います。

そして、私自身、心から職場に帰り、仕事につき、一万三〇〇〇の仲間たちとともに肩を並べて働く日を指折り数え、日々、人びとの中を歩みつづけしております。七一人、みんな同じ思いで、頑張っております。

みんな、暗くはありません。たたかう欲びを知り、みんなで力を合わせて生きる感動も身につけました。

でも、私たちは、沖電気労働者です。

この、沖電気および、日本の電機産業の大きな合理化と変化の時代に、みんなと一緒に働き、みんなと一緒に職場を守る責任を果たしたいと切に願っています。

そう遠くない日に、職場に戻り、みなさんと再会できる欲びを胸に、全力をつくしてたたかうことを、お誓いします」

4 問われているものは何か

私たちが一年三カ月の、沖電気の指名解雇のたたかひに見たものは、七一人のたたかう労働者の現実だけではなかった。私たちが、そこに見たものは原子力、通信、航空という、超近代産業がおし進める技術革新と合理化の下で、労働者が人間らしく生きつづける道をきりひらく苦悩と

たたかいいではなかったのか。

今度の「指名解雇」は、沖電気特有の乱暴で、しかも計算されたやり方ではあるけれど、大事なことは、沖資本の行動もまた、日本の独占大企業が、すでに各様になしてきた途であったし、現状をきりぬけ、八〇年代をきりひらこうとする、資本に共通する法則的な行動だということではないだろうか。

やり方は、なるほど「指名解雇」はやっていないにしても、さらに巧妙に、組織的に労働者を切り捨たり、強圧的な職場・生産体制を実現している、三菱であれ、松下であれ、石川島播磨であれ、独占大企業の行為は、まさに一企業の個性をこえた資本の法則にもとづいた。大企業の「犯罪」と呼んでいい性質をもっているのだ。そして七〇年代に、賽はすでに投げられ、幾千幾万の労働者が大企業から涙をのんで消えていったのだ。

それにしても、こうした大企業の本性に深く根ざし、国家と独占大企業が推し進める、技術革新・合理化の全体像と彼らの描く未来社会像について、労働運動は、その路線を問わず、どう対応していけばよいのだろうか。その事態についてあまりにも少ししか知らな過ぎたのではないか。ましてや、この問題が首を切ることで解決していくことなのだろうか。沖の場合でいえば、さらに先進産業という労使ともに予測できないような未知の問題もかかえてさえているのではないか。

そして有無をいわせず、首切りに協力させられた人びとのすべてが、今のままでは、七一人と同じ道を歩まないですむ保証が、どこにあるのだろうか。すでに七一人のいなくなった職場で、

彼らと同じ扱いを受けて苦しむ労働者がつきつぎに生まれているではないか。

今こそ、みんなで力を合わせて、お互いの仕事と職場と家族とそして、未来の幸福をつかみとる時ではないだろうか。

誰かを切り捨てたり、追い出す道ではなく、中間職制も技術者も、すべての労働者が力を合わせて、働きたいのある職場を育てる時ではないだろうか。

激動の八〇年が始まり、地球時代と呼ばれる二一世紀が眼の前に迫っている。

石油危機の中で、超LSIとコンピュータが、すべての生産体制を根底から変革しようとする時、われわれはなによりも、その変革の中で、人間生活がどのように変えられるのか、どこまで、省力化が行なわれ、労働者がどのような扱いをうけるのか、その点について、国家と独占資本の描く未来像と行動計画を的確にとらえねばならないのではないか。

そして、私たちは、この新しい国家づくり、産業づくりの中で、権力と資本の新しい労働者支配、人間支配を打ち破る、新たな労働運動の道をきりひらくことを、なし遂げねばならないのではないか。

沖電気七一名の指名解雇を撤回させ、電機労働者の権利と職場を守るたたかいは、まさに、今から始まる、この第三の生産革命の時代における、新しい労働者階級の連帯と労働運動の第一歩をきりひらく、最初のたたかいと呼んでいいのではないか。

労働者階級の新たな連帯が、大いなる時代をきりひらき、真の働くものの世界に、力強く前進し始めているのだ。

いま ぎき あけ み
今 崎 曉 巳

著書 ドキュメント

「こぶだらけの勝利」 「いのちの讃歌」 「伊那谷は燃えて」 「友よ！ 未来をうたえ」 「続友よ！ 未来をうたえ」 「三菱帝国の神話」 「若者はいま歩みはじめる」 「いのち萌え」（以上、労働旬報社）

「千代田丸事件」（現代史出版会） 「新たななる連帯をもとめて」（学習の友社）

講座 親のための教育学第4巻『中・高校生の子どもをもつ親へ』（ダイヤモンド社）

小説「吼えろ青春」（労働旬報社）

シナリオ「娘たちは風にむかって」「あしたの火花」「教育は死なず」

テレビ「判決」「若者はいま歩みはじめる」など。

現住所 〒114 北区西ヶ原1-63-14 TeL 910-9454

沖電気争議団 代表 中山森夫

東京都港区三田3-2-20 TeL 455-6006

なにをみつめて翔ぶのか——沖電気・指名解雇をこえて 検印略

1980年3月28日 初版第1刷発行

著者 今 崎 曉 巳

発行者 柳 沢 明 朗

発行所 労働旬報社

千代田区神田神保町

3-17-28 協同第1ビル

03 (263) 7141~5

振替 東京0-180374

装 幀

アルファ・デザイン

写 真

ジャパン・プレス 藤田庄市

印刷所

憐東銀座印刷出版

製本所

倫坂本製本

『支援する会』入会のよびかけ（要旨）

沖電気工業株式会社は、電電公社、諸官庁などと密接な関係をもちながら成長した、赤字経営でもない大企業です。

その会社が一層のもうけをふやすために「あなたはどういらない」と千三百名に近い人たちを希望退職という名で解雇し、さらにこれに応じなかった七八名を一九七八年十一月、労働組合を無視して指名解雇しました。

「指名解雇」された沖電気の仲間は「大企業の減量経営により、雇用不安が広がっている時に座して泣き寝入りするわけにはいかない」と解雇撤回まで闘い抜く決意で奮闘しています。

私たちは、働くことよっていのちとくらしを守っています。沖電気の不当な「指名解雇」を許せばあらゆる職場で「指名解雇」の嵐がおそいかかることとなります。私たちは生きる権利、働く権利を守るためにも、沖電気の仲間を物心両面から励まし、必ず勝利させたいと思います。

困難な長期の闘いも予想されますので、一人でも

多くの方がこの「会」に加入し全面勝利を闘いとるまでご支援くださるよう心からよびかけます。

よびかけ人 代表 黒川俊雄（慶応義塾大学教授） 山本薩夫（映画監督） 柳田ふき（日本婦人団体連合会会長） 小島成一（弁護士） 増田孝雄（東京都教職員組合委員長） 岸 良信（東京都学生自治会連合委員長） 芹沢清人（東京新聞労働組合委員長） 坂本吉雄（三多摩労協副議長）

指名解雇された沖電気の仲間を支援する会 会則（要旨）

- 一、目的 本会は沖電気の不当な指名解雇と闘う仲間がすみやかに職場復帰を勝ちとるために物心両面で支援することを目的とします
- 一、名称と事務所 名称は「指名解雇された沖電気の仲間を支援する会」（以下「支援する会」という）とします。「支援する会」事務所は、東京都港区三田三一二〇、沖電気の不当解雇を撤回させる会内におきます。電話（03）4511・3515
- 一、会員（1）「支援する会」は個人加盟とします。（2）複数の会員のいる職場、組織には支部をおくことが出来ます。
- 一、会費 一口二百円とし目的達成まで毎月納入することとします。（何口でも可）

